[illegible]

特別
へ4
8105

ヘ4
8105

<2001-300>

續古今和歌集巻第一

春哥

立春の心をよみ侍りける

前中納言定家

あらたまの天の岩戸あけて出る日に霞そ立ちて春は来にけり

崇徳院に百首歌奉りける時

藤原清輔朝臣

いつしかと年ふりにけるしるしには一夜のほとも春は来にけり

右大臣に侍りける時家に百首歌よませ侍りけるに立春歌

後法性寺入道前関白太政大臣

さほ姫の霞の衣かけてけりまつ山の末は春や来ぬらん

春河の心を

前中納言為（？）

わか明の空に衣かけてたなひく霞春はきぬらし

初春霞といふ事をよみ侍りける

前大納言為家

雲みより霞の衣たちのほる春は来にけりとしらるる

寶治二年三月百首歌中に早春霞を

太上天皇

たちのほる霞の衣いつのまに春をむかへて立わたるらん

是三の乃中よ　中務卿親王

おほえの三田ふ人の歌をすくしこそや月夜にまた　ありける

百首よみ侍る所に是三の

光明峯寺入道前摂政殿下

参のあさ此屋乃とかす日や神代乃年みえしめ給ふ人

初春の心と　紀貫之

是歌立いそしきと見より此ふ書る人君がため

中務卿親王

是後しまの君やぬ志の花の面影にて其はあ

是書根

前関白左大臣

いさし和泉年内としあけぬさるまとせいはむ君が為

建保参年内裏よ百首歌奉る時

前中納言定家

是霜河雪宇れ流よ出て哭の声やまず後ゆ

是乃始の歌　後京極摂政前太政大臣

此けふしめの日の宿世に君てを濱川は是尋ぞ哭

百首の歌れ中有

後鳥羽院御歌

是風はいまの山の霞も猶よ海の志賀れ流

建保四年百首の歌たてまつりし時　光明峯寺入道前摂政左大臣

かくれなき河瀬の冬の夕霞清く朝日はあさみえぬ白雪
まつ雪か中川

順徳院御製

春日野やまだ霜枯の春風にすゝ(?)あをき萩の
題しらず

権中納言長方

見はやせん若菜つむ野の旅人に[illegible]萩の
末葉

正治二年百首歌奉りし時

前大納言忠良

若菜つむ春の萩の焼原[illegible]袖にあまるまで
霜

文永二年七月白河殿にて人々百首歌よみ侍りし

よせ侍しに　前右大臣

こぞのまゝ雪間もわかぬ春日野にやよひの若菜
けふぞつみける(?)

若菜をよみ侍ける

前大納言為家

よそ橘我衣手はあやなくも若菜の野べにふる雪かな

衣笠前内大臣

浅みどり霞の衣春きてもすそのゝ原の今やわかなに

従二位家隆

ふるさとの若菜摘み野にきてみれば[illegible]雪
[illegible]

土御門院小宰相

祢のひのまつねと称る恋多く越さいの君の袖ね
さけり

雪中子日といふことをよみ侍り

白雪のうちにもねの野への小松原千年にかへる子の日の
因幡の時むすひつる子日よ

平兼盛

子日して君か引つる小松原千代をかさねて代をいのらん

永保四年中宮子日

贈太政大臣

ふかき君か子日の松をひきてこそ万代まてあかぬためしに

子日のまつは

太上天皇

子日をし千代のためしとひく松は昔にかへる松にひかれん

建長三年三月吉の会に子日と

たまのをの長きためしをひきそへて君か代まてもいはふ

まつのこゝろ中有

今上御製

ゆたかなる君か代のためしの子日の松のみとりの初春

入道前太政大臣

入道二条太政大臣家子日

まつ時もみな雪のうちに子日する

西園寺入道前太政大臣 実氏

ちらされしならは雪か花の色まかひけり今朝鶯の声

入道二品守覚親王

梅の花よそふる宿とし鶯の初音そしるくゆきに霜ふり

雪のふりける日鶯の鳴なるは

土御門院

鶯に花の衣の雪をはらひやまぬてふ梅のこすゑの二度め

雪中梅花といふ心を

花山院御製

梅のうへはありしさかりの白雪はあくまて色にはしらねは

杉ながらこそ流をと

藤原基俊

紅にやゝうつりそ雪消ぬ梅といひしとはまし

正治二年たてまつりける百首の歌

皇太后宮大夫俊成

子顔てはやからぬかすみのうちの梅の木をか

花洛春月と

従二位家隆

まやも花の香にあらそひて雪月ながらの風のにほひ

建保四年たてまつりける百首に

入道前太政大臣

のどかなる霞二條の梅の花いまや春をつくしてき

右歌内大臣家にて野霞を

藤原隆信朝臣

わさみゆり霞よきりかいそのゝ久堀の野も見えし三笠の

郷の秋

山邊赤人

非秋

山の端に月のいさよふかさゝきの藤原ぬくて霞ほとしあ

柿本人丸

あはに来て春日の原をみわたせは松の上に霞たなひく

弘長二年内百首よ霞を

中務卿親王

まきていは霞そらに白雲かゝりして嶺の松たゝ

百首歌召されける時

順徳院御製

浪まより名有りけり高砂の松のみえかくすさ川わ

建仁元年二月歌合に霞隔遠樹と云ふ

ことは

前中納言定家

海邊まてはる磯の松の緑にも見えすく霞のすゑの浦

題しらす

後鳥羽院下野

こほりゐし山の明ほの霞にかすみて花磯のまく

心ある人のなかやみすもしる難波の入江のまへしあり

右千首の中に江上霞

ふよつてき

見わたせはかすみのうちもかすみけりけふりたなひくしほかまの浦

元久の詩歌合に水郷春望といふ事を

醍醐入道前太政大臣

まの果の明石もや舟はのみといへ山本を霞こそわかん

百首歌よみ侍りけり

皇太后宮大夫俊成

わか方稀志ふとりして三年也ゝ霞のしてぞ奥津白浪

従二位家隆家にて浦霞といふ事をよみ侍

けり

藤原秀能

さほ姫の衣はる風霞の袖よりも白妙み

題しらず　中務卿親王

みつの浦のなみよりうかふや山のはに立霞

摂政の百首歌中に

わかの浦の浪のわかなをとれはかすみてもし

朝霞を

従二位家隆

またの夜の月の光の名残とやわかの朝日にたなひく

摂政の百首歌中に

光明峯寺入道摂政左大臣

春のきてかすみやまよふさかれんてはしめのわか菜衣

月花の使に梅花とつけて年始朔とて

今上御製

忘れそめ志る人もなかりける梅の首と

建長六年三月歌合に梅と

中納言為氏

山さとハ人もまちける梅の花の香にこそ人ハ来ましけれ

同五年三月に庭梅といふ事を

院大納言典侍

と人あかす宿と思ひけり梅の花人にやかをる香にゝほへは

三百六十首歌中に　中務卿親王

春ハまた人の心をとめさせて梅の花のさかりをもまた

寛元元年女御入内屏風に

軒ちかき白梅はなかきとにほひけるその梅の香の色香も

宝治二年百首歌中に梅薫風と云ことを

梅の里に梅の匂ひをさそひくる風の色香ハしらぬ白妙

正治二年百首歌に

前中納言定家

うちとけぬ人にこそあれ梅と白妙の色香もしらぬ梅の

梅の歌とて　前参議孝

主人の家の梅の花本末にありて香に匂ひけり

亭子院敏行朝臣の家にて梅花

ゆく人をとめかねてかへしける時によみ侍りける

近

ちりぬともこれをそへん梅の花散なは匂ひの香は残らさらまし

麗景殿女御家歌合歌

平兼盛

我宿に咲ける梅の香のにほひ植し梅の花や咲らん

更衣元善さとにいりていたりける日

光孝天皇御哥

梅乃花ちりぬるまてにみし人の心に飽ぬ色そのこれる

題しらす

柿本人丸

この宿にさきたる梅と月影によるさへ清み人はなし

梅花をよみ侍りける

衣笠内大臣

ゆふやみにまよふ月かけあらはれて春の花宿に白梅

百首歌の中に

後京極摂政太政大臣

霞とも雲ともみえぬ山の端のまひの梅にたなひく

柳をよみける

山辺赤人

あさみとりそめてかけゝるとみゆるまてなみにかけたる柳なりけり

岸柳を　　大納言通方

ねさしてはみをもまかせて流るゝ岸の青柳の糸

百首歌中に　中務卿親王

色も香もかはらぬものを谷風の吹よりみたる青柳のいと

前右兵衛督教定

霞にはふかきみとりの青柳のいともみたれて春風そ吹

仁助法親王家五十首哥に春月

従二位家隆

雲はれて風吹たにも霞むよハうき身の月の影そまされる

中務卿親王家百首歌中に

中納言

身のうさになかめなれにしさらぬたに人よりまさる春の月かけ

後久我前太政大臣家十首哥に

土御門院小宰相

里は花のちるまてかけてかすむ夜ハあはれとさそふ月の影

春の夜の月とよみかれ

権大納言顕朝

月影のかすむは花といひなしてまたはかすみをそめそめけん

中務卿親王

わきて流るゝ河音もさえてさそやまぬ袖にやどれる秋の月

従二位家隆

さほ姫の霞の袖に張る山におぼろにかすむ春の月

建保四年百首よませ侍

入道前太政大臣

月影の山のはかすむ春の夜は[illegible]

帰雁をよめる　衣笠内大臣

かりかねもかへる山の名のみにて月かけのこる浦の[illegible]

千五百番歌合に

二条院讃岐

海も山も路の雪やさえぬらん霞の衣かりかねの[illegible]

建保二年内裏月

従二位家隆

霞中にさそふも花の春風に[illegible]

後京極摂政太政大臣

いさゝかも山の桜のかたみの[illegible]

千五百番歌合に

前大納言為家

待ちかねの山の桜はわかぬ[illegible]白雲

花のうたとて

左大臣基平公

佗(アタ)ぬる名と思へ桜花またやいのちの宿かりまし

後鳥羽院御製

見てもなほおくある花にそめはてて奥ある道みよしのの山

後堀川院民部卿典侍

よそにみるかつらき山の白雲は風にそよけは花やちるらん

建保四年百首歌

従二位家隆

桜花咲ぬる時はよしの山のすそまて匂ふ白雲

遠山とこそみれ

後堀河院少将

白雲の花にかゝりしあらしかは桜さくなる木の山

千五百番歌合 太上天皇家

ふるさとやそのかみ山のおくさくら雪ふりそむる雪とみゆ

行路尋花といふ心を

藤原清輔朝臣

もろこしの花の枝にかゝる雪みよしのの白雲

花歌中に

藤原雅経朝臣

よしの山花にかゝれる白雲やいつれの嶺の桜なるらん

大宰大弐高遠

白雲のたなひく山とみしはたゝ花の白雲なりけり

入道前太政大臣

桜色の初花そめし唐衣ちりやしほれん木のもと

法成寺入道前摂政家屏風に

藤原長能

いくよのまれにさとも世へ来りも年にさける山さくらは

名所花とよるの桜

前中納言定家

日に見つくたきまの山のさくら花まえとくや星人

建長六年三月三百歌合に桜と

前太政大臣右相と
十七

雲さこ見よ手に我そめ不知よみ桜よろの

またれ侍の

続古今和歌集巻第二

春歌下

葛城山の峰よりかゝる山桜とかまかふ白
雲絶ぬ花のさかりとみゆらく

太上天皇

まことにや御代のならひにみよしの花ぞさかりなる天の岩戸の名

家に歌合し侍の哥

中務卿親王

さかぬ世も山の桜や匂ふらん手庭の袖に匂ふまである

百首歌人々よませ侍りけるに

面影やなれし衣の袖やまよふらんとりかへすかす花の色

洞院摂政左大臣

初瀬山花の桜は花のみえさかりけて白雲の

前大納言為家

清慎公三月晦日花見侍る時読侍
りし

平兼盛

山桜あくまで色を見つるかな花ちるべくも風のふかねば

建暦の比南殿の花さかりのころ中院御遊に
よせ侍りける

順徳院御製

吹風も治れる御世の春は花みる時もしつかなりけり

建長六年三月三日歌合に

侍従行家

あらそはぬ思ひの多かる心やや花にそそめし

花山院中納言

右近中将経平

くれやすき春日影とおもひてもなほみてもあかぬ花

宝治二年百首に見花といふことを

太宰権帥為経

ここそ花山の峯まて花におもひいれねは山桜かな

題しらす

鷹司院按察

吹風もをさまれる山の春にあひて千代もかはらぬ花の色かな

右大臣に侍りける時百首よみ侍りけるに花といふことを

後法性寺入道前関白太政大臣

こゝねには旅のいほりも秋の宿のあはれと人の身にしみける

花月百首よみ侍りけるに

後京極摂政前太政大臣

久かたの天つ空には庭の上の花にも人の心かよへる

弘長二年十月三日権中納言に侍りて静見花と

いふことを

[illegible]

めくれぬ宿は桜の花さそふ風に人もまかせてなるらむ

前関白左大臣

あまさね花の陰にてくらす日の花はみてなほあかぬ心を

衣笠前内大臣

花みてもまれに心の月のあかぬ春を世にふる何ゆゑの身

建保元年内裏三首歌合に海中花夕

前中納言定家

桜ちる花のしたにはなく春の一夜はともにまて山守

同二年内裏歌合に河上花

花の色をしとやあるらむ玉櫛の花の下ゆく白波のたつ ゆき

久寿二年二月人丸影供清輔朝臣に侍

しくる時花下言志といふ事を

左京大夫顕輔

家わかれおしむ花のもとにて物思ふを年ふるのみぞしる

建保四年の百首の内

入道前太政大臣

わかまたもかはらぬ花のこゝろにてなにとは代々の思ひ出

花に浮中川

後鳥羽院御哥

ちるものの末にわけこし桜のみちはなにの花ぞとあくらく

百首花を　題月下落花

花の都よむかしにかはる代の人あはれにそはし

亭子院乃哥合題

在原元方

たのましき花の色とおもふ人やちりぬさかりに常なき

延喜の御時東宮文人会に

貫之

かけて山の井すゝしたて桜花ちりかんはそのまにて年もへにけり

西園寺まて花の顔わするゝとき侍らす中よ

入道太政大臣

このまれ桜と雪とすめいつ都そみすしまれうそれ

なかめてはあそはまはるの桜花山ともたかれ雪さなそ

弘長元年百首之哥奉りける時

前大納言為家

よしの山もちるとしれ山桜花のさかりと雨降りく

花の比さかりんとよけりく人よけりかきる

月花何流

春の夜は花の比またて年に稀なる人のいさと

香こそありけりけるんかな

堀河院中宗

ながらへて此比まて桜を見る人はまれなりやましき老人

日吉社へ五十首哥奉りける

従為相信卿

よしの山桜よりこそ夕霞たちて勝のなは立ぬらん

題しらず

人丸

夕やみはおほつかなきを月影の花のかけにや花の名残さん

正治二年百首に

後京極摂政太政大臣

やすらひて桜かり人ゆく山の端にいさよふ月と見まかひぬ

百首歌中に

九条左大臣

雲か白花の色におきて木の間とあかる夜半の月

月の比内裏女房あまた花見にまかりけるにかはね侍りける

入道前太政大臣

めつらしき花の木間と見る月にいまや都も雲の上人

主殿のうちにて

参議資平

あかなくに法花残るかけの雨ふるをへもまつ秋の月

月なき花とみるはしからさりける

閑大郎先生

ほとゝきす月に名のるやとく花ちる山のあけほのゝ空

千五百番哥合に

二条院讃岐

今はとてまれに見る花や月のさしも顔の白妻
昔語となりてくらしける哥合に

正三位知家

いつまでか雪とやいはん見ぬ人のみよしのゝ花の都に

題しらず

躬恒

春の林の東風白雪と散花ちる木の下にみやこ人

西院皇后宮にて家にまゐりて
まゐりける時三月桜さかりに上達部殿上人

しりてあそびけるによりて

大納言経信

庭の上に吹くる風のかをりとも思ひ知らるゝ
花ちるとて

鴨長明

明ぬるか末重ねたる坂の谷風に散花ともなし

百首哥中に

左大臣

うら山春風の中に吹きとも猶ちるといふ花の寺

慈円大僧正

山桜花やあだなる花ぞこの春風たへく

題しらす　　性助法親王

さくらさくよしのゝおくの花とのみすゑや風のねさそふらん

文永元年内裏にてよませられける百首に　　大納言良教

あかつきの花の白雲明ゆきて風にも七遠の梢はいさ見えし

千五百番哥合に　　大納言通具

明ぬとも梅の木の下風はかをるまてさゆる庭のあは雪

宜秋門院丹後

春風はちらしの花やちりぬらん雲そかゝる小初瀬の山

陽明門院の皇后と申ける時内にわたらせ給ひけるに御こゝちそこなはせ給ひて又の日花のちり侍けれはえ奉られ侍る

枇杷皇太后宮

なをさかりなる時の花なれはちるも風とそ根にかへりけれ

題しらす　　式子内親王

ゆめのうちもうつろふ花に風ふけはしつ心なき春のうたゝね

正治元年よませられける百首に　　前大納言忠良

ちらは桜の霞はよものはなとさくあらしの見えぬ風の音

宜秋門院丹後

霞こそ花ちる嵐の朝かをもへだてやれぬらめ
遠き人
まつとそ　人丸

ちりぬとも見てこそ帰れ山桜まだ嵐のちらぬかぎりは

躬恒

あかなくに何よりまさると桜花ちる嵐は風のゆるさぬ
とか

道助法親王家五十首に山花を

従二位家隆

山桜ちりぬるかたのみよし野の霞の袖はなほまたれつゝ

雨中落花といふことを

後鳥羽院御製

やま姫の霞の袖やぬれぬらん花ちる風にかゝる春雨

雨中思花といふことを人のよみにとよせ侍りけるに
よみ侍りける

一条院御製

晴る夜の雨はふりても春の夜をまれにぞ花とそらけれは

宝治二年百首に

右内大臣

まちかねて吹くらん何の声てふ風吹花をとゞめて雨に
まどと

花前中月

入道前太政大臣

とまれてと峰のか山の花ならで嵐に惜む人よし

源俊頼朝臣

いはぬ人の心や根にまかせ桜のとかつ思ひつゝ見

祝部成茂

よし野河花もあやなく霞みかてらちる山吹の浪

延喜十三年亭子院歌合に

坂上是則

水底にさへ山吹の花の影をかはつ鳴なりて咲かも

題しらず

山辺赤人

春の野に菫つみにと来し我ぞ野をなつかしみ一夜寝にける

夕菫菜とふ手

太上天皇

あさちふのとも菫さへ夕ま暮すみれつみにし

河款冬

後鳥羽院御製

玉川の岸の款冬影みえて色なる浪にかはつ鳴なり

文永弐年七月七日白河殿にて七百首歌

人々よみ侍りける款冬を

藤原光俊朝臣

さかりなる小鴨の浦のやまぶきはたびゆく人のみさかりなる

田家萩と　待賢門院堀川

さよふけて鳴沢にこゑみえて田中井手の萩なれや

萩なし　衣笠内大臣

ふるさとのまかきのはなのしたにして[illegible]萩の花

岸萩を　前大納言為家

初瀬川波のをちこち萩みえて[illegible]なるはなくし

洞院摂政家百首歌に　前中納言定家

まねかれて[illegible]萩の花もさかりなりけれ

光明峯寺入道摂政内大臣の時の百首

月暮まて

まちいてゝ[illegible]月かけにて[illegible]海

百首歌奉りける時　前参議忠定

なりぬるや月の光のまたしらぬ[illegible]

藤花を詠侍りける　中務卿親王

さきそふる[illegible]藤のむらさき[illegible]

正治二百首歌　従二位家隆

ねはまた[illegible]折てかさむしろに[illegible]

題しらず　　貫之

常盤なる松の名たてにあやなくもかゝれる藤のさきてちるらん

三月晦日の日藤花を

姫大納言

なくくれてあすよりはなき春のなこりをたゆまとおもふのへかな

建保四年百首歌奉りし時

大僧正慈鎮

あかなくにまた別れぬる花とみむ庭にさく花のちりのこるかな

暮れぬる春のとまりもしらす

後三条院御製

いまはとて春のわかれのおしけれは山の花いたしかな

同三月の花といふことをよみ侍りける

藤原忠房朝臣

またなおもあかぬ別れの春を見て花をおしむとこゝろなく

三月盡の心を

右近大将通

いまいくかのこるともみえぬ春の別れにまたなかるゝ

あすよりはいかにせんといひし春のけふのみに別れと

大江千里

あかなくにまたのこりなきはるを惜しみてなかくはやくすきゆく

在原元方

春はなほいまいくかありとも知らすしてすくれはなかなかはてぬ

人の行さきをわかるまえんこすれまた別也

入道前太政大臣

かへりしを

あそ

續古今和歌集巻第三

夏歌

更衣の心をよませ給ける

土御門院御製

ちりはてゝ花のかけなき木のもとにたつことやすき夏衣

文治六年女御入内屏風歌

後京極摂政前太政大臣

冬梅よりは[illegible]移ろひて[illegible]夏衣かな

首夏の心を

中務卿親王

花染の袖さへ[illegible]更[illegible]山桜かな

雪人遠山ゟ見ゆる桜の花ゆへてかゝる夕の鐘　二句と三の句

後拾遺頼綱朝臣　桜をみてよめる花とみ山と花みてやまもましく哉

残花なくは　春とてもなし

尋ねやま東の山の重桜かはらぬ春のまたあるかの

応長弐年百首三の中よ卯花

中務卿親王

めつらしき我宿にたと見るまてに遠里のかきねの卯花

遠卯花といふことを

右近大将家經

かねてより桜に似たる山の卯花のさかりを待にかきの卯花

文永二年七月七日影へとさくりて七首詠

人ふまぬ垣根の月の卯花と

前大納言為家

卯花の雪にひかりに明ぬる月の影やたてる

夏題中有　従二位家隆

しめ子のゆふの見えつゝ咲にけるかなの垣ねの

元徳二年詠進

ひかりの来る　前中納言定家

忘屋の卯花の雪のかきほにはまたゆふ月のかけのかゝる

堀川院の時百首題

祐子内親王家紀伊

年をへて松尾山のあなたにも名をのこしけれ

題しらず　小弁

明ぬとも人にはいはし郭公まつ志のゝ音は誰にきかせよ

郭公月は待にもまさるかなとはれぬ身と

おもひ絶にし

月ならて待そまさりの郭公深山をいそく志るしなるらん

題しらす

三層の守

こゝろあての郭公心してやはきよ鳴らん

花山院御製

待わひぬ思ひはなれし時鳥をもひ出る

寛治二年百首歌に待郭公といふ事を

太上天皇

身にしみて初音きかせよ郭公五月よりまつ人

家に百首歌よみ侍けるに

洞院摂政左大臣

まちかぬるまのゝ郭公いつを待夕月夜待人

中務卿親王家百首に

源具氏朝臣

なにとなく何とも暁の空に月待まつ

建長三年十月廿日中に

衣笠前内大臣

そのかみを祖述ぬる猶こそ都の[illegible]神も心[illegible]

百首哥の中に

前右大臣

猶も思へいはなきつゝの神風の心の[illegible]都の初花の陰

題不知

後久我前太政大臣

都に三輪の神杉色かへぬためしとぞ思ふ[illegible]

題不知

皇太后宮大夫俊成

住吉の松の千歳を神のまもりし[illegible]

禖子内親王

あかねさす宮にはうちそ[illegible]雲のうへをなきなれは

大納言経信

大納言経信その[illegible]猶も[illegible]都[illegible]

なぞときこえて

小左近

さゞ浪や志賀の都の一[illegible]とその昔人[illegible]

延喜十三年内裏御屏風哥

凡河内躬恒

都にはまだ[illegible]月も[illegible]人[illegible]

同じ時きくの歌合に

貫之

わがせこが[illegible]花の[illegible]月[illegible]

郭公を　　月花門院

待えたる宿とはきかず郭公雲井の月に鳴なん
人つてならで待出る声に郭公と

中務卿親王

一こゑとめすも月に鳴すてゆく空の広さに時隠

山路郭公といふことを

もりかねて嵐の山の時鳥いてゝこゑは月に鳴なる

題しらず

山邊赤人

足引の山をいでて郭公の花のくれに鳴まさるらし

中納言敦忠

郭公まかりける時やゝまことかたらひていもかねやに鳴
正治二年人々に百首の歌めしけるついでに
読侍りし

後鳥羽院御歌

卯花の垣根がくれに郭公なくやしのゝめの雨のはれまに

夏の歌の中に

ねざめの中にて鳴時鳥まさにいまも(?)忘られぬ

内裏に百首の歌奉りける時卯月郭公

中納言為氏

杣木より志らぬ中の森の郭公卯月にしるしてたのむ
(?)

西園寺入道前太政大臣家にて海邊

郭公といふことをよみ侍りける

前大納言為家

いさゝらは杜にかたらへ郭公信太の杜の名をもたてし

弘長二年亀山院御百首の中に郭公をよみ侍りし

従二位行家

人よりも先こそ待とや郭公初音はふかき山に鳴らん

同十首歌に雲隔聞郭公と

前大納言為家

郭公なほ一声は時雨にも聞えぬ月の秋の森陰

弘安元年百首歌に郭公を

のこすと人のいふ時鳥もあはれみなきさなく

入道前太政大臣

建長五年三月三首に里郭公

岡屋入道前摂政太政大臣

わかれけるあすよりさとの郭公帰る人やは里に鳴らん

権大納言顕朝家にて人々題をさくりて

手向すゝ人もゝのゝ郭公

藤原信実朝臣

明方は峯に立ける郭公山のはいつも夜ふかくぞなく

夏三首の中に

丹後局

わすれてはいかにかなしき時ならむとすまひとは誰か聞く

寂身法師

まちまちし人の心の郭公いく夜のねざめ聞ならしけむ

津守國平

草枕むすばぬ夜半やこゑかけて時鳥なく一声の旅ねさと

寶治元年十一月三日の歌合に五月郭公

土御門院小宰相

さとゝほき山やま五月の郭公しのぶる比はやこゑなくなり

中宮大夫雅忠

郭公しのびし比の一声をさつきはなにやおもひなれん

雨中郭公を

蓮生法師

ことさらに海と見えけり郭公の五月の雨にまなくなくらし

題しらず

貫之

あしひきの山ほとゝぎす五月のあやめの草の根にかよひつゝ人ぞ

堀川院の御

五月くる池の汀のあやめ草引手に妙なる小ぬまかな

人のひくそのたまのをにかけてあやめはかはらざりけり

和泉式部

身のうさにおもひやられはかはらさきしく人の袖もしほるらむ

百首御歌中に

土御門院御製

あやめとる袖のしつくのはなのきくりをなひくなみまにけふや

寶治二年院百首の中に早苗をとる

新院弁内侍

小山田にまかするなはしろのみなかみにいつか早苗とるらん

前参議隆親

露の間に山田のこのあきほとちかしやすめぬ早苗とる

延文二年中殿和歌に

貫之

河辺には早苗とるといふ事を心あるかへる

早苗を

よみ人しらす

しつのをか手をひとりせはしき行田の早苗をとる

又同歌を

常盤院御製

又月毎にみつなかれにしてうゑそめしに早苗とる

洞院摂政左大臣

夏の日はわかのまもる早苗とりにたてる又月毎に

洞院摂政家の百首歌に

従三位行能

五月雨にまのゝ水とすみ草をくれはしの山布引の滝

権中納言定家

玉やこそみかくやつして河とみえこゝもさへ五月雨比

題しらず

藻璧門院少将

芳川いはなみ人の五月雨はきえてもおなし淵となるらん

祐盛法師

五月雨にみさゝ浪の紀の川はさゝ浪よせて渡りの舟そ流るゝ

雅成親王

五月雨は川をはなてゝ青柳の能登の浪ちの淵まてつもるせきの

海邊五月雨と

中ゝに志ほひゝなく伊勢海士人の袖やいかにすらん五月雨の比

従二位家隆

題しらすの

五月雨はいつともわかぬ雲ゐとの空をおやみもなくふるなり

百首御歌中に

土御門院御製

旅の袖の匂ひと風のさそひ来て花橘にうつるなるらん

昔思へん花橘にこの人もしれとそ袖の香そする

正治にたてまつりける百首に夏歌

寂蓮法師

わかちかの花橘にかよひ来て移る夜床の夢はむかしなりけり

守覚法親王家五十首歌に

皇太后宮大夫俊成

白ひくる花よりくれの袖の香に涼しくかほるよるの夢

千五百番歌合に

二条院讃岐

まれはの花橘の香をしめて昔の手袖にまつ袖は

題しらす

大僧正慈鎮

旅の袖の涙なりけん古へは花たちはなの香にそみし庭

大納言隆房

かゝる花の露ちる庭の夢さへて忘れし昔の涙

崇徳院御歌

ともしする火くしの松もきえて外山の峯によこ雲

正治二年百首歌

前中納言定家

さ月やみまたすゝしさのすゝ虫の鳴ねはかりそ鳥羽の浦

鵜川を

後京極摂政太政大臣

大井河かゝり火たえぬ鵜舟よりいつもしらぬ夏の夜

寛和二年内裏歌合

権大納言行成

いかにせむ夏の夜なれとみしかよや鳴くほとゝきす

夏夜亭中月

中務卿親王

掬すてし泉もみな思夏草にいさゝかのこる月影哉

前内大臣基家百首亭合月

鷹司院帥

下ゆくや花の陰にすゝしさもまさる夜半の風の宿の月

百首亭とゝまりけるに涼風

侍従行家

夏草やはらふ枕の下にしはし夜風を月のやとかな

夏風亭中月

源重之

夜風には給人の袖もいはなき枝戸もちかまつふくもの

中務卿

月の夜は宿の枝戸とさりける旅のなかにいかなる人もみえて

夏月を

入道前太政大臣

すゝしさの泉の庭にみえに消えて夏の夜の月

覚性法親王

さゆる夜は水の宿にも夏をしるすゝしきてかゝる月の影

前太政大臣

蛙の声といひて夏風にまかするに立ちぬる月の影

題しらす　　後鳥羽院御製

夏山の楢葉そよく吹風に今すゝしき日くれの空

家百首歌合に　　後京極摂政太政大臣

鳴蝉の羽に置露に秋かけて木陰涼しき夕暮の声

百首歌よみ侍し時　　中務卿親王

松風も空に知思ふ高砂の尾上の雲の夕立の空

後鳥羽院にたてまつりける百首歌に

中有　　入道前太政大臣

涼しさく志のゝ風森の夕立に雨嵐のこゝ大河の村雲

村夕立といふことを　　正三位知家

かやり火の煙そ払の夕立晴ゝ色ねおちられ山さと

題しらす　　在原業平朝臣

くれかたき夏の日くらしなかむれはそのことゝなく物そかなしき

瞿麦を　　従三位行家

露をとふうた浪たかのの花の錦に風もとはん

夕顔のさけるをとりて　　平政村朝臣

たのめつるしつか軒はのかきねよりあまりてかゝる夕顔の花

正治弐年百首の中に

小侍従

小車のゆきかふ人をまちとしてなほ心をそめしゆふすゝみかな

題しらず

柿本人丸

なつ衣ひもゆふくれのそら涼しわか妹かやとの夏の夜のかせ

百首歌の中に

後鳥羽院御製

ゆふくれのそこはかとなき清川のあさ草葉の露のすゝしさ

夏歌の中に

後京極摂政太政大臣

松かけの山かけふかき谷かせにしらぬ秋のかせは涼しかり

百首歌の中に夏歌

藤原光俊朝臣

この比はならのをかへの花もなき木のした涼し中川の宿

守覚法親王家五十首歌中に

中納言定家

ちかくなるけしきの下荻さやかなる秋のこゑする

杜納涼といふ事を

従二位家隆

ゆふすゝみまつにやかゝる秋の色をしらせ森の下陰

弘長元年百首に納涼を

従實雄卿

津の国の難波あしさと夕暮に秋のけしきを
夏風とやする

徳大寺左大臣

名にしおふ志のゝ浦風ふきそふる秋のけしきは

夜納涼を

権中納言長雅

みそぎ河さよふけかたのなみのうみや夏なかるらん

従二位家隆

夏ころもたつたのなかれのきしに秋まちわびて見る人もなし

建保百首歌奉りける

前中納言定家

わきもこが川枝くせの流れにみそぎして
なやくそ年はあつき
夏越ける

續古今和歌集巻第四

秋哥上

秋哥とて人々よみ侍りける

中納言家持

時すゑゆくにし秋さりくれは衣手に吹来る風の音そさやけき

百首哥の中に

後鳥羽院御製

うちわたすはる〳〵にふく川風に秋の初風

建長二年影供哥合に

入道前太政大臣

白露のおきてあかしの浦風にとはに秋来にけり

右大臣

露むすふ衣手すゝし稲葉吹風のをとに秋来にけり

秋の始の哥

式子内親王

秋来ぬとおとろかされし吹風のまにまに思ひはかなしかりける

寶治二年百首哥に早秋の心を

新院少将内侍

昨日こそいひしをは吹風の身にも世時のいろに成ぬ

右大臣

明そめていくかもあらぬ秋風にいかにや袖の露こほるらん

秋哥の中に

慈鎮

涙にハ何も袖にあらそひてそはハ人の秋乃初風
悟ても拵流しまて秋ならて何事のよ

前中納言定家

わかぬ煙の浅茅か原の露そふかきてみるもあはれ秋の夕暮を
白早秋といふすと

中務卿親王

みなと吹夕浪すゝしき海の上に風も吹くなる秋の初を
五十首哥に早秋

参議雅経

う蝉の羽に置露もあらはれてうすき袂に秋風そ吹

題しらす

鎌倉右大臣

今よりハすゝしく成ぬ日くらしの鳴山陰の秋の夕風

嘉保二年郁芳門院前栽合に

権大納言公実

吉野なる人萩の花すゝき宿かりそくや秋の風と
ありきを

秋哥の中に

今上御哥

秋来ぬといふこそ風に吹よりけれ庭の萩原

東三条院兵衛佐

まねくにはなひくものからさそふ也秋の野辺

中務卿親王家百首歌

平政村朝臣

咲んても萩の下葉はうつろひぬ色いはし秋の初風を

秋歌の中に

安法法師

萩の葉もそよにきえてん風の音に荻の葉そよく人

後鳥羽院にして秋十首撰歌合侍りける

従二位家隆

秋風はさそひもやらて萩の葉におほふ夕暮の空

千五百番歌合に

後鳥羽院下野

根こしにかれゆく秋のかきねたの宿は萩のうは風

百首御歌の中に

土御門院御製

夕されは荻の葉萩を吹風のおとにみえぬ秋をしる涙かな

題しらず

女御徽子女王

秋の野のあやなきものは夕暮の萩吹風の音のかなしさ

朱雀院の御時うへ人あまた歌合に萩を

よみ人しらす
吹風の音こそすれと秋風の庭からは荻そみたるゝ
荻風と　正三位重隆光
荻の葉もそよきにけりと花すゝきほにいてゝ風のふくやは
拾遺中　紀友則
吹くれは昨日にもにぬ秋風と冬なるかとそきけれは
山邊赤人
たなはたの舟のり流し秋風は天の川とそ流るゝ河は来ぬらむ
天の川瀬々に秋風吹にけり七夕もあふ時は来にけり
七夕歌　小野贈太政大臣
河は秋川をわたるとや我も君の舟まちはつる也
七月七日东三条院にて人々よませ給ひける
上東門院
鵲の羽の橋はわたるらめ空ふかき夜はさえまさりけり
九条　東三条院
かさゝきの橋の今はた渡す人もなし合の空に袖もぬらせる
建保四年百首に　秋哥
光明峯寺入道摂政太政大臣
天の川雲の羽衣とりかさね袖もつれ合ことまつ秋のよし
七夕の出し路と

素暹法師

天川ふかき舟の年に一夜のちきりもたえぬ如何ならむ

光明峯寺入道前摂政家秋三十首に

正三位知家

このあまの中わたる舟のまちえてもけふの中にも月日なるを

弘長三年百首に七夕を

中務卿親王

織女の逢瀬や遠き天河まちの中に淵となるらん

所従皇后宮家にて七夕によみ侍りし

三条右大臣

いつくにか宿りをかさむ七夕の約束の数のあまの夜なきを

題しらす

康資王母

わかさともなをやわかるゝ織女の今宵をまちわひぬらん嫌哀

七夕の心を

前中納言匡房

銀河まさに初秋の夕かせのあはれとおもひて七夕の妻をまつらん

秋の来る年中川

今上清行

年毎の秋の一夜とのちきりなれはひとつの思ひ合ぬる

中納言為氏

天川わたりに舟の七夕の年よりなかき浦はかりけん

天台座主澄覚

わか川紅葉の橋や枯とへくまふれは見えし帰るらん

千五百番歌合に

前大納言忠良

竹の葉におく白露や織女の一夜の中の涙なるらん

七夕別といふ事を

左近大将家経

天河瀬やこの渡りさふもとえと契るわた白波

七夕後朝を

参議太宰大弐師時

立帰るわかれの渚風の手ふれ世をそら川浅くなる

光明峯寺入道前摂政家秋三十首歌に

関白前左大臣

いろかはや世にしら露の小山田のいほの中なる秋萩の花

秋萩乃露に月の宿れるを

俊頼朝臣

秋の露下葉に月の宿るかけや宿れる枝をとへはし

正治百首歌に

式子内親王

待宵のかきてよふくる風月ならさらは我そへの萩か初

萩を

大貳三位

こゝろなきみにもきゝにみゆる秋萩の露吹知らぬ木枯の風

寛治二年百首のうち萩露

鷹司院按察

思ひやる庭の秋萩露おけはさなからみゆる宿ぬれしと

十分許まとふらりそ給ふ

前左大臣

さをしかの床はあらしの秋の色に下葉吹庭は萩の

題不知

人丸

萩の花ちるらん様の露霜にぬれてをゆかむ夜はふくとも

前栽合の歌を判せしとて

くらしせかれぬ

延喜御哥

花の色はちりぬるのちもにほふらむ秋の色にもあはれとそ見る

秋の野原をしみて

伊勢

さく萩と見しは世のみ秋のうつろひてさそまかれぬ

草花をよめる

中務卿具平親王

夕暮はをのゝ小萩の女郎花おはなにまかふふちはかまやしをん

俊恵法師

何事とさのゆれ思のなきものをされて露をくらん

中院贈太政大臣家歌合に女郎花

なと　　よみ人しらず

名にめでゝ人にかたるな女郎花我おちにきと風吹けば

五百首歌中に

後京極摂政

女郎花たなれ露に来る黒き雁の涙は束る野辺の

建長三年九月影供歌合に朝草露

といつみと　右近中将経平

白露は枕の野べの女郎花とめとりてせる朝の袖の露そ

庵義正家歌合に岸辺秋花

紀時文

もりあはす秋とこらせぬ女郎花下れにと旅まよふらん

長久弐年八月松尾社より草合歌よみけると

東宮女房車に乗りて花をとりてさのすく

窓のよをすてくおもひ侍らの末を乗

めりつさよそ乗りて何らの落れ

車なりふう袍よ女てよみ侍りし

中納言資継

うらまいくらゝまことゝ花落ゆさ色つよみ侍りかなを

ゆくひとのまて色作斗のよとりあへを東路の
しらぬ行きそれ

弁乳母

題しらす　　清原深養父

もろこしも色とせみを花落ま移くよと海かへなる

あ落花は分見みよしのゝむすびおきてあかやとえん

中務卿親王家百首歌よみ侍り

中納言

おほかたの人の袖にはわか身をさそ宗りけるは花落ほ

六条右大臣寿に見侍りし時落と

太上天皇

糸落こそかしはよりへ星とわてさする春の錦あえん

建仁の頃百首歌奉りし時

後鳥羽院宮内卿

あらしふく木の葉まてにはきえ尾ものまよはする秋風

秋歌中に　　中務卿親王

花薄わけゆく野へのいつ衣たかと招くよ秋風そ吹く

よそにのみ花さくなみのおきてみんとのかとよそにのかおも

百首歌の中に

後鳥羽院御製

しのゝめとまりてさゆるさやかに旅の海士の海[illegible]ん

建保四年百首歌

権中納言定家

なにはえも旅のかりねの朝さむそ葦まわけにあはれなる鴫しきなり

土御門院小宰相

行ふるき山花やうつろふ春のひかりのさそふ白とをゆく

土御門院御製

春のあはれまさるてふ春くれは秋風まさる旅まくら

夕霧も立こ我宿の白露をもろき袖(袖)にうつるらん

百首歌中に

中務卿親王

いつはりを世にはありて秋風のわけつゝてまよふあさをと

承久元年内裏十首歌合に秋夕露

入道前太政大臣

吹しほる梅野のあらしの夕暮に袖にとまらぬ秋の白露

わかれし白とまる

権大納言顕朝

秋は花草はいつはりの志ら露袖にぞ置くらん

宝治二年百首に秋夕を

正三位知家

これそ秋は千々の物思ふ袖かゝる夕暮の空

日吉社百首読侍りける　　大僧正慈円

夕まくれ鴫たつ沢のわすれ水思ひ出ともそてはぬれなん

秋夕と　　前中納言定家

旅ねする舟出もしらぬ里もなき夕と思へは

建仁元年五十首歌合に　　従二位家隆

なつかしみ思ひし津の国の難波の里の秋の夕暮

建永の比　太神宮によみてまゐらせける

世尊寺清輔中女

越前相模女房

あはれさもいつれの秋か夕くれのさひしさ袖のぬるゝらん
見るもかなしき色をなかめしその秋の夕暮

建仁乃比同しこゝろをよみける百首の中

寂蓮

袖の露をいかにかこたん古郷の秋の夕暮
秋十をいかに人にそむけける時

中々に見よ夕くれのすみくら

題しらす　　権大納言教家

夕暮はいつもなかなる人ならぬ秋のうき人

中務卿親王

袖の上にすきにし涙かわかぬにまたしも秋の夕くれ

光明峯寺入道前摂政家秋卅首歌

前関白左大臣

何となく心や秋にうつるらん老の我よそに秋の夕暮

宝治二年百首に秋夕

入道前太政大臣

なかめきて宿の蓬の涙にはいつなる時も秋の夕くれ秋のよは中なり

太上天皇

秋ならてたゝの思ひの涙なりたそかれ時の秋風そふく

月花門院

いかなれは夕の思ひ夕暮は秋風さへに人の袖ぬらすらん

前内大臣基家百首歌合

土御門院小宰相

涙さへ秋の袖にはいつかわく露より人の袖ぬらすらん

題しらす

平重時朝臣

今よりはさらても秋のかなしさはいつも秋の夕暮

信実朝臣

ゆくへなき心もまよふ世の道さへやみや秋の夕暮

右近中将公雄

吹風も荻にてまつ世時ぞとはいはぬなかれ袖の夕暮

平長時

さりも猶いつはりてすかでとかくにおもふらん秋の夕ぐれ

百首歌中に

右近中将経平

そのことゝなくてあはれなるやは秋の夕暮山風

藻璧門院少将

鳴虫は尾の色よりも露にこゝろ秋の夕暮

守覚法親王家五十首歌に

皇太后宮大夫俊成

旅にこそなれし時も秋の色野辺の秋風身にしみて露は時雨く

三百首歌中に

中務卿親王

春よりは小花か本ぬれて露けき袖の浪の数かは

天禄参年八月前栽合歌

規子内親王家但馬

あさちふの露吹むすふ木枯に乱ても鳴虫のこゑかな

百首歌よみ侍ける

衣笠前内大臣

夕されは荻吹とよむ秋風に葉末まよはすよそむら志の露
秋乃なかはの中なり

後京極摂政家三首

里は海士の花も見捨る世に月乃てらぬ宿をは絶め
月を待夜を　従三位頼政

あはれさの山乃おもかけ立さりやさらに月はみえなん
文永二年八月十五夜の歌合に未秋月

不知読人

未た秋の風のこすゑ吹風も月影さそふ紅葉はなかりけり
承久二年内裏待月といふことをよみ侍りける

正三位知家

みな人のまちわたるけしきかなのいさよふまた出ぬ山の月とはなれ
山の月とはなれ

まちいつる雲の絶間にそよ国の夕山のはの月とみえなん
洞院摂政家乃百首歌に

従二位家隆

津くはねの山高根のさむけきに出る秋の夜嵐
後京極摂政家乃百首歌に

入道前太政大臣

さのかは河瀬乃音やさえぬらんかたまかせの夜半のあらしと嵐を割

月によみ侍し

光俊朝臣

いつくにもしハ海の月なれはむかし明石とおもはん

題しらす　前内大臣基

わか身晴行そらの雲消て橋本のよそに月にあほ　二條

後嵯峨院三の

嵐の林も月にさえやと梅の花ふかきを見きや橋本のはし

信にもおもはしけん時月のあはれもしらぬものを

斗の

黒田院三の

これとこそ雲ゐをこえて見しかと月のすみぬらむ

建保にて年秋庭月といふことをよませ給ひける

つかうまつり　順徳院御製

心ある海士のとまやの夜もすから人も見し秋の月にいかなる（濤）

湖上月と　光明峯寺入道前摂政左大臣

さゝ浪や国津みかみの鏡山そのまゝなる世代の月

月百首に

前大納言忠良

いさしらす浪の音しかとなる月の明石のうらに海人

海邊月といふことを

源師光

たの國やはつみかたの月きよみ玉もにもみつ
多ねまて里月

法皇異

太上天皇

里はあれて月やかはらむ山路まてしみしみ秋の夜半の月

建長二年八月三日会に月を題

入道前太政大臣

すむ月の影すむ海のくまなきにはるかにつなく浦の秋かせ

法性寺入道前関白家にて

源俊頼朝臣

おもひやる心も若の浦にてもそれと夜の月なきまよひぬらん

文永二年八月十五夜の歌合に停午月

鷹司院帥

おのか身をたつ秋の月にさそはれて今宵まつまに

月照流水といふ事を

登蓮法師

月影をさすとこそやとるらんそれとこそしれ

右衛門督家三十首会に旅泊月

伊経乳母

よそにてみける宮まてられて人まちわたる秋の夜の月

当座にて池上月と

京極前関白太政大臣

大空の池の中にもすみけらしみなそこまてもすめる月かな

僧正行意

長月のよはの雲ゐはれて月そ...

法印実伊

雲こえて空よりすめる月かけの...

入道前太政大臣

さしのほるみなとの夕塩に見えて秋の月

海辺月と

平政村朝臣

沈むなる浦のみなと夕塩に光さしそふ月のさやけさ

浦月は

権大僧都宣円

ちる花のなみにさえたる月の...

前参議雅経

なかき夜のさゆる雲ゐに月は浦にすむ

河月と

平時直

あまの河こほりて月の影...

題しらす

大納言経信母

みな人の心にあくの秋の月の影おしむ十五夜の空
千五百番歌合に
前中納言定家
いつまでも出てまたれし蓬生に遠き月の影
名所御歌合に
後鳥羽院御製
あらきなくれなゐのやまざとの山の月かげ
月みても十三夜のみ待ちけるに
枝寄権僧正
前大僧正
秋月やいつも宇治まつ月行くへの秋の涙そ
月の今宵こそみ待ちける

大僧正慈鎮
頼もしな心よ人の中に待つやすむ月にものを
建仁三年八月十五夜和歌所歌合に
前中納言定家
秋の夜のさかりの庭をあかすとて志らくは月に雲かかる
明日よりも人は十三夜にも待たると秋と
左京大夫顕輔
人ごとにもとにまちあるべきといへどもなまさくの月
月今宵の中に
中務卿親王
人の世も出る後の月影に秋風ぞなく

前中納言定家
袖の上枕の下にやとりきていくよもなれぬ旅の夜の月
五十首歌中に見月
太上天皇
ゆくすゑの秋をかさねてさそ月はあはれなる
百首歌奉りし時月を
衣笠内大臣
なかめきて雨はいくよの涙とも思ひしらるゝ秋のよの月
光明峯寺入道前摂政家秋卅首に
中納言為氏

秋の夜の月こそかはれ世の中は今も昔もみし人そなき
同家にて十首歌よみ侍りし時
月前草露を
従二位行家
秋の夜は草葉の月のやとりにて袖にもおなし露を結ふ
崇徳院に百首歌奉りける時
皇太后宮大夫俊成
秋ことにたえぬ小倉のしかの音や月のすみける
宝治二年百首歌に秋月をよみ侍りける
草枕しけき野原の秋の露に宿りてこそ月の影は
建保三年内裏歌合に

大納言通方

むさし野は月の入へき峯もなし尾花か末にかゝる白雲

光俊朝臣 [illegible]

正三位知家

深き夜は清見なるの雪にしていつくも月のみるや

月ぞ此中に　前大納言為家

みかさ山秋の夜なかにわけ入ば松の葉末に月の影そ涼しき

題不知　柿本人丸

山端にさしくる程にまちえても雲の月かな

中納言家持

むへしこそ此里は明くらきを三秋の山の月かさやかに

文永二年八月十五夜内裏にて今宵翫月と

前太政大臣

名にしおふ秋の今宵の人そしる雲井の月もすみゆく

参議資平

よしや花もけしきも秋のさやかなれはわかぬも秋と月や　よ舞人

詠入月

太上天皇

有明の光も明ゆく山の端にへたつる月の面影

題しらす

雅成親王

月のゆくすゑは空もはれて川霧の峯を出ちる此山かと

続古今和歌集巻第六
秋歌下
霧間稲妻といふ事をよみ侍ける
前大納言為家
秋霧はおさへぬ山のいなつまにこゝろにも光と稲妻の影
文永二年九月十三夜歌合に稲妻を
太上天皇
移れはすや雲とこそみれ志ののめの雲ゝさぬれの稲さ妻 のかけ
関白右大臣
来むなかなか尾花の秋風にそよく稲妻雲とも
左大臣

ものゝふの雲やこそのん稲妻の影もわかるゝ夜半のしの
前大納言資季
中納言為氏
良しも秋の花の秋風に山のもる稲妻の影 冬のゝ花の小萩の枝の秋風の稲の
いく絶間して秋風に雲のゆきかふ稲妻の影
権中納言公雄
かゝると
新院弁内侍
何とてか雲とこそみれ秋のよの空に光る稲妻の影
十五夜歌合に稲妻を
太政大臣
なけかれと雲やたのまぬ秋風にたゝまし稲妻のかけ
稲妻とも
貫之

秋萩にみたるゝ露ハ鳴鹿の声より落る涙なりけり

建保四年百首御会に秋と

順徳院御製

文末婦に志らし萩やちるらん何ゆへか鳴棹鹿の声

題しらす

鎌倉右大臣

夕されハをくらの山に鳴鹿の声のうちにや秋ハくるらし

人丸

此比の秋の朝けに霧かくれつまよふ鹿の声のさやけさ

十首哥合に

従二位家隆

よ川秋の一夜の夢ハふしたるに鹿の音をや鳴らん

鹿啼何方より也いつれともしられす

後白河院御製

山里ハ秋の寝覚そあはれなるそよと也志る也鹿の鳴声まてに

弘長元年百首に鹿と

前大納言為家

をくら山秋ハならひと鳴鹿を何に我身涙もそへて

千五百番哥合に

参議雅経

心ありせはと山志のゝ里て秋ハいかにさを棹鹿の声

題しらす　紀友則

誰きけとこゑ高砂にさをしかのなかなかしもとひとり鳴らん

家に百首歌合に月下鹿といふ事を

光明峯寺入道前摂政左大臣

清見山月さへかゝる夕暮にかはるかひなき鹿の声

建保四年内裏歌合に秋歌

権中納言定家

小鹿なく山の陰のかすかなる風待よりも月もすむ秋

百首歌の中に

秋萩の花のさくにも鹿ぞなくはかなく月の光をもまつ秋の夜

秋の歌とてよめる

平兼盛

月影に麻の袂を捨かねて麻の尾花に蘇の露や置らん

雅成親王

秋の田のほにいでゝ穂久津の今とくや初まもね庵の雫も

つゆもまた稲葉にかゝるとも

大納言経信

ひとりのみ夜寒の縄の夜ほしまても秋風の吹小山田に

秋の歌の中に

行念法師

足引の山田の稲のことわりにあらぬこそわひしきて秋はさく

入道前太政大臣

白露はおきてかへるを待にしも門田の中に床の秋風吹

大宮院権中納言

秋ことに雲ゐの雁の身をもなく小萩のもとや露けかるらん

紀貫之

初雁のはつかに声やきこゆらん秋をしる人の袖

暁雁と

前内大臣基

めつらしきなきてや雁の声きかは人の袖の花の涙と

建保二年内裏秋十五首の歌合に

従二位家隆

雁のゐる夜寒の衣や明ぬ人枕によする宮城の月影

名所擣衣といふことをよみ侍る

承久元年内裏百首に擣衣といふことをよみ侍りける　入道前太政大臣

さらぬたに聞は暁ことに身にしむ秋の風さえて衣うつ

千五百番歌合に

前内大臣

浦風や秋の夜寒に松嶋やあまのとまやに衣うつなり

源具親朝臣

二夜ともまつとは浦風そよく里と風の夜や

海邊擣衣といふ事をよみ侍りける
藤原隆信
さよふけて芦のすゑこす浦風にあはれ海士の塩やも衣打なり
名所擣衣といへる心を
中務卿親王
吉野ちかき里の林を風よりも花すり衣うちやなるらん
秋哥中に
静仁法親王
旅の空たかねの衣擣衣かさねてみやる月の衣
土御門院御製
さえわたる月に夜寒の秋風はいかなる里に衣打らん
今よりは寝覚の友と秋風の吹よわるまて衣うつらん
従二位成実
山家擣衣を
[illegible]
山ひこのこたふる峯のはしに衣うつ打音やまさるらん
十五首会に閨擣衣といふ事を
順徳院御製
[illegible]のひとりねの袖におきそふ旅の里人の衣打なり
五百首哥中に
さらでだにあはれなる月の里人はいかなる夜の衣うつらん

題しらす　前中納言定家

久方の月の里人さゝの衣うちわひて月の名にや打らん

九月十三夜よみ侍りける十首うたよみ侍ける中に　前大納言為家

わか方にむかしの跡をたつねても神なからなる月やすむらん

文永二年九月十三夜亀山の仙洞にて歌合侍りけるに　河月と　大納言通成

かめの尾の瀧津河浪玉ちりて千代のかすみる秋の夜の月

百首歌奉し中に　順徳院御製

秋の月さえぬる草木やさえわたる月はさやかにみえし露しも月とゝもにすむ哉

素暹法師

さを鹿の入ぬる跡の霜のうへにてらすもさむき秋の夜の月

古寺暁月といふことを　源具氏朝臣

高砂やとよらの寺の秋の月ふけゆくまゝに鐘とこそきけ

秋歌中に　後鳥羽院御歌

今宵こそわきてすゑ三夜の名をえたる空の光のかゝる菊の月

正治二年の百首の歌の中に

後京極摂政太政大臣

三ヶ月の菊の節より待ちまちて秋は半ばと月を見るかな

あふぎ見れば世に月の影のかゝりける今宵ぞ出る

いかに名におはぬかれせ

赤染衛門

菊の月の影すむ秋のよは猶あはれにもすみわたるかな

清輔朝臣

藤原秀能

このやどは花の色さへ月影にさえまさりけり月の夜や雲も払ひぬ

建保百首に秋歌　参議雅経

鹿の音はいかなる根にかおふるらん露の野原の末の枯葉に

題しらず

鎌倉右大臣

むかしおもふ人の袖にもおく露や秋の末葉にそよぐ風かな

皇太后宮大夫俊成女

うつりゆく下葉色づく秋萩の露にみだるゝ風は静かに

秋の中に

関白左大臣

吹く風もさびしき空に静かなる夕日の影の秋の夕暮

寂超法師

梅のはな山のすそのの秋ちりて夕風にのみ鶉なくなり

従二位家隆

浅茅生や何か山の夕暮に今もむかしと秋をまつらむ
もの思ふ露とひとりや秋をまつらん

後三条院四宮

秋の夜は様旅せんとや夕暮も空さへたつ風そ

権中納言

月花門院

浅茅ふに日をかさねたる露の上にわくれもうかりけり

淑景舎女御

物思ふひとりをとはぬ夕まくれいつかはなくて月をなかむる

元永二年八月おのこともに詩と歌とよませて二つの

月合侍よみ歌秋風とよめると

太上天皇

毎しとおもふやとにて河霧ふかく流るる人の流の橋を
さらのかゝるたかさりて水まさる見けれ

関白左大臣

明はてぬ雲も霧立て河霧はさむく秋の山の葉は

題しらす

正三位知家

よはまたきうつる月の影さえて明かたちかき山の秋かな

祐子内親王家歌合のまうけしける時菊
の名を付てよませ侍りける　紫式部

亭子院御製

もりて見る人のたもとにおく露を年のあまた袖にかたしき庭の白菊

延喜の御時菊合に

藤原後蔭朝臣

初霜は一夜にさえて（?）色かはる花の香あれは菊の色

暁風菊といふことを

白河院御製

夕霜のおく[illegible]菊の[illegible]にほひをみせつるとかや[illegible]

百首の歌奉りける中に

土御門院御製

ひさしきも秋の日数をかさねつつ[illegible]庭の白菊

題しらず　　中務卿親王

今もなほ[illegible]秋風[illegible]ふるさと

権少僧都公朝

秋の色と[illegible]山のあらしに[illegible]

建長三年[illegible]仙洞にて[illegible]

前紀集（?）　衣笠内大臣

はつ[illegible]の里は[illegible]

題しらす　中納言為氏

こゝろして庵をすみける秋の山のいくよもあらしの紅葉ちらし

宝治二年の百首の哥に杜紅葉を

入道前太政大臣

はるとは外山の時雨にさそはれてうつろひそむる森のこすゑ

秋の宮人中に

時しもあれ時雨とみゆる松かせにもろくも紅葉ちりかゝるらむ

中務卿親王

まつはかと三輪のみ山の時雨より交(?)ゆく山の秋のいろさへ

洞院摂政家百首の哥に紅葉を

前大納言為家

くちはてゝ浅深の千々紅葉いろそめぬ山はいつも時雨なん

文永二年九月十三夜亭にて紅葉を

[illegible]

なからふる時雨にはやくちりぬれはこの山紅葉あすは見えなん

参議資季

初時雨山の木の葉をさそひきて心にかけし下紅葉かな

藤原光俊朝臣

たくゝ山はしらて時雨なきみを秋の宮のよそにやみえん

題しらす

坂上郎女

あすか川せゝのいはなみ色つきて時雨は時雨ふかき所也

式乎に真楷

春日野は時雨ふるらしみかさ山わかれしより紅葉は色まさる山

百首の歌の中に

皇太后宮大夫俊成

雲かゝる時雨とふりてや龍田姫秋の紅葉も色まさるらん

林葉染露霜といふ心をよみ侍りける

白河院御製

下葉にも時雨の数のつもりてやみやまの山もちしほ染らん

紅葉ことにさへみゆる

藤原信実朝臣

人はまたよその紅葉にしたひけりあすこえゆかん山のはの色

左近中将教長

みなかみにいかなる時雨ふりぬらん色の杜の秋の紅葉

内裏百首の歌に松間紅葉と

右近中将能平

朝な時雨ふるみかさの山の木末色そむる松のみとりも紅葉しにけり

前摂政家百首の歌の中に紅葉

西園寺入道前太政大臣

秋の色を時雨にかへて松にまたなきかなしきは嵐の山

時雨せしとりをさへなくて秋の色とは程もなくうつろひにけり

題しらす

皇太后宮大夫俊成女

深くなる時雨も見えす露霜のをきそふ山の紅葉の色

左大臣

下紅葉まて染し時雨こそ山はなへてもみちはしめつゝ

宝治二年百首歌に 山紅葉

太宰権帥為経

露時雨中に染御笠の山の梢に秋のまみえぬ紅葉哉

秋歌中に

従三位通氏

深くなる中染ゆへ河霜とはおもふ木の山の梢の紅葉

建長三年九月十三夜十首歌合に

鷹司院帥

かさゝきの渡る雨もよほしつゝ袖の紅葉する秋の山

百首歌よみ侍りし時 松紅葉

衣笠内大臣

村時雨ふりにし海の常盤なる松の木末は

初瀬山けふの三輪の山もり紅葉

藤原則俊

冬の夜三輪の杉むら時雨の志らぬ木の紅葉

二百首歌の中に

後極院の哥

秋風にあつめし浅は霜かれて色こき外の錦紅葉く

千五百番哥合哥

西園寺入道太政大臣

時りみそし冬かきねけりの風のまにふわやかくれなき宮の錦

九月乃比真観象山他閑にこもりて侍し

又此日遠行し太上天王

きのふまで吾年をとゞめきみ人の心にある宿のもみちは

一 ねし

右の東光院殿下

よそにのみ志のちち乃錦かれぞちりぬる秋の空にて

一 亭子院屏風に

伊勢

こ紀志流る之瀬なす浦に紅葉葉の流ゝわたるも名あみえける

延喜十三年陽成院亭歌

よみ人不知

和かめと見秋の時雨にぬれ龍田山紅葉をとめとも見なくに

前内大臣基家百首哥合に中納言

龍田河紅葉をいつもり秋の流れにはをやいしくらん

百首哥の中に

入道太政大臣

めそゝあまたあすも山のはにかゝる秋の名残とならぬ夜半かな

秋暮とて　前大納言忠良

ゆく秋の名残をとめしとや萩が葉末の風の夕ぐれ

九月盡同書にて三首講とよまれけるに

暮秋菊　中納言為氏

しも秋の霜は形見の花なれど秋にあはぬ菊の色かな

人にことはりし百首歌中に暮秋と

月ゆく山の末葉の木のまよりさしも秋の名残哉

寶治二年百首歌中九月盡

前大納言基良

いはゞ秋暮ぬとかへる山の雲わかれゆく人のあとを慕ひて

九月盡夜の歌とて

中務卿親王

けふ秋の別やかねて思ひしも涙より猶袖ぞぬれける

村角

續古今和歌集巻第六

冬歌

初冬の心をよみ侍りける

壬生忠峯

いつのまに秋は過ぬと行かたを霜にしるしの冬といふらん

皇太后宮大夫俊成

あらしふく峯の紅葉の時雨にてまぎれぬ秋の名残なりけり

土御門院御製

冬枯れの霜の下草枯そめて時しも秋と見えぬ蘆はら

百首歌奉りし時

前内大臣基

ことしまた色濃の紅葉秋の袖にちる時を惜む

題しらす

鎌倉右大臣

秋は去ぬ風に木の葉は散果て山さびしかる冬は来にけり

中務卿親王

冬きぬといふより袖のなみだこそ神な月時雨なりけれ

源具氏朝臣

神な月袖の時雨にぬれそめていつしか心冬になるらん

猶思ふ時雨とよみける

後徳大寺左大臣

神な月しくれの雨の初時雨日枝にゆくへもなし

題しらす

藤原忠良朝臣

うちなかめ嵐の山の森の時雨もてにはもまさる緑に
しみ人のまま

秋袖のかたみとなれや我袖に月もよ打しく時雨哉

祝部成賢

高間山ゆふへ紅葉の錦を夜月時雨にそへてかさぬらし

千五百番歌合に

宜陽門院安芸

木葉ちる山のおとにもまか時雨ともさそふ嵐はなれよ

題しらす

中納言家持

吹風にちるをしらぬ紅葉の錦にをりけむ時雨

百首歌奉りける時

清輔朝臣

浦霞山時雨に染て吹風にもみちをかさぬ色の錦

前内大臣基家百首歌合に

藤原伊長朝臣

猶さえて花そこ海の夕時雨ふりみにふるか木葉散らん

建長五年十月三首歌合に

藤原伊長朝臣

は木の葉を雨と時雨まかへ源の袖にしくれはぬれまさりけると

右兵衛督為教

冬歌中に

大僧正慈鎮

山めくりおなしこの葉も袖にふりて時雨にあかぬ尾上

百首歌中に

後鳥羽院御哥

木葉ちる山の嵐の森の初時雨秋にはにほふいろもありけり

堀河院の御時百首歌奉りけるに初冬

藤原顕仲朝臣

大井河秋の紅葉を流しては下葉の冬はきにけり

題しらず

荒木田延季

紅葉ちる山はあらしやさそふらん嵐の風は吹にしかれは

枇杷皇太后宮

見る人のあかすてみる紅葉をはさそひなはてそ木からしの風

躬恒

流れもてゆくみちある紅葉を風は立田の河は瀬ことに

河前葉とみるらん

中納言為氏

晩より河瀬の色のあさきは秋のいろの紅葉

東路や暮白妙川よりかへる道

ちかひをすゝめて見給けるに

細川右京大夫

中々に世の河竹にハ深きしづみてみせて言の葉は潮花

承暦参年同道遥によみて前集と
也右

大納言経信

嵐吹山のあらしハ花よりもみる言の葉をとゞむる世のためにや
み右

承久参年十月光明峯寺入道摂政大

井川経案ハ人に家にて給ふ歌につくされ

升る

後鳥羽院御製

万葉は名ハいてに深きとも流れの世のしらべハ三稚人

入道也

光明峯寺入道摂政左大臣

万葉に入らぬ松よりもかしこき世に知る言の葉の深いみちなりけり

後鳥羽院にも春見枝にも歌合侍るとき

花山院入道右大臣

庭の雨に誰も名にしおもひ出よ万葉の末をもつたへん世の

佛人

寛永二年三月将軍に庭前集

右大臣参

庭に雨に柿の葉ハ霜にたへ名の手折てちるをあはれ

題不知

二千里時鶴下

末葉ちるめでしるあはれと又なかの月に見えさりし

千五百番哥合の三

参議雅経

この比は月こそいとゞをくら山の下葉まれなる木枯の声

建保四年百首冬哥

入道前太政大臣

木葉さへ人めもかれの山路はみなもみぢやへだてける人

内裏にて三首哥講ぜられ侍りける時冬暮

落葉といふことを

皇后宮大夫師継

夕づく日さすや岡辺の木枯に松と竹とにちる紅葉かな

道助法親王家五十首哥に朝時雨を

西園寺入道前太政大臣

紅葉ちる山は朝日のかげながら時雨てわたる淀の川浪

題しらず

そなたにはなほ夕日かげみえながら又時雨とはおもふ峯の雲かな

三百六十首の中に

中務卿親王

時雨つる冬の寺芝とみえつる山風はたえまたえまに降時雨かな

百首の哥の中に時雨を

木葉ちるいくたの杜の木枯に山路をへくるかた村雨

曉更時雨を　俊恵法師

いつはとは時雨るゝをとも曉は老の寝覚に袖やぬるらん

百首哥中に　初冬時雨を　高倉院按察

袖のうへに袖やいかなる神無月何と時雨はふりそめけん

題不知　月花門院

深山邊の椎の葉風にさそはれて時雨をきゝてはうす袖ぬらせとや
時雨さそふ川音へたつる河志もえは時雨しとも

河時雨を　前内大臣基

わたりえて時雨をきゝて

[illegible]前太政大臣

すゝしき浦わにかゝる河のおとはすゝしきくもに時雨にこそなれ

百首哥中に　藤原信実朝臣

[illegible]まさるとや時雨るらん宿の[illegible]鳴のなれはつれ

建保三年六月和哥所哥合に曉時雨と

前摂政左大臣

たれか[illegible]夜をさし時雨にさきの山よりも[illegible]

同年内裏十首哥合に

参議雅経

[illegible]の夜[illegible]やて[illegible]

冬哥中に

前内大臣

もまてをちの山より晴るゝ浮雲
時雨とやきく浦

中務卿親王

風やさむき花の雪れもうつろふにのこしけり時雨れ

寒草纔残といふ事を

前中納言定家

吹風の尾上の末の葉末にも霜おきまよふ梅庭の草
千々百夜合寿

後京極摂政前太政大臣

霜さえの田の木の葉にこほる志もせぬ山の風をあはれと
題しらず

[illegible]

いつはと草の枕の夕暮の秋の風に武蔵のゝ
賀茂季保

夕へみる霜のおく山の初時雨のみしにけり
行の末にまたよはりまさりけるとみて
[illegible]

さえ葉ましさの雲の夜のなかの冬の夜
冬の夜中有

中務卿親王

日数さす柏の杜よ[illegible]け[illegible]色よ[illegible]秋よ[illegible]

残菊と [illegible]大納言頼[illegible]

かれなてんは土のへや白菊は冬[illegible]人

[illegible]と 延元[illegible]

あ[illegible]て花なき時の[illegible]

源順 [illegible]

[illegible]時や見え[illegible]の[illegible]

百[illegible]中に冬と 白菊

前内大臣

[illegible]

仁安二年[illegible]人々十首歌よみ侍りしに

和寒菊

太上天皇

あさ[illegible]の山おろしけ[illegible]河の瀬に流るる[illegible]

[illegible]と 後鳥羽院御[illegible]

[illegible]や[illegible]

寛治二年百首歌[illegible]

前大納言[illegible]

[illegible]

前大納言為家

明渡世寒く成ぬみなと方塩干の千鳥こゑよはる也

光俊朝臣人々に百首歌勧め侍りける冬

寿　中納言為氏

都ふく千鳥鳴し夜はさへかは風も衣さむしなるらし

建長五年三首歌講侍りしに寒夜千鳥

とりを　源雅言朝臣

塩風も夜やさむからし吹上の浜たにて浜に千鳥鳴也

前右兵衛督

さゆる夜は氷ふる荻原の千鳥なるらんやなきの浪にゆく

千五百番歌合に

前中納言定家

鳴く千鳥袖の湊をとひこかしもろこし舟のよるの寝覚に

千鳥鳴なる也夜はの

土御門内府

夕暮は湊に千鳥鳴声のいつか海士の袖ぬらさん

泊千鳥を　中務卿親王

浪かゝる磯のうき寝の枕さへ枕にちかく千鳥鳴也

湊千鳥を　藤原光俊朝臣

霜のうへのよるこそ堤夜さへて入塩と渡る千鳥鳴也

題しらす　　大納言通方

よさの海くれしいさりの浦千鳥やそ鳴けん千鳥かなし

小弁

こそて森と思ひ浦なる小冬の夜の千鳥なるまくわたけは浦

千五百番歌合に　　寂蓮法師

ゆふやみに明石のうら千鳥鳴さよふかき浦に月

光明峯寺入道前摂政家百首歌にうちわたす

ふくる夜ふけの　　衣笠前内大臣

橋立やよさの浦風さえぬらし夜半のたゝ千鳥鳴なり

題しらす　　藤原基政

伊勢嶋やしほひの浦の小月の霜さえて遠ざかりゆく千鳥なくなり

侍従行家

難波かた浦の吹風に霜さえて遠の月に千鳥鳴也

正治二年百首歌

二品守覚法親王

夕されはとこ浦かぜに小夜更てよもすから千鳥鳴也

題しらす　　順徳院御製

しほかせの衣手かけて月やすむ千鳥鳴なる浦の松の木の柱

たのくれ思ひ出月みちしほ風ふきて水月こほる

題しらす　大納言経信

雲たえ梅さ山風は月さえてこほりをかさぬ濱之

名寺とゝてよる

素暹法師

みなれし瀬々の浪よる月や冬さこほり氷旅

真昭法師

秋風にふく濱松もたえまより浦の人の子のうきね明方

子なりと　式子内親王

わかれ路の方に雪霜のふるくて道もあけて氷

清慎公家屏風に　中務

なそかゝ山松風さへや大原やみの浦やしらまき人

白雪寒不散といふ事を

冬日左大臣

たかさごの磯の浦なみたちさむみよさむる雪もとまるる

水とよミ侍ける　権大納言顕朝

冬くれはすさきのあしのねをあらみ氷の下にかくれぬる風や

氷留水声といふ事を

皇太后宮大夫俊成

色くれし秋とおもはゝいかに岩まの水をとゝめぬらん

題しらす　中納言

冬さむと思ふ心の山水の音なきにもさそさえまさるらん

遊義門院冬哥

こほりゐる池の汀の風やはけしきひゝきにたつ水鳥の声　よみ人

しらす

家十五首哥合に池半氷といふ

後京極摂政太政大臣

池の面をとつる嵐の吹そめて半の氷のさえまさるらん

貞永元年百五十首哥に月前氷を

光明峯寺入道摂政太政大臣

さゆる夜は嵐の風の吹すさみ浪の上ゆく氷りまさらん

法印良海すゝけの手習秋十五首　きえん

冬哥　大納言良教

瀬々にこそ波の声なく成にけり結ふ氷にせかれてのこりなる

三百首哥中に河氷を

太上天皇

むすふ河の瀬々のなみ風氷ゐてゆくへもしらすこほるらん

前左大臣

夜半にねさめのみ何やこほりぬる月の氷の山風さむき夜半

弘長三年十二月内裏にて三首哥講せられ

きゝよ同人々と　中納言為氏

吉野川淵は瀬に河をとなりてほのかにしのぶ氷の白浪

前大納言為家

網代木にさゝへしなみはたえにけりいつしか春の氷なりけり

正三位知家

さゝれ浪さわぐいかにしほかは氷ゐて山川の水

前内大臣基家

家百首歌合に

冬河の瀬々にたえてゆく水はおのれ小瀬とせ氷はまむ

法眼実伊

従二位前左兵衛督

なかれ瀬にむすぶみなしき氷てとけのかは

守覚法親王家五十首に

寂蓮法師

もろともの水ならぬ氷をあらしふく夜はまさるとやきえ

人々百首歌に

藤原信実朝臣

橋姫の昔もさこそ氷るよのねざめの袖にしもやおくらむ

冬歌とてよめる

前中納言定家

さえくらす都は雪もまじりけり山陽しろき夕暮の雨

冬歌中に

左衛門佐[illegible]朝臣

ならの葉にしくれはいつし霰よりおつる柏木のもり

前内大臣基家百首歌合に

土御門院小宰相

たのなくさしおろしきて庭の玉笹にみたれてみゆる霰ふる

建保内裏歌合に冬野霰を

光明峯寺入道前摂政

ぬきとめぬしのはらかせさえてすゝきの末葉に霰ふるなり

百首歌奉りし中に

土御門院御製

天の原あかつきの志ら雲にまかせて八重に霰ふるなり

光明峯寺入道摂政家百首に冬歌

正三位知家

今さらに荒野にしてくれゆけは草の原に風なひきて

寛喜女御入内屏風に野外に鷹狩する

所の

従二位家隆

みかりする人みかりのたくさすまた雪に梅さく

後鳥羽院に奉りける百首に

光明峯寺入道前摂政

さえまさる思ひゆく人の夜はにこゝろもよほすあさけの霜

題しらす

曽祢好忠

冬かれの野はらをわけてはしたかのあとふる霜ふりぬる

後徳大寺左大臣家十首に同年雪を

皇太后宮大夫俊成

降もためし松も雪かまゐつ草深宿にたれかたづねは

最勝四天王院の障子なり

権中納言定家

小初瀬や峰の常盤木吹しほる嵐にくもる雪の山本

正治百首より

守覚法親王

難波人あしたの風よ雪はらふ磯まの松も枝すり（？）

法印良守絶（？）斐女ことにさしてすゝまぬ時

雪

藤原季宗朝臣

見わたせはひらの高嶺の雪は積りゆくもまた見よ此浦の浜千鳥

平泰時朝臣

春の雪はなれし伊勢の浦の流れくるこそひたや海士の乞ふ

寶治二年百首に積雪

民部卿隆親

きえいくの梅の枝も非枝も雪まてそ見ゆるむかふる雪の白

新院弁内侍

ともなしを誰ていつまてもちふる雪の白き

山家雪といふことを見侍りての

山里は雪ふりつみて道もなし月日と人は心淋しと

山路雪と　侍従行家

あとみち尋ねしらされし跡と見は雪も山路に思ひわびぬる

冬寿中よ　従二位家隆

行人のあともえ思ひ白雪のあとさへ人のまつにはつかし絶る人

建保四年百首之内

前中納言定家

明暮と出て住む人の跡もなし雪の小柴の宿

弘長元年百首之内

中納言為氏

いかはかりにても人のあとさへ今はれ雪ふみ浅草のさと

十首歌合に雪

太宰権帥為経

冬枯の梅の梢にふる雪（雪）を花と見るも昔なる跡にみる人ぞなき

弘長元年百首中

衣笠内大臣

あと絶えて雲間にみえしおく雪はいくへにかゝる吉野山

雪寄とて

後徳大寺左大臣

冬ふかくさらに山の雪ふかき雪の下に雪のあとは

洞院摂政家の百首に

藤原信実朝臣

はつせ山をのへのかねの音ならて(?)ふもとの山の白雪
峯の雪とみるまて

今上御製

ますかけ(?)ふりやまぬ庭の夕暮に晴(?)ぬ(?)よりにけり庭の白雪

後法性寺入道前関白家百首歌に

皇太后宮大夫俊成

尋ねくる人もなき道の山陰や雪と月とのさえまさるらん

冬歌の中に　従二位家隆

ゆふ月夜きえとみゆるとはいへとも雪のかゝれる月とみえ
はるかに見え百首にしるしと

前大納言為家

さえくらし雪さそふ山の嵐にや光を月にやとす白雪

後京極摂政家歌合に雪中松樹

従二位家隆

ときはなる松の葉は埋れて雪をはなとやみる松なるらん

百首歌の中に　大僧正慈鎮

しら雪ふれはかたしくあれ(?)しの松のまかきより積(?)て

日吉社にたてまつりける歌合に雪

正三位知家

月影のまたてぬ(?)程は雪の尾上の松の雪の下陰

寛元四年大嘗会主基方女工所に霜降
給ひ斗りより霜れたる日法のよみける

前太政大臣

九重の大内山のいつなれはをはもる雪も志のきよる香

此月をこゝろにとめよ
後の斗つけり

いつはりや雪の通ひ路立海辺照る袖とも月にみゆらん

豊明の節会ことしも近けれは

今上御哥

雲の上の光の月にさえて霜とりさねる山あゐの袖

前大納言資季

宮人のたもとにかはる氣色かな年の節の代々のしるし

寛元二年十一月東三条院にて行はれし

白雪のふる中に弾正よりて夜や衣ふかゝりけり

太上天皇

白雪のかゝりに弾正と君はてゝ霜そまさる中代のよはひを

治元二年某山仙洞にて十二月の年に

ますかゝやきし

前関白左大臣

天地の我れにかはりて弾正立海のみかはに敬れ咲の

白君

冬年にゝみ給ひけり

前大納言為家

にはの雪の海の花とみえて光りつ日とまする

母女にて

まちく数の名の大宮は花とそ見えて雪はふれる

萬歳亀と　　皇太后宮大夫俊成

小松原や嶋すみ亀にあつらへし青木ともみし嶋の影

　　前参議教長

立海の年代も清と君かまてあまたの代をも經る

ちとせ山内大臣家歌合に海亀歳暮　如

　　二条院讃岐

め祝の岩ねにあつける須磨やくて海の年かす

萬歳千とせ　前中納言定家

年の命はけふことゆゑこそ命の萬歳の名は

萬歳の名はいはひ也

　　皇太后宮大夫俊成

万世にかはらぬ色の千年あまりと

　　前大納言
　　　卿

續古今和歌集巻第七

神祇哥

よしさらは人の心を照すとてあまくたりける三の光

これは稲荷大明神の御哥となん

昔こそ釈迦牟尼佛の世にあひしかやしき月に我も見し
とい

是は春日大明神の御哥となん

極楽にすゝむ道こそ日くれぬれ人のねかひ(?)もありけるなよ

行かひし秋のひかりてこそ心あひしかとくちいさやかにおける月かは

松の色は西吹風やかよひけん海のみとりをみなかよはして

此三首は小野御哥となん

ゆふしほに(?)いかなるなみかとけてこそあひにけるかなとこゝろれ汲よ

この哥は三井寺新羅明神の御哥となん

なにたく衣笠思ともし久禄ハ結ひ老ゆる毎に文はけふ(?)あらはさきありさゆかしてきみ見と頼ことそてらおもへ見せけるは猶よ神の忠そ頼ひする

とよみ侍る

よしなかくしきこゝかくあへなれ宿の月のはの火

此哥は高野明神に人すまひけるよし新勅よ人家きこゆるによりて見し神とそ尊ふつかさ所を頼ひかくなるとなん

凡河内躬恒

なをたのむ天の下まもるやよろつ神北の山風神らはらし

三百六十首歌中に　為兼

小車のめくるもちかふ神山にまかせてそ年の半は来経の

文永二年八月十五夜内裏百首歌中に

よみて侍りける

菅原延季

文治六年秋の月見のかけをよみ侍ける

題しらす

西行法師

神風は心きよくそよせつくる桜のまつ花のさかりを

寛治元年九月十三夜歌合に社頭祝

皇后宮大夫師継

神かせや五十鈴の河のなかれこそ末とをく君か代の

建仁元年五月十三夜歌合に

賀陽院俊成卿

神さひていく世か経ぬる如月の清き水にかけてわかさはる

大納言通方にも此所年の石清水の夜歌合に

社頭月といふことを

卜部兼直

久かたの月のかつら男山さやけき影の頼りつゝ

正治二年七月三十日歌合に

社邊月　　　従二位家隆

石清水すみける月のかけなれや昔も雅とよみのこすらん

朱雀院の御時石清水の臨時の祭を始めおこなはれ給ひける年

紀貫之

松も生ひまたも苔むす石清水ゆくすゑとほくつかへまつらん

八幡に参り侍りし時よみ侍りける

石清水の木の根にしもいにしへと思ひわすれぬすちやはる(?)らん

石清水の流れの末も遠くとてむかしの(?)

入道前太政大臣

けふよりは我ぬれ袖のうすき(?)のみなかれてすめる神とこそ思へ（二首）

大菩薩御託宣の文とよみ侍る中に

平長時

今もなほ忘れしと守る人の国に我(?)国(?)あれはおなしく(?)

神我三の中にあり

大宰大貳高遠

紅葉はよそに見えても河(?)のなかに(?)いとくるくれ神(?)さへ(?)

賀茂臨時祭の心を

関白前太政大臣

春すきて花のにほひそのこるらんこやくさ(?)の祭(?)のかさし(?)なるらん

同じ時祭使にたちて侍ける時にこの
舞人の陪従などしけるに
神主重保によみつかはしける
藤原隆信朝臣

君見よと高や桜山かさしの花の神の心にかなふ藤
信

新院の位のとき殿上人行幸日吉社に
まかりて還御の後殿上人にかはりてみ
侍りけるに
少将内侍

西ならて宇治の神の心もえらは花の藤なみよみなふれ

百首歌よみ侍ける時賀茂社祝

藤原光俊朝臣

かくてこそ秋の夕しで神とまつれば思ひしるらん
神祇歌中に

荒木田延成

新にまかりしときのことのはやまとのりも代々は神ぞしるらん

光明峯寺入道摂政家歌合に名所月
藤原信實朝臣

とよみやの神人の山松の秋をまつ神代かけてまもる月影

平親秋歌合に
従二位家隆

難波津に冬こもりせし花なれや平野の松にふれる白雪
雪の朝摂政家にまいりて見侍ける
入道前太政大臣
さゝ木山としへぬる松のかすことにかけて君か代千世
三十首歌詠侍ける中に
祝部忠成
代といのる君か代新年に祝ふとも千年まて
題しらす
賀茂氏久
君か代ありきにしへの神代やさしても猶いそく
遣唐使にてもろこしにまかりけるとし侍りける
春日参詣日に見侍ける
三笠の山にいてしける月の桜花さかりをまつやあらむ
後一条院春日行幸日上東門院に侍ける
法成寺入道前摂政太政大臣
ふたゝひやかはらぬ春日の神山もろともに
百首歌の中に
後京極摂政前太政大臣
春日山みねの松かえかはらぬ松の春
百首歌中に
入道前太政大臣
千年の神世よりの松の千代かさかへの世の
春日の社にまいりて侍ける

まもるらむさかきのしたのかみそかみの月に杉の代をかく

建保参年百首御歌の中に花の御歌

の事をおもひやりていつくしまにて侍りける

順徳院御製

かすかのや千とせの松の花の香にそめしは神そしるらん

藤原国資卿文永十年の松とよみ侍

りける

法印行清

ちはやふる神代よりこそ[illegible]

題しらす

正三位経家

[illegible]人やしるらん

後京極摂政太政大臣

いつくしま宮の海風[illegible]

正治二年十首歌合に

藤原隆信朝臣

うちつけに[illegible]住吉の神

光縁[illegible]住吉の松

神祇

卜部兼直

西の海や[illegible]住吉の森

家に百首の歌よみ侍りけるに

後京極摂政太政大臣

君かよも千年[illegible]神代の松の[illegible]

住吉にまくもへたてしけふよりは小松の行末と
みさしてこしなる人たちかはかふかなれや
前中納言資長
神代よりみえぬ松さへいくとせの
黒景院の御時千鳥参使のまつりを
住吉の右にたかのひとくさ住吉の
又は住吉にまうて家に待ことのつゝ
住吉の宮の年をへていくとせかみ
住吉の
従三位隆親
みそきしてすゝしとおもふ小夜に住吉の神は昔にうけすなれ

住吉にまうてゝあそひける時に神祇をと
中納言
住吉の神の御宝殿ありつるままいくよ給ふ
建保三年六月二日和歌所歌合松祝
前内大臣
すみ吉の岸のしつかに神さひて松のことのは
建長五年住吉社にて権師人々の
前太政大臣
くもりやなき月と見えける人昔よりかくる住吉のまつ
住吉社遷宮の後繁昌まうて侍し

次よ杜社よりみくまりし三の

太上天皇

神代より神祀[illegible]人ぞなき世継[illegible]の文柱

熊野にまうて侍る時しのびて

太政大臣従一位[illegible]歌事と[illegible]

あそくしみ侍けり

入道前太政大臣

清盛[illegible]熊野へまゐりけるに[illegible]

人のすゝめ熊野へ[illegible]みて侍けり

式乾門院御匣

[illegible]のちのちの小舟の[illegible]のにほひのためし

建春門院皇太后宮と申ける時日吉社に

行啓ありける年人[illegible]て侍る小舟

楽千万歳と[illegible]とわかき[illegible]

[illegible]

左近大臣

[illegible]よりさかのぼる[illegible]のはてにも君の[illegible]

日吉百首歌の中より

大僧正慈鎮

[illegible]のたよりのぼる[illegible]

宮人[illegible]年の

後京極摂政前太政大臣
あめのした[?]てやよもの[?]やま[?]雪ふるさと
貞應元年大嘗會悠紀方神樂哥
千枝村
正三位家衡
さかきはの千枝の村にわけ出て[?]あら[?]にけり[?]たち[?]よろつよ
文應元年大嘗會主基方神樂哥
民部卿經光
かみかきやみちのくま[?]山[?]さかき葉にさしてそかはらぬ萬代のかけ
社頭花といふ事を
祝部成茂
桜花ゝひろふやかての宮こそ神のいかきにをさまりしかけ[?]
白河院御時あまたの手[?]まゝらせく唐[?]よくいはせ[?]御時の唐鏡を小野宮へ奉りて鏡のうらに書付ゝる
右京大夫顕輔
ちはやふる[?]神の鏡[?]にうつる[?]ありぬへきあはれとや[?]人まつらん[?]とを[?]
入前中納言[?]
土御門院御哥
さかきはにちりにまよへる光[?]とにごる[?]や神のいかきの[?]

光明峯寺入道前摂政左大臣

日の國よりひかりさす神のちかひはしつかにそやはらくる

光陰相はなれ給はす百とせまてよ

前大納言為家

あまてらす神のこゝろにもきみかちよをみかきは

百代まてもかはらぬ宮柱と 一首

前内大臣

さかしまにきねか神の宮つ神君か代ゝまて

わかまもるらん

續古今和歌集巻第八

釋教歌

法花經二十八品歌の中に方便品

傳教大師

三の道一のみとなる時は舎利弗なれも先たちて行

法師品

此法をまことにきく人ことにみな佛のつかひなるらめ

分別功徳品

よの中にひとりはかなき人はなも佛となれる

藥草喩品 代わと

慈覚大師

雨ふれて池のうへにうかふ泡のはかなきこそおのか身なれ

維摩経此身如泡といふ事を

赤染衛門

雨ふれは庭にたまれる水の泡のきえかへりつゝ観する身そなき

此身如夢　前大納言公任

つねならぬ世は夢の中なれやうつゝともみえす

是心是仏の心を

僧都源信

もとよりも仏の座とも思ふ身を観の心そ尊かりける

鐘の音にさめて

暁の鐘の音にそおとろかす夢の世の眠りとそ見る

無見者何還獣菩薩中輩

権大納言教家

うれしさは仏は菩薩世にいでて人のさとりを結ふ

平常是心

さとしく仏の心と見ぬかはせて我つ孫の心にしきる

若心離我孰思惟大我

題不知　寂然法師

いまた見ぬ山の草木までもしれとまた仏観せしける

入月のくまてやみにまよふとも世をてらすらむ新たなるらし

隆寺法師

さとりゆく心の中にすむ月は西へ入山のはもなし

大日経の十縁生句とよみ侍りける

水の月と

光俊朝臣

く花影やあらぬとしらぬ暁のさまぐ入合の鐘

ら月

毎夜坐禅（題）の月

古佛心慈鎮

出孫乃月ハ代々をてらしてあかつきにしつのなかれをすみ初けり

月の夜坐禅の泪川

太上天皇

何となく尽やめぐるとたとへるはかりのこのうはなれたらし

非有非空乃心を

大空をむなしきにこれはいひなすもこの世の法のかれぬことは

法花経序品以是知今佛欲説法花経

三井

法の花ゆくすゑまではかねてしるとみよや人やかたりし

十如是とよみ侍りける如是相

後京極摂政太政大臣

相ことにあらはれけるかたちみな新たにむかしにしけるよをてらすかな

本末究竟の心を

[illegible]三位有家

あさからぬ流を結ふ此法の露はみなかへる心のちかひなと

信解品　宗隆信朝臣

りきまれは浅き此里にさすらへていまそしられぬ此年月

薬草喩品　前大僧正慈円

あさからは同し雨にそうるほへとしたかふ草木のたくひ品々

授記品　寂蓮法師

御法にや衣の玉をもとめえてしらぬ人まてかりたのむ袖に

前大僧正雅

これに袖をひろけてみなちくさとは花ふるそらにまかせぬるかな

宝塔品　法性寺入道前関白太政大臣

きえしとも思ひしことのはにしらぬ心をみやこのうちにそ

東三条院の御かたより一品経供養されまする

大納言公任

今日このまことの御法にちかひつつ心もきよき命をそ思ふ

提婆品即往南方の心を

前中納言定家

たのむかな海のそこより涌き出でし人のこころの月のさかひに

安楽行品於無量国中乃至名字不可得聞といふ心を

崇徳院御製

なにはまでもゆきてもいく事とはし

寿量品の心を

俊恵法師

よそにのみすむ月は鷲の山の峰にそ

法橋顕昭

みやいるも月かくれしその[illegible]はてゝ見ん

皇太后宮大夫俊成

ちりまかふ此花の[illegible]のこすむるをや

分別功徳品　願我於未来　長寿度衆生

のちの世と　みな人ぞ

かりそめの此世のちきりあさくして人にさん

おもひしらはや

法性寺入道前関白

世の中の人の心やうき雲にそらかくれする有明の月

神力品の是二音声遍至十方の心を

法印聖憲

鷲の山此根の郭公ふたこゑにきこえし

七十二歳説法花経の心をよみ侍ける

大僧正隆弁

すむ世まではちぎりし法の衣のたもとの下にこそあれ

釈教の心を　平時廣

よろづ代も昔にかはらぬ法の花たえぬためしにみゆる山かな

弘長元年六月亀山仙洞にて如法写経

供養の時十種供養の散花従一位貞子 相

しるきかなむかしにかへる花ぞよ

入道前太政大臣

結びおく其ことの葉も法の花ちりはてず末まで人ぞしるらむ

同仙洞にて○きく如法写経[illegible]

普賢大乗白象夢れことよみ侍ける

権大僧都教恩寛

みな人の親をもしらぬやみにさへきざせる河の其前

題しらず　前関白左大臣

もろともにさとる花ぞかはりける心の色はちりうつれとも

三會暁をとりてよみ侍ける

法印良覚

くもりなき法の花ぞやさえしまの暁にあはんとすらん

熾盛光法をこなひ侍る時よめる

前権僧正成源

くもりなき法の光もまよはぬの日の光のさすらむ

一切經一遍見ての後よしと申けるをりに
つくり千巻におよひされたるのもあらまし
と承りけるを聞てよみ侍ける

衣笠内大臣

うけかたき前世も法のうけにしむすふ淡やたとへと

題しらす　　後京極攝政

いとふなる苦海にいかに法のふねたのみもしらぬ

浄名居士の心を　　寂蓮法師

もろ人のためもかはりてまつらむいかにみの法のをしへを

天台大師と中將の親王

ちかひこしそのみの車もやこの法のみちにおなしかく人

釋教の歌の中に

よに沈みきぬとはまろはこそやかて法のことしれ
かきりありつゝさかりの人をとみよ

藤原成信朝臣

みなかみにまかせたるそてに法のみちのとくなかれ人

教是佛語禪是佛心還有讀誦と聞て
侍りける人のもとに

思順上人

思ひしるいへにこゝろのうけのみちをえてしるしいりなれしなりやせむ

此歌文の所散西寒乃心を

ゆふくれの中に山里にかへりけるゆふ時雨を

僧正信恩　山階寺別当にて侍りける比二年

講とこなひ侍りける聴聞にまうて侍りて

ふかき夜の寂蓮乃花をちらす法と

僧弁法師乃そのしるしをいたしけれは

たゝみのかけしるく乃あま書きて遣し侍り

ける

貞慶上人

ゆふ暮のかはらし山のかけ色そむる月日かな

立帰り侍りける時おくれぬ涙にて

入道前太政大臣

世をすてゝ出ぬる身吉野の奥なる山の花と

十波羅蜜乃中に檀波羅蜜の心を

後京極摂政太政大臣

うら山しよ花と月とにむすほれてはなれぬ心いかゝすへき

題しらす

光明峯寺入道前摂政左大臣

ちりのよに人はまよひて風の前なる法をうけん

空観乃心を

法印下実俊

ゆくゑしる空にまかせて法の世をはるかに出る月のかけ人

色即是空乃心を
信生法師
あなかしこすめる夜にもてはむなしきみちを文はなき名
題しらす　僧都玄賓
みわ河のきよきなかれにすゝきてし衣の袖を又はけかさし
法名和佛清寺
きよく佛乃御名をとなふれは心の海よりあまのそらすみける
薬師如来を　正三位知家
ちかひおきしそのかみやまもきえぬれと六のみちのやまひをも別
題しらす　前律師永観
ひとつもいのちの夷由をつの法施よりほかにはなを身をいてたる人
佛乃道を得るは
僧都源信
極楽とおもふところは世にもあれそのかみの光をやとそてらさん
釈教哥とて　法印智海
世の中にあるはたゝひとつ得ぬる心の月ならはおなしこ
源具親朝臣
ふかくさに極楽をなからむとおもふとしめしなるのうへてもなるをのまゝ
無量寿経四十八願の心を
僧正慈補佛
とのみ伝なり

證恵法師
名の花も白ひとおもふに佛にまさる色そなき
樹穢若空といへると
大僧正隆弁
いかならん木に法をとくなれは花にあらしのさそはさるらん
花のさかりに極楽を観せさせ給ふ
花山院入道
おもふまま花みるたひに西をとたのむ我にもなれや木立とや越
厭苦縁の心を
頓阿上人
いとふ浅世のこころはれなはかりそめの宿と思へは
題しらす 天台座主隆覚
さとりゆく世の花をとさそひやこれにもなれやまたなくはなし
大品般若畢竟空寂
藤原清輔朝臣
まよひこし身の花とさとるとはさてもこの世にかはるへきかは
未得真覚恒處夢中故佛説為生
死無明のこころを
法印長恵
ゆめのうちにかなしかりける身のほとをさとらてすきし人のはかなさ

駒迹に釈教によみてまゐらす

僧都源信

人はみな寺の錦にもなりて一体仏の座にわかる夜の
清涼寺によみて讀給ひの

寂蓮法師

これやこの家のうちにてさる聯の寄に朝の月

象山似洞の持仏堂仏菩薩に法華取意
と名師によりて女房花の枝に菩提樹
の念珠をつけて布施にまゐらせける
字給

あらまし

後あそこの秋の暮れては菩提のしるしとも
念珠ともかくにめくらしてわたなけさり
まことなりて元年のひとりしろしと

慈恵大師

暮さるあとて衣のうらをけさこれにかくらけれ

海よりむかしの秋

續古今和歌集巻第九

離別哥

道因法師女ともなひてまかりける老母(?)ありけるに、近江国へまかりける時いひ遣はしける

顕宗(?)

さゝ浪やわかるゝのとめあまにらん浦あましれはみもしらぬ
志賀の浦のなみのあとはへたてなけれと人によ

山家を罷るとて　延喜御製

よそにのみきく(?)人ハ(?)かくそ(?)とやはと(?)庭

御乳母のとのゝ許へまかりけるによそ(?)まうけ給ふとて

天暦中宮

ふゝ衣(?)たちかへる人(?)もちきりしものを袖につゝめる

天延三年十一月斎宮殿上にて宮作(?)侍りける

餞をし侍りける

円融院御製

幾代をいのるにかはる旅(?)の別れしてたゝ(?)かけ(?)も

大宰大弐高遠下り侍りけるに餞すとて

小野宮右大臣

旅衣をのひとりはゆめ別るともこゝろにとまれ
かな
大宰大弐高遠

京の代のはじめの小二條の様なれば祈りてもいまだ
藤原保昌朝臣に具して丹後によくてまかりけり
和泉式部かもとに梅とすて遣ける
権中納言定頼

旅なれゆゑまで(らへ)ぬはゆくへも[illegible]ぞ
大宝二年正月賜従三位高市丸をはりくだりける
時(に)河内のくにゝて餞せよと
侍りける
柿本人丸

たく付てかやうしの人まちたのひくらむとおもひき
亭子院文(淡路)の時まかり侍りける
わかれ別れてはなれ行(く)きみがあとの
別れはてゝ世の(人の)[illegible]せ
遠ざかりにし見ゆる
源嶷

わかれてもこゝろへ(別と)たえぬものなればはなれし
わかれゆく海のゆくへの人やり道かな
わかれ路は雲(これ)と別れてゆけばこそもののうきみ
躬恒

紀貫之美濃介にてくだりける時よみしと
みてよめる
おふみかよ尺千は又君のいへをとも千代にとも
五月の節前藤原為雅朝臣常陸介にまかりくだる
下りける時に大将済時の餞し侍りけるに
し侍りけるによめる
大中臣能宣朝臣
おやま草の露けき野辺を分すきて人の世にふる
まれなりける人の許にこそはかへれ
かへりける

冬ながら春のとなりの近ければ中垣よりぞ花は散りける
惜しめども人の物にて月日ふる
しけれ
紀貫之女に添へ侍る人のしはへけるに
おほくの人を見し時に送られて人のもとにまかりける
女御徽子女王伊勢へくだり侍りける時
選子内親王
秋霧の立ちてゆくらん露けさに心をかけて思ひおこせよ
むかし
女御徽子女王
よにふれば又もこえけり鈴鹿山昔の今になるにやあるらん
儀同三司の母伊勢へ下り侍りける小遣に侍りける

一条院皇后宮

雲ゐまてみ橋のなかにありてわひしさのうちにをし

大納言経信はくりてよくりける時後朝に

とまるものとはたのみておくりやる付て遣ける

堀河院中宮上総

まれに待よひのあはれとおもふやれもみちなき秋の暮に

題しらす　源重之女

はかなくも夢のことなき別のあはれをおもひそめけむ

殷富門院大輔

なかなかにわかれをなけく袖にしもあかすよもなきよそにしらるゝ

後朝別の心を　前大納言為家

悔しくそたかひにかはる別のならひそ

文永二年九月十三夜の後朝に

月花門院

まちわひしかねてよりなほ別まつ橋のうへに

おなし後朝の心を長秦送侍りけるに

くり中の暁の女房にかはりて詠る

権中納言長雅

おなしくは後の世のふかきまてかはりゆかむ

登蓮法師まかり侍所へよりけるに

遣とて　　従三位頼政

うれしかれ秋にたちける狩衣さてひころはなれけん

為盛すゝ肥後下侍けるに

清原元輔

さかりゆく田子の浦風吹かへし心の別すゝむとは

堀河院御時百首歌奉りける時

別の心を　　藤原顕仲朝臣

かへる日のとまりもしらぬ別路はまつに心をとゝめよかし

同心をとよみ侍る

源孝行

ふかくとも別路はなかなかのこる名の袖もえも

崇徳院百首歌に

藤原清輔朝臣

行末を祈て出る別路はいかにかへらて又やあはむ

題しらす

藤原隆信朝臣

ちきりおきし我中道は遠くとも立なみの袖かはかぬ

わかれゆくけふの人をおもひてあるかな

ねらひ（？）あふとて

源俊頼朝臣

東にまかりける人に紅葉の枝につけて遣しける人別路

慶政上人唐へわたりける時つかはす
従二位家隆
ゆくとまる月のみやこははるかなれともおなしそらにていかておもへはと
返し　慶政上人
わか出見和漢くにゝいてんまてすれなることそ人のこゝろを
ちきりける女のはかなくなりにけるを
[illegible]とをき道のはてまてと言かはしたる男の
とをくまかりける男の遠く侍けるにつかはしける
[illegible]　伊勢大輔
[illegible]

遠く所へまかりける人につかはしける
祝部成仲
別路はこゝろのうちにかきりなきいつとも知らぬ人のゆくへを
とほくまかりける人のもとへ鏡を遣すとて
よみて侍ける
恵慶法師
わかれ路をおもひやるかな鏡山[illegible]
登蓮法師[illegible]侍ける
祐盛法師
[illegible]

人に別るゝ道をしる

前中納言匡房

嘉禄の比ほひかすみなる七月はかりにとゝ語らひし人
思て頼みける女かれの比よせて別を
歎けるいひ遣しける

前中納言定家

今日やさは逢みてたにも年の末ほ思へれ昔は
ゆめとの森

續古今和歌集巻第十

羇旅歌

羇中寿といふ事を

中務卿親王

雲のゐるすみかのさとのはしたなめあけてもけふ
旅ねせむ淵かな

わたし守清見の関の清見かた波みしかきよも

百首歌中に　中納言為氏

忘てもなくさみなつのさやかにもあけ浦のみなと
ゆきさきの山とこそみる

人丸

志賀の山乃松風中にて梅人にまかせは　ゝかゝ
持統天皇吉野に御幸志給ける時参
して見侍の斗哉

佐保之太郎

ぢらし山秋風さむし梢よりこほすあらし待の河なみよ
題しらず

大納言

山こえてたつ春かすみ見まちゝて待やみとは
藤乃花を

貞慶上人

積りみて次第に見えぬ方に此人の四方の空まで

源有済

五月雨はことしけ義きまさりそくやまふの心ほかなん
梢乃色まさりゆめ哉

平泰時朝臣

ちりつもる宿は池の水の家わかれてもとまちすむ御身
夏乃梢とふとに生る待花山

参議雅経

なにと見んそぬ露のまよいかに縁まなれさ夜の中
題不知

前大納言伊平

浅き谷の水の上に秋ならて人の我ゆく秋のまに

津の國の須磨といふ所に侍りける時よみ侍りける　中納言行平

旅人は袂涼しく成にけり関吹こゆる須磨の浦風

後京極摂政家の十首哥合に旅を　寂蓮法師

[illegible]

福原の京にまかりけるにいく田といふ所にて[illegible]人のもとに遣しける　左京大夫脩範

思やれ生田の杜の秋風に古郷こふる夜半の寝覚を

題しらず　人丸

[illegible]

都のぼりとて二村山を[illegible]　前右大将頼朝

よそにみし小篠か上の白露を袂にかくる二村の山

洞院摂政家百首歌　藻壁門院少将

[illegible]

時もわかすて見侍りける　法印良守

伊勢路やわたの濱邊の今傳ひ紀の海かけて見る月の影

善光寺にまうでてける時をはすて山にて
月のこゝろを見侍ける

前大僧正覺忠

あはれなりすてゝ山の高嶺にも月はまちえて雜にこそなれ

旅の字歌中に

中納言為氏

いく夜我やどかれて見すらん近江のしの山の月
おのつからまどろむ時も夢の中の旅のねざめつゝ

月くまなかりける夜をみて

平政村朝臣

舟の山中に雲のゆくへはしらねども大内山の夜の橋と月をみる

道助法親王家五十首歌に旅月

正三位知家

むさし野は月もまちえてゆくすゑもかぎりなきことをみゆる山の端の月

旅の歌中に

後鳥羽院御哥

宇津の山まだ雪深くこえゆけば旅の夜の見る峯の雲の月

文永六年の時旅泊月

皇太后宮大夫俊成

袖の上にわたらぬものか月も旅のゆくへのかけなき

崇徳院に奉りける百首の歌奉

待賢門院堀河

なにとなく同じ月とも見えながら秋の空とや思ひしられん

中務卿親王家歌合に

光俊朝臣

月はなほ見る同じ空ならなくにさこそ憂き世のほかに住むらめ月あはれと

いかにとかみゆらん

前大納言資季

都にも山のはいでし月ならでまてしもまたぬ名残すゝむる月と古人

秋のこゝろはゆきてもあはれなるらんとて

梅忠轄

あまの原ゆく秋風にさそはれて里の山の端に遠

みゆるかなたにやりて月のかけ

けりたぐひなき

左京大夫顕輔

西にゆく都の空もいそぐらん風にまかせて行月の

旅宿月を

行念法師

旅寝する袖もなみだにぬれそめて草の枕にやどる月かな

寶治二年百首に[illegible]月

藤原隆祐朝臣

[illegible]

おもふことみさの東のはての枕にも旅まちつ月とみるかな

旅宿月といふことを

前中納言定家

見る都の人の月とやおもふらん旅とかなしむ夜の人

建暦二年詩歌合に羇中眺望

従二位家隆

毎も昔を思ひたちぬるしかすがや月にむかしの鹿の山

道助法親王家五十首に海辺を

参議雅経

新ら之袖にやどるなみの上に月をぞ宿すなる明日のとと

旅寺中に　鎌倉右大臣

旅ねする伊勢の浜荻露ながら結ぶ枕にやどる月影

前大納言為氏

わか門の出くる人の旅のさむしらぬ夜の月の宿かなと

弘長元年百首歌合に旅泊　忠康と

いふことを

皇太后宮大夫俊成

舟とめし明石の月の影に浦ちかきあたりのかりねの空

三首の哥詠侍し時

中宮大夫雅忠

よひ立秋の草木にわかれぬ風も身にしみて

後京極摂政太政大臣

従二位家隆

きのふけふ神なひのみむろの山の秋ゆけは錦たちきる
心地こそすれ

柿本人丸

草枕雨にかはれる秋風のふけゆくまゝにやとりかねつる
まてしはしあまりにうつる時雨

素性法師

雨ふれは紅葉の錦たつた川なかれてはやくうつろひぬらん

山まて

木の葉ちりゆく秋の風

しくるゝ夜半の嵐のさそふにそ
いつのまにはなれぬる

権僧正栄西

木の葉ちる山のこすゑはのこりなく紅葉ちりぬるやまかせ
の色まて九月のたつ時雨のふりにける

女御殿子女王

秋くれは夜半の嵐にさそはれて時雨そめぬるいくたひの

式乾門院御匣

時となくいそくらん見る

式乾門院御匣

おもひやれやよひもしらぬ河音に木の葉にたぐふやどのすまひを

建暦四年十月十五日詠

僧正行意

たえだえに嵐もさそふ木の葉のちるや時雨の野辺の宿はなかなか

題しらず

藤原秀能

都にはまだ秋なる時雨にて寒くぞ白河北呉

海路時雨と

皇太后宮大夫俊成

神無月さかきの葉かへ松風もとも時雨のなかの

建保三年内裏七首歌合に冬夕時

従二位家隆

さゆる夜やもの思ふ中にまかせしその松の音こそまされ

権中納言定家

引むすぶ草葉も霜の置くなれば一夜のうちに河

正治百首歌の中に

式子内親王

霰ふる野池の汀にうちそへて雨の音にも秋はなかりき

二条院讃岐

千鳥鳴く河風みてもさむけきにわかれそぬる床

十首歌合に海路時雨と

前参議俊頼卿

秋までの宮城の今雪折てそこなの呉竹
おつさにくりて待る時様言おもしろき の笑
待年の月　従三位行能
みちのくや見まし白河の関おもしろの塩の浦
百々清寺の中の開路と　七御の僧寺
寄風吹花山の名残おしき見捕の笑
太峯まてしみ待り月　僧正行意
ら紙山春の比お藤屋の頭にむかし法のたえ果し
前大僧正慈度
雲の浦みなけるみみてもおやまし御はけ身成の
法りよる見てもし見待る月
権律師厳雅
山まさ社寺に独てもそふおまもこれねとも何に侍
住吉飛浦にむ着音まてらす時
参議雅経
かみの昔は嵐のものあもしみぬ夢の細みち
大宝元年十月すぎ紀伊国に御幸志流
み月
よみ人不知

萬代乃ためしと二庭の日影にも花をハおもひ候ハす
題しらす
ゆふされは庭の三角の霜さえて渡しに雪をおもふ
かすみの山やまの雪もとさてくらす山くさの花とふるさと
前関白
花の色の花さかりもやせより峯の白雲
山桜を
前右兵衛督教定
執筆として暮にみよしのの山の花もりまいらす道にも路にゆかん
建仁参年和哥所三百番歌合中
菊若と云ふ心を
若葉や我もめくみしに草かれ行く野辺の若菜のあらし
若菜をみしその春のは
西園寺入道前太政大臣
わか人は今とのみ日子れ行く小松かしら東
梅の色とよみ侍りける
藤原為相卿下野
またしらぬ野原ハすみの夕川目もしらすくれ行く
前参議信実朝臣
中務卿親王
いつ春てかさねてもみん若葉花おもしろくさやの中山

はなまくらり月の時鳥の声やまた

大宰大弐高遠

浦ちかく年ふる松も浪のよする(?)ことに

洞院摂政家百首に桜

藤原信実朝臣

塩風のよさむに吹きたるみねの桜戸の花のみなは(?)世に

桜の花と

後法性寺入道前関白太政大臣

わかれゆく山桜のやまの桜をもみるこそ花の君(?)

よみ人しらず

桜まで神山の(?)山里人の(?)あきのなか(?)さとまて(?)に花

霞すむ岸は塩やく海人の(?)……

中納言為持

浪吹く浪やこゆるも待つほどに……

山辺赤人

海路落花といふ事を

前関白左大臣

沖つ風の浪やよせくる……

浦路を

平長時

あま人のうちの流の……

題しらず

藤原基政

舟よりて當国に下り侍りける比よみて遣しける時文平度般若の歌の
思ひやる心のうちを白雲の
白雲のかゝる山路をへたてゝも心はかよふものとこそきけ
なるみの浦とすくしてもあかぬ侍従
安嘉門院右衛門佐
まれにこそ都の人も見るへきに
吟海寺にて書付侍りける
前大僧正
寂しさは何とかたらん浜千鳥なれてかなしき月の浦風
三百首の哥の中に都鳥を

太上天皇
こと浦にすまはうしとや思ふらん人の心やかはりゆくらん
波の上に百首の哥中に
中務卿親王
ことのはにすみなれし河原の秋の夜はいかなる空に数とし
百首の哥中に
法印
思ふ人ありやなしやと都鳥都にもとはれぬ身の老のなみだか
田原天皇御哥
鶯の声
なをやはなれぬ風の吹のかすかなる流れにそひて吹

はるはるの日のまへの河都ちかくなりにけらしも
もとさね　大納言経信
都まてあはれなる霞にひとり行人橋まて渡りてなかめし
はるはる後鳥羽院の御時大臣より参らせし
百首　皇太后宮大夫俊成
みちのくにありといふなる名所をみてきくや海山都のさかひにそあるへき
題しらす　前参議経賢
君か代の都もちかき坂の関のあなたに光る人そ見る
四条中納言風といひける女房
土御門院御製
雨風のかよふ人あまた都にて末の世まても見るなる
様行の心は
白雲のたなひく神と思ふへき山も都
女房

續古今和歌集巻第十一

恋哥一

題不知　　業平朝臣

君により思ひならひぬ世の中の人はこれをや恋といふらん

延喜十三年亭子院歌合に　　躬恒

しなくおもひみたれてしのふれと人のつらさはかくれなきかな

恋歌とて　　素性法師

見ぬ人を心にかけて思ひきえまとふしのふとも知られぬるかな

前中納言定家

りにのみまちてみし人のことはりもやかくてまたふ

和哥所にて六首歌合に初恋　　参議雅経

なにはやなにはと思ふ津の浦の袖にしほるゝ袖のうら

老若の時の百首によりて

後法性寺入道前関白太政大臣

今はたゝ思ひやなにはのあしの葉の心の

弘長元年百首歌に

入道前太政大臣

しらせはやまたみとなれぬ田の袖にしくれぬらむ心と

初恋乃心を読侍と

あらたまれ衣にそ心の色を染しらせばや

土御門院小弁

坂上是則

くれなゐの色ならてこそ山桜も涙の色そみすがら

前大納言忠良

思ひわび我袖にかる心の色や涙なるらん

光明峯寺入道前摂政家恋十首歌合に

寄衣恋

山姫のそめぬる衣もくれなゐのふりいてや今は

後堀河院民部卿典侍

手に染て何となりや涼てよ離るる色も[illegible]

前大納言隆房

同じ比の時乃百首の歌所恋

いかにせん袖にあまれる涙かな人の下帯とけて色やみゆらん

光明峯寺入道前摂政

恋歌とて

信実朝臣

冬なれはいふにいはれぬ心をもみえやみよかし人と

忍恋(?)百首の歌たてまつりし時

皇太后宮大夫俊成

たちかへり我のみしたふ思ひのみ

題しらす　前大納言忠良

[illegible]

大蔵卿有家

[illegible]

前[illegible]

[illegible]

摂政太政大臣

[illegible]

中務卿親王

[illegible]

太上天皇

[illegible]

恋の御歌の中に

[illegible]

前左京大夫

秋の夜はおりかさねたるかのうらの月にうちの浦の月まさる（ん）

寄舟初恋といへる心を

前関白左大臣

いそのかみふるの山さくらかすみのうちにおもひそめてとそ染し

寛治二年百首歌の中に寄湊恋

中納言為氏

おもひみるとふかの白浪の立へたつなかのかれしも（と）も

千五百番歌合に

野宮左大臣

くもゐの花の散るをあまたの浪の色に（と）みえしは

忠定朝臣にかはりて

平政村朝臣

みるとても人もやまけるかの心の花をちりかたにみえ

藤原基政

山河の岩ほは花の色よりも（ゝ）はやき瀬の

真昭法師

山水の岩根の花まれはゆすとも世にはかり人の心のあはれは

題不知

権大納言顕朝

思ふとも世にみえそ袖のなみたの色は涙なる（ゝ）ら

正三位知家
春くれて人もすさめぬ藤の花たか里かけて誰かをるらし
弘長元年百首の哥に初恋
前内大臣
まよはねのくものゆくゑもしらぬかな思ひそめてし恋のゆくすゑ
寄席恋といふことを
鎌倉右大臣
秋の野におく白露のしら玉のかくれてのみやこひわたりなん
題しらす
右兵衛督基輔
人しれぬ心は秋の夜なれやあけかたにのみ露のおもりそ

百首哥中に恋の心を
右近中将経平
あさちふや秋風のさむきにまさるこゝろとや思ひける人のつれなかりける
謙徳公
おもひやる心のうちの花なれはいかなるかせにちりかはるらん
前内大臣家百首哥合に
権大納言顕朝
まちみてもなほしなれぬはなき人の涙にしつむ人のこころを
洞院摂政家百首に忍恋を

世の様の憂きも見えつつ月影のといひくらしにそれ

弘長弐年十五首講侍り恵待従と

太上天皇

まれなる年にも依て数よる名残とはひける月を見るかな

前右兵衛督中将為氏と

前内大臣 基

はてしなき山よりいでて月影をあまた人めにかかる方に

題しらず

経恒

よしの山ちるや人なき花さけば雲を霞にたちてものおもはずや

左助法親王家十五首歌に花を

西園寺入道前太政大臣

何と又樋口にとまる梅の花かなしき秋の夜

寄雲恋

侍従行家

さむしろの夜半にこえぬと君が待つ雲の旅寝に人のこゝろよとよ

皇后宮大夫 隆信

あはれなるよその心をかくとても思ひそれ山の峯の白雲

経二位家隆

時雨ゆく木の葉もけふはつれなくてこゝろにうつる秋のくれかな

名所百首歌よませ給ひける時

順徳院御製

神無月ひのいりゆく世の末の雨時雨そのひまもなく秋ふかくして

題しらす

前中納言定家

忍ふるもあらぬ袂に露かゝる時雨も色はまさるものと

信実朝臣

時雨ゆくとまらぬ袖の紅葉みゆる身にかゝる人はくらし

前大納言基良

紅葉せぬみ梢にたてる初時雨ふる紅葉は色のまさる

土御門院小宰相

思ひ出ねにのみ見ゆる時雨にもなみたの袂そぬれし

従三位通氏

このはちる秋をへたる年の袖のしくれは

中務卿親王

時雨まてしばしまたれし松の葉と涙もさそふ袖の冬の

寂蓮法師

冬はまた時雨もしらぬ袖をのみ時雨にふるしくれ

忠房朝臣

中納言

冬のきぬはほしき袖に若く時雨の梢には

光俊朝臣

従三位行能

神な月しくれてくもる袖にとふ

百首歌奉りし時　　好忠仲々の

よの神や杜の梢の秋草はおとろへて霜枯の冬にあらき人

題しらす　　藤原光俊朝臣

かれはてゝ霜にくちぬる中々によもきの名にてけそ人わすれきそれ

宝治二年百首歌に寒草を

前太政大臣

人めこそ志のふの常より多くかれぬれはみてふかそれをあさむきん

生も哉まこと今の命しかしきまこと

不よみてし

山かせの中をさしては吹かぬ人の形のうへに思ひ出けり

題寺とて　　右近大将通忠

里中にかくや人の心もて志のゝ字しけそ色の端に思ふ

内大臣

わか袖の岩根にかゝる白浪のやかてやまぬ思ひの種

百首よみ侍りし時寒草を

従三位為継

鴫の羽かきつむる人をあたに思ひとまらぬ人の心とも

題しらず　　みつね

春かすみそをさしたてし秋の袖にかゝるしら露

おなし

う見人つらき世の
早くより梅さいくる花乃香よたと涙そ こほる
みなされてこそとしのふ乃の下よ忍ひともなそ かなし
弘長元年百首哥よ懐旧を
入道前太政大臣
わりそも今さし昔の秋よ年梅乃下かけ なし
懐旧乃こゝろを
権中納言長雅
しれぬ世の下をふみわけし跡をおもひ今もおもふ袖ぬらしつゝ
三十三首哥とて時懐旧

世よめ乳敷ゐありやうとかくしも忘れぬむかしかな
建長参年吹田十首哥よ
藤原信実朝臣
年つもれはまた恋のわすれ侍れとも…今は忘てもしのはれん
後法性寺入道前関白右大臣に侍りける時百首哥より
皇太后宮大夫俊成
なかなかにあはれぬ袖なき物よりいつもの恋しきものを しのはん
千五百番哥合よ
大納言通具
世をそむく苔の袖の涙よしのふるそれ乃むかし乃哥よ

寄涙恋　　衣笠内大臣

かへるやまの宮人かたにみんかはらぬ涙かなと

伊勢

くれのなく見まくほしさに涙とはなかれて袖のくやしかるらん

藻壁門院但馬

袖のうへはかはきもあへぬ涙のみそていかにせよとか猶くらふらん

中務卿親王家百首歌に恋を

右兵衛督教定

いかにせん思ひあまりの涙にもぬれてかはかぬ袖のかなしさ

題しらす　　西行法師

袖の上のかはくまもなくみなかみに涙

慈鎮大僧正

よに涙かはる河かはの浪かせよ山の中また(?)れし

思て人の袖にはなれぬ

和泉式部

何事も心にこめてさものをといひて涙のせきもあへぬ

千五百番歌合

参議雅経

思ひせく心の涙のたえまなくそてはなれ行袖のみなかみ

寶治弐年百首の中春雪を

前大納言為家

かすか野は雪のみふかく人もこしのはなもかすみのよし

新院弁内侍

あまの原そらにかすみのたつけさはしら雪ふれと春はきにけり

題しらす

よみ人しらす

霞たつ春日の野への雪まより若菜つむらんしつはたもすそ

寶治弐年百首歌中

前大納言為家

かすみの春とやいはん風のさむき

今上御製

梅か香のさむきよの袖にうつりきてやゝかすむ月に袖のおもかけ

前中納言定家

ふしみ山かすみのおくの梅のはなかほるさむしろ色にこそ

曉月十首歌合

前左大臣

難波かたみきはのあしの冬かれてすゝしき梅のむら雪

題しらす

山邊赤人

わかの浦にしほみちくれはかたをなみあしへをさしてたつなきわたる

四月一日人のもとにつかはしけるの

藤原範永朝臣

こゝちよくなきもしらるゝ郭公人にしらせむ我宿にきて

八条太政大臣家歌合に夏恋

左京大夫顕輔

夏衣うすくや人の思ふらむ我袖のなみだもしらずして

題しらず

曽禰好忠

わぎもこが衣よりこそ思ひくらしけれ

白露のおきてつゝむ中のまくらかな

読人しらず

かはづなく井手のかはせにかゝりけて山ぶきの花やまさりける

寛平御時后宮歌合

ともしみ人にしられでつゆぞおくあまのかはらのあしべにて

百首歌の中に

崇徳院御製

ほとゝぎす人まちえてもなくこゑを物思ふ宿に聞くぞかなしき

寄橋恋と

僧正行意

くちはてん名をしもいかにかけはしのなかばたえにし人の契りを

恋歌の中に

後堀河院御製

前世よりの契ありけるにやかくもあはれなるにや
かくよみ侍りける
正三位季経
いつくにも鳥のねいかにきこえけんいつれの人
題しらす
よみ人しらす
ちとつ名やまの庵にすみしをも今ここにたつ
思ふ身とならのみちのゆくへにおもひ
大井河井せきにとめてものゝおもはす
わけ山の思ひはなれてたのもしと
いせの海にてつりするあまの
すまの浦の藻塩のけふりたちそめて

二房山の花よりも此秋の月のてらす
ころは雨てや風ふかん太和花乃かれかけ森の
人丸
ちかつね

續古今和歌集巻第十一

恋哥一

正治弐年百首哥に　式子内親王

ゆれし石半此るのからてはまの梶とも人はしられし恋の
恋の山路と

藤原元真

思ひといふそをなくしゆみのとしものさゝ身とや
しられぬことも哥清見とそはしのう
しらすいはのこしろわり

今上御哥

わか恋のまゝ世のなかなりし世中はいつしれ
題不知恋歌とて　左京大夫顕輔

偽とおもひなからやまとそまかのやまのおもひのわかれ

賀茂社哥合に　正三位家隆

はかなき世をたのまじとおもひしかとも恋の名をたゝし

寄雲恋とて　正三位知家

消ゆるのみをたのむひとのかねことのゆきのしらくものかかるしら雲

題しらす　　　　前大納言基良

伊勢乃海みるめなきさにたつ波のひまなくかゝる袖の色かな
寄る玉も人の心と　　　新院弁内侍

まちわひてこよひの海のうきねさへ袖ぬれてこそなかめあかさん

百首歌中に　　　　衣笠前内大臣

なけきつゝ見えぬ森乃みしめなはくるしきなかにあはれいつまて
洞院摂政家の百首に恋の心を

従二位家隆

人しれぬ思ひのゆくへ心にもしらぬ恋やみちにまよはん

題しらす　　　　兵部卿元良親王

大方に思ふ心のなかりせはかくはかりやは人をこふへき

不逢恋のこゝろを

権律師隆昭

世をさりてあはぬやまひにくるしむは恋をしすゝむ世にもあらなむ

法印覚寛

あはれ我いつく行ての世にしあらはかゝる思ひに恋ひしもあらし

寄木恋紙　　　　侍従行家

谷の雪のそめまつやまのこのはにもみえすもるとゝもあらはれぬへし

題しらす

藤原隆祐かね

わかまてのおもひそれのなへてかれとのみなからわかれのくれん

左京大夫顕輔家歌合に

民部卿顕頼

わかまとし身よりふかきあけほのつまなれあはれ数ならぬ

恋歌とて

権中納言長方

こひしなは世のはかなさといひなしてなきあとまても名をやのこさむ

あはれともみなそむくいひなれし先の世まてしも人のつらさをおもひし

西行法師

何ゆゑとおもひそめてかあとをたにかけし命はつらきものから

久安六年九月十三日内裏歌合に不逢恋

関白前左大臣

くれなゐの袖のしつくはなるまてもわか恋しのほとせく涙か

前大納言為家

なのつわかことりねの此命ともに年月すき涙なくくの

大納言通家

中々にさても命のあらんわか恋のくて身をはやすれは

中宮大夫雅忠

ほのほにたに岩はしわか坂の山は神かれ関ちなくくの

内裏百首奉寄山恋

侍従隆家

人のすむさとにはなれぬ浪とこそ梯の山路の寒き風らん

同し心をよみ侍ける

土御門院御哥

志かの浦のさゝ波風に行さらにせきちかはまの末の橋とそ見ゆ

忠岑中有

紀貫之

旅にての頃恋侍人行渡すわたつ海の山の橋に跡せ

名所恋と

中務卿親王

くらへや恋とすゝのたえふるみちもとた江に橋かとも

千五百番哥合に

二条院讃岐

嵐ふく立そふ雲はかすみとも恋の橋そさらにわかれん

宝治二年百首哥寄橋恋

皇太后宮大夫俊成女

いかにして恋の橋のうきふしに沈めるかけの石とわたし公任

同し心を

寂蓮法師

まよひ立出る跡の橋ふみ下さ海のゆくへもや

藤原光俊朝臣

うきすのゝ人のみなかの夕橋わかれゆく

平親清女

一 これや西のかたとて此海にて塩のうらうらと見え渡らん
源俊宣朝臣

下ゆきをたゝぬ大内の橋いかなくも名のみ残りてとおもひやる世
正三位和家

塩のよせくの橋もなかめとまつもかりは寄所の生すりの春
見る人はみな千年の時の百首にあるとそ思ふと
前大納言男子為家朝臣

住吉のちきりのまつにもとめ年をへてもろひとにおもひしるかな
文禄元年十二月日書之三百首頓写松良
大納言良教

住のたなのわかの松原とよみし程にて代をかさねんといはん
不老遠忌此道の海と
大納言兼勝為教

秋山の松の葉かたの松村雨にて色かわらぬ中にかりけりひさしき
如住法印久しく寿の名有百首奉和
前中納言宗家

わかのうらの浜の末ながらし松の名やかわらぬことのみきて
千年百首寿命をかぞえ經年
住吉の神院奉

わか国の和歌のことはのうみちかく人のすゑまても神の代をまもる
題ならひ
参議

徽子女王いはんとてはゞかられける

入道清守

おもひ川身のなくなりなくあまたせをせすとも

百首の中に恋の心を

式乾門院御匣

おもひあまりわするゝやみをいつまでも心ひとつのうき思ひかな

中納言為氏

身のほどをたどれはやとはしる人のつらさはためにてはなし

殷富門院大輔よみ侍りける百首に

前中納言定家

さてもなほみるゝは袖のひまなきにあまりのひとめのはかなさは

忘るゝ中に　醍醐入道前太政大臣女

人しれず袖のみぬれとわかれ路はおもひの外にあかぬものかは

洞院摂政家百首に

光明峯寺入道前摂政家

涙のみおもひやれども身はうき世の床のうへに

題しらず　業平朝臣

白雲のかゝれる峯のなかにこそよそになれにし人も

宇治橋をとこそ中に

平長時

涙河しつみし世をはかくれとも身をもかなしとおもへは

源具氏朝臣

年をふる涙にいつもくちぬるは人のこゝろのうきにそ有ける

從二位家實

思ひきて袖をしほりし物のみか涙のうへにうき名なからん

百首御歌中に

前内大臣

わかれ路をかなしと思へはいかにせん涙をなかす袖の浦波

寄時恋心

入道前太政大臣

袖のうへにかはかぬ涙のくれなゐを見せはや人にあはんと思へは

題しらす

紀貫之

さためなく世はうきものと思へとも涙の三すの冬もこほらぬ

入道前太政大臣家百首歌に

源有長朝臣

世とゝもになかるゝ涙河冬もこほらぬ水のしたかな

題しらす

新院御侍従

ます鏡見しそのかけもかはりけり涙とともにうつるならねと

柿本人丸

おもふとちゝるまての磯のうちにすみける人と思ふらん

閑院大君

昔よりなにはおもひし海乃濱けふこそ松のみすてられけれ

名所恋と　右近中将師継

うきはあまの袖のしほたれ見るめたになきをたのむ恋の行末

恋乃行平知本郁

皇太后宮大夫俊成女

うきをしのふそのゝむしたにかれのうけの契はつれなく

吉浦恋と　前参議光俊卿

命やすとはかなくしらぬなかめのしぬはのひとりねの袖

皇嘉門院

寄衣恋乃心を

後京極摂政前太政大臣

秋恋はやすくもあれと世のつねのしたにひとへの衣まくらに涙せん

源俊平

さむしろや秋の夜衣かさねても人のこゝろのうきのみそしる

後京極摂政前右大臣

前大納言忠宗

ねまちすなる夜半の衣のかへしては夢にやあはんさよの中山

従二位家隆

ちぎりしを世にいかならんさかへ床あれては今宵とこそ

女につかはしける　　前中納言匡房

菅やとはゞ契りのほどもなくとも梅にかよはせよくも嵐
人よりかしもせけり

一条院清子

我まの身の人に来ぬ都にいはむ毒ともかくら
題しらず　　鐘念九三ト

まのせことをもうらの暮そうきさうかなかるらし
ぬまをみゆつかはしける

左近大将朝光

あひこのあふのをも迎とあとをもの人をと残りらまさ
秋夜題を　　雅宗忠景

いかにまよ秋をもとを結ひ人の出あふにあはれ林風にや
面影まに人よまわか後ぬふ心を
前東光俊朝臣

此の国内わ此時をにもわちくもあきてそれにして人をとやはを
恋歌とて　　権中納言公宗

つれなさのゆるにも月日のまへてそらにたし年比を
後京極摂政家歌合
前中納言定家

わか玉の年ふれ給へたへかたくみゆるのなかにうらやまし

このさると憂く二度まてはさらにける

人々

藤原高光

かゝ河ある花のよひかりいてし菅なさりける

吹田まて十二年侍りける

入道前太政大臣

我身は流に入年の冬と彼みおもて世を風のまま

題しらす

よみ人しらす

山河せ河絶りくゝるわれ花の流にいてそ我は岩にふれ

音東侍り侍ける時つけり

監命婦

うきにし花の春ふれ下草おひぬると思ひ侍れは紫のわすれ

ぬへし

僧正遍照

すゑの露もとの下草おいぬるのかけみる日ゑ

わすれそめ

続古今和歌集巻第十二

恋歌三

五十首歌人〃よめし時寄草恋

後鳥羽院御製

袖の露もあらぬ色にそきえかへるうつれはかはる秋のさくら

建暦二年二十首歌中に

従二位家隆

ありしよのゆめ [illegible] やいはさきのとけそめまし

遠約恋

権大納言公實

秋と君待 [illegible] たのみそこ [illegible] ゆくこと

法住寺入道前関白家百首歌合に

参議親隆

恋ひわひてしはし今まてそのいきたえてもきえぬへき [illegible]

藤原信實朝臣

こひしなん [illegible] あとをさへなくやなかまし

恋御歌の中に

順徳院御歌

偽とおもふものからはなれぬ [illegible]

寄月恋の心

前内大臣

こよひはの [illegible] の月のまちこそ [illegible]

恋三の哥

鷹司院按察

明の志也身まえてゆすみまうきゆ恵まれ母義也なしと

式乾門院御匣

涙のこいし夜を志らと見よ小もぬれて衣なる袖の月 顕親

月まで恋のこゝろを

新院少将内侍

恋せずは月やなれてもみえましを涙がちにて

はるかなる秋の月かな

大納言通具

あはれまでえやくもらぬ秋の月恋しさに泪添ひ

宝治弐年百首の哥に寄月恋と

後嵯峨院御製

月だにもなれしやすくみえずとも袖に頼みの雨気の秋の夜ん

宝治二年百首の哥に寄月恋

花ぞまし小の山のかくれの村雨みゆくなるぞ人の思ひもこえん

後京極摂政家百首の哥合に

法橋顕昭

なけゝの月みまて涼しゆくる也やむかしのまゝに影しのぶらむ

権少僧都公朝

一夜人の寄する旅ねの月に見えても見えぬ月かな

百首哥の中に恋を

中務卿親王

綾人と我よりみまし俤の今は世をへし山のはのつきかな

十五夜の会に寄月恨恋

前太政大臣

三笠の月をしへし人はなしなほの頼みしもとのこころと

入道前太政大臣

あの月は見るのみ花をまよはしくもりはてにし夜半のそらかな

大織冠

玉くしげ二上山のあらはれてこころすみゆく月を見るかな

聖武天皇御製

すまとる海士の塩やく煙の風をいたみおもはぬかたにたなびきにけり

田原天皇御子

大原の山の紅葉を秋の夜の霜にあひて

後徳大寺左大臣

百首哥の中に初恋を

宝治弐年百首寄雲忍恋

身はかくてたえぬる雲のしのぶとも

従三位信実朝臣

題しらす　藤原信實朝臣

結ひ置く夢はなけきとあま人とは上にかれ行の世や初如冬

平政村朝臣

あなたにいわに秋きたりの涙かたにかへしみ袖のなみ衣

寛元百首歌

侍従行家

しらぬ別をしのひて志らぬ人とやまとしか交ぬらん

寄鳥恋　藤原章經

こひてましなと鳥の下にをとなくけるよそもかはらし

後朝恋の心を

藤原基隆

暁乃夕つけ鳥の音はかなくもいてし人乃別をしのふらん

道念法師

明ぬとて帰る鳥の音につらきなみたの別にしかせ

葉手頼八千世しらぬやとひける恒よ

読人しらす

梓乃への千代とちとにかなせれとき一夜秦ねも名残やなほ

元良親王家歌合題

恋のとも遠ひ思ひとて暁の別乃床れなれぬらん

恋乃平[illegible]

藤原信実朝臣

こひしなの袖よりは月影は海の浪しもやあれわたるらん

題しらず　　小侍従

ありあけの別の後ぞぬるよはこれの袖のぬれまさりける

暁恋を　　土御門院御製

おもひねの別やはてゝなきけりと暁の鳥もなきぬる

衣通姫のをのがすむまねとのみ見えしくるとも

の世語て　　光孝天皇御哥

かゝるよは袖の雫と枕のけしきかはらでそみえし

寛喜二年百首哥よ恋の哥

前太政大臣

あらましにみしとめぐらおもはさてしがなくともしばし別路

光明峯寺入道前摂政家百首哥に寄衣恋

前中納言定家

やすらひはおもへ今こそしのぶれどまたあけがたにしらむ月かげ

建保四年百首哥奉ける

従二位家隆

くれなゐのうつる日の袖をしのびつゝたのみてまたるゝなれけむ

洞院摂政家百首哥に

後朝恋

わさ森の人の手枕おもひ出てまきて海の月のまれなるよの

正治弐年百首哥に

慈鎮大僧正

よるのまゝに朝ぐもを人のなき里に今宵の

暁月と

祝部忠成

暁は〔…〕別をおもふ時とはしも〔…〕

従三位保季

またれつる〔…〕月は〔…〕

前内大臣基

思ふ事〔…〕月〔…〕袖の別

寄月恋と　真昭法師

形見とや袖の別にとゝめけん涙にやとる有明の月

中空に〔…〕入かたに〔…〕

前東宮大夫

名〔…〕月〔…〕

定文家哥合に

坂上是則

〔…〕の月〔…〕

太宰帥敦慶親王

秋の色を人にも見せん白露のなかなか見えぬけしきにそ
建保四年百首之中
西園寺入道前太政大臣
おもかけは猶たちかへる夕暮の空なる雲のはてそかなしき
遠三のところ　中納言
まつよひの人を思ふもかひなきに
中務卿親王家百首之中
み山木の枝ふく風の音まても
千五百番歌合
皇太后宮大夫俊成女
こひわひてまちしその夜のあかつきのなこりもつらき人の心は
寄月恋　前大納言為家
あひみしも別はつらき暁のなこりの月のかけにのこれる
前東宮重頼女
年をへてなれにし人のかへさにもなほあかつきのわかれをそ思ふ
歌合に暁恋
後京極摂政前太政大臣
わかれにし暁の月をかたみにて
百首歌の中に
衣笠前内大臣

みをしれは人のなさけのなくさめにかはらぬ恋の春をまつらん

恋乃哥中に　前関白左大臣

思祝の哥よみ侍りける中に

光明峯寺入道前摂政十首哥合に

寄祝述懐　洞院摂政

たのむかなわか君のためと祈りおきしむかしの人のこゝろ(?)のうちに

後京極摂政家百首哥合に寄祝述懐

太政大臣家

祝ふ身も(?)千とせの松の(?)かけにこそ[illegible]わか君の御代

建保四年百首哥　僧正行意

おもひ(?)えていはぬ心のなかなかにしられぬ身をはうらみはてなむ

哥中逢恋と云ことを

康祐雅経

思ひわひ身のうき草のねをたえてさそふ水あらはいなむとそ思ふ

恩顔とて[illegible]　小野小町

あはれてふことの葉ことに人のみよにかはらぬ心なりけり

哥よみける人のみなかくれにし世中に[illegible]

又おなし祖を[illegible]時寄哥恋

今上御製

思ひけるとも人の作らぬ暮ともかれみなる花かな
一本の花を　式乾門院御匣
すゑさかる花よりも世にはなれぬやうたゝへ暮ぬれはなれ
鳥寺とて　土御門院小宰相
天の原そらにけり長雨新をといふ春はとふやうの人
人の心をまたよそに身の命来まて源氏多
なとりほと待つ徒　従三位
くしなの浪をしたゝまりてこのまゝの名残おもひて
寛平御時后宮歌合歌
よみ人しらず

秋のよの長き廉の音にそてあはれをまてはさ君のまたねにた
時わかぬ人の住吉まもりていつとての松乃
紅葉てもまかせても思ひかへこそおもひ待世
まとり　馬内侍
君か世は秋をも君を津の国のなかへの橋と朽ちぬとをしれ
寄名所祝　前大納言伊平
時しらぬ浪よりふかき山の下葉も秋ぞふる山の
忍ぶる恋の中に　中務卿親王家小督
ひとりのみ人ゝまちて命とも思ひけふにいのちをまた
今上御製

なつ来ぬる人の心はやけふ物をおもふ身のみそなきよ

百首ノ歌の中に　前内大臣基家

時雨ゆく雲の里は秋よりくれわたる身そおもき物哉

光明峯寺入道前摂政左大臣家の百首歌に

名所恋　前中納言定家

あひ見ても袖のみぬるゝ名取川いはぬ思ひにせゝもなし

恋哥あまたよみ侍りける

しら河の人にあふ瀬もなにそこれよりは逢ふ月日つもれは

女御まかりてのちうとくなりけるころ山ふきをさ

返侍るとて前太政大臣

天暦の御歌

桜花とみに春風ふきそめしはなの色には

返し　按察使駿河丸

やまさくらをしむこゝろも日数経ていくたひ春の色にける

大伴百代

かりかねをなれといふ大空のみなれ初の神をまたれん

恋哥とて　後京極摂政太政大臣

みかさ山のたもとにかゝる月はあやしきのふも人をまつ

月前鹿百首の時家の歌合に

右近中将経平

白露の[illegible]
[illegible]
[illegible]と　光俊朝臣
行舟[illegible]
[illegible]
皇太后宮大夫俊成
あはれなる[illegible]
[illegible]
よみ人不知
見せはや[illegible]
[illegible]

續古今和哥集巻第七

神祇哥

題不知　　よみ人しらす

あまの年はふる世を絶えしてとこ長く七新枕せよ

光明峯寺入道前摂政家十五首哥合に神祇

前中納言定家

君すめる三年ふる神の山の松にかゝる月日かな

百首の中に

前大納言光頼

とよのあかりの人の世にいはふこゝろもはてしなき

八条院高倉

思ふこの世をあまてらす神のまもるとこそ聞け

藻壁門院少将

絡みてなき世のまよひも人の心もうつる世よ

前参議実雄朝臣

いかなれは人をもうらむ人をもなほ世にまもりけむ

源雅言朝臣

ますらをとしてみたらしの宮やまのゆふしての

大江忠広朝臣

夕されはかみのやしろの形見なれ

権大僧都範宣

思ひ出て稀にも浪のよるしほのその名のみして昔やいとゞ恋しかるらん

冬恋　　菅原基綱

袖にこほる涙の床は山のはにうつりて寝ぬる霜の下折

名所題歌中に　前大納言為家

高砂の山の山鳥おのかなくなるをとも我おもふとすなほ

ぬしもなくひとりねしけるひとのこと海よりをぬと

こそかひつるみをとも

一

左京権大夫

おのれにもみるめはなみにたゞよひて海士のたく藻の塩やかぬらん

題しらず　中務卿親王家小督

うらやましや今日は人の思ひ身をかへてはれんかたまに

百首歌中に　前大納言為家

恨ても海士の刈藻にすむ虫の名をおもひかへすはつれなかりけり

恨身恋と云事を　従二位行家

何かその種をとめぬ海士の刈る里の塩たるゝこともかな

千五百番歌合　後京極摂政太政大臣

あふせなきやすらひとするかの男子の浦ごとに涙のみながるゝ

題しらず　柿本人丸

志賀の海士の塩やき衣なれぬれど恋てふものは忘れかねつる

貞文家歌合　忠岑

[illegible]

衣笠内大臣

[illegible]

忠義公

[illegible]

題不知　よみ人しらす

[illegible]

紀貫之

[illegible]

謙徳公

[illegible]

亭子院御製

[illegible]

中務

[illegible]

大納言師氏

[illegible]

[illegible]中将

人丸

[illegible]

人と思ひせしそ源乃山のゆくへはなきをのみ袖をぬらせ
うき玉乃をのみなりけるとおもはれし思ふみかさねて思ふかな
後鳥羽院御哥
萩の葉にかはりし世のはるけさも思ふ人つらき夕暮の空
大納言経信
風はなほをしもわれたえずね待人のこゝろかな
源重之
秋風の身にしむ夜はの恋しさにたもとも人を思ふかな
ほのかにもしらせてしかな春霞かすみのうちに思ふこゝろを
殷富門院皇后大夫

逢恋と云ことを　六条入道前太政大臣
ふかくちきりし人のこゝろのかはらすは人のうきにもたえぬへき
しなん
後京極摂政家の百首哥合に帰恋と云ことを
前大納言為家
ねぬる夜の夢をはかなみまどろめはいやはかなにもなりまさるかな
大蔵卿有家
あはれ何秋の夕暮のさひしさにわれもともにもなかぬ日はなし
寄恋と
大江千里
逢ふことのなきに思ひは身にしみて我のみ人をこひわたるかな
百首哥の中に　従二位家隆

あつまちに秋の夜すからてりまさる月にみかきて
山念　　　　権中納言国信
思ふ河まつ出るなりかけの月光にかはらて月のひかりとか
天徳四年内裏歌合歌
中務
ことならは雲井の月となりなん恋しき影やそらにみゆると
忠寺わすらしよみ侍ける中に
前中納言定家
山の端にまちいてゝかゝる月影のふかみ〳〵しほまはせさ
逢不会恋と
入道前太政大臣
わひぬれは袖まさへ月の比なれては志のふゝ哉形見なるらし
後鳥羽院宮内卿
うちはけの人なくの稲葉を何とかはみれともあかぬ
わか恋は何とかはふらふ雨ふらてそれとて見よと思ふよ
前中納言定家
建長六年三十六首の合に寄衣恋と
従大納言典侍
西窓はふらてもあらん衣かハれしまれ袖乃涙より
題しらす
柿本人丸
へさ秋とこそ下紐むすひわかともよ衣やれ

山川のいはまにとけて梅かえのいとめかしくそにほふ

寒梅を　　皇太后宮大夫俊成

梅か枝に今朝ふりしける雪の上の梅の花かにてはとりとめん

後京極摂政家百首歌に

高松院右衛門佐

梅か香も春の若葉はいつはしらすゝみけるをさそふ

春の行衛をしれとにこそ匂ひけれ

六条院宣旨

見渡せは霞の奥のそなたよりにほひくる風の音にこそしれ

法成寺入道前摂政家百首歌をつかうまつりけるに

題しらす

堀川右大臣母

あるしをはたれともわかぬ梅か枝にいかにしてかはにほひとふらん

二月やよひの月のゆふくれにおはつかの春のあけほのにしつつ

寛方朝臣

わか宿の梅の匂ひにさそはれて春の若菜をつみにいつらん

六日女のけふはひつけ

右衛門督

ひとりのみなかめて散りぬ梅の花にほふを袖にとめてかくや

後京極殿の御もとにて梅を手に折りて袖にうつれるにほひこそ

いふ人もなき梅の花のちるをあはれと見る

業平朝臣

忘草おふる野へとはみるらめとこはしのふなりのちもたのまん

百首の歌の中に　式子内親王

尋ねまえかこととみても嫁なふるあれの野への夕草

恋の歌の中に　中納言家持

秋の野への秋萩ちりゆかは君の形見とみつゝしのはん

在原元方

秋萩の下葉よ人をわすれなはいつやくらみのよなゝあ

寒き寒草葉とゝむる山路とも

俊恵法師

日本の花の色ひきかえて紫の阿波してもとの根祢

題不知　曾祢好忠

まくそ原風ふくたひに吹出する人も根そゝはほ

清原良宗

秋の露かゝる玉のかつらきよしめのきりにたえぬ人の来ぬたに

梅ね親王

ふる郷の人に身よそへて露をおきてやとそに身やゆかん

宝治二年百首歌に寒草を

大蔵卿有教

はなさきてあるにいや田子乃ね盛もすくる人の心と

洞院摂政家百首歌の中に
前中納言定家
たつたの山秋にこそ人とめかるあふ坂の関
百とせの中よ

中務卿親王
何とかくたのめし人のまことにてつらき心の人のかと
いつはりと山のはならて草のはにそとゝまる露の月

月花門院
今はたゝおもひしらるゝ身のうさをつらきにつけてなけきのみそする

急乃ある御歌
安嘉門院高倉

恨こそ人めつゝむも忍ふにはつらさにたへぬ袖の色かな

建長五年三首会に寄夫空恋
大納言通成
偽とおもふものから小夜ふけて人の命をなにたのみけむ

題不知
中務卿親王
忘れてもなほたのまるゝ心こそつらきかなしきつねのうさなれ

弘長元年百首歌に逢不遇恋を
偽ならぬ契のほとのなけきにもなほこりすまにたのまるゝ哉
人よそにきく涙なりけり

従二位行家

人よの為とかくさに難波なるわれはつらんの根とはは

寄虫恋歌　待賢門院堀川

一夜のみ人やとはまし寄る虫のねをとやせんかはかなし

寄虫恋といふことを

右衛門督小宰相

ふる露の山の時雨にぬれやそふ人のそて哉

寄蛍恋を　入道前太政大臣

なきぬらす涙の露もむすほゝれ我うかれける蛍なりけり

寛治二年八月廿三日寄虫恋を

前右大臣

あふみなる世ゝの蛍の世をのみそなけかれけるかなと

女を恨てよみつかはしける

業平朝臣

吹風に桜はちらすともわかみのをさて人のみぬこと

題しらす　小野小町

武蔵野に我ふとさ留めるさまの名をかけて世をいまさらにしら

前右大臣忠

わか涙の雲のいまはしほたれて雨にふる露かは

式子内親王

いくよたちそめなれてやまかはのかゝるよにも名を

急雨　　小侍従

思ふわれよは君に代りて身こそ世にこの世をかくしてん涙哉

久安百首歌ニ　藤原清輔朝臣

りくえにもよそに心をはなさぬとなくらんものを涙すらん

中務卿宗尊親王家歌合ニ

源時清

住の江の松をさへ浦の世をなけきも休まぬ波の絶えぬはしらしそら

題不知

よみ人しらす

みちのくのとは思ふも松嶋のあまのとまやにくちぬ袖哉

人の心のかはるにそ浦の松の葉の松の言の葉こそなれ

とみて花つみ歌　伴勝

まつ世の人の世のよはにかはりし浪風に色にかはる色そなき

松の葉のちりにかはりて

平兼盛

世をすてゝ身はやとまらてそ思ふ命の年そかは

忠ちかの朝臣三百首歌ニ　後ひ有

年毎にそはなれても思ふかなそ急ぬ風にかはれ

藤原入道

急ぬ三の丸中ニ　殷富門院大輔

かはしとてかへし命とそ思ふすてゝ急ぬ世のなかを

逢不會恋の心を詠と

左近中将公衡

あふまてと思ひてこそは又いけるとはふ我命なを

平政村朝臣

何とはし昔はかりはくちそへてたゝいたつらにしのふとそ

光明峯寺入道前摂政家恋十首歌合

寄弓恋

正三位知家

さきまとも引やうらみむありさらはいそやとへと思ふ弦

恋三首の中に

従三位行能

ありし夜の逢ていまよりいつまてかなけくよもあふとまてにはなまし

中務卿親王

きのふけふまたみなと人の心をも恨しらぬ身

建保四年百首歌中

光明峯寺入道前摂政

いかにせむ逢にはしるく雲井をも下紐思ひの何とわすれん

中務卿親王家歌合

小督

逢てまた思ひまさるそしのふるさきのかみなる袖をぬらしき

題しらす

前内大臣

この世にていかにかせまし逢事はわかれのあとに旅

坂上是則

忍ふ山しのふにしられぬ世にも世に年へてもおもひかはらし
ぬまつつとはしれ

中納言家持

思ふこと心のみゆく中々に何のうらみも[illegible]
[illegible]見えぬ

續古今和歌集巻第二十

賀哥

長き世の山の海と

関白前左大臣

よろつ代の秋をかさねて下にしくゆふ草葉の露そ[illegible]

千五百番歌合に

惟明親王

きみか代はやへのしほ風手向すむ[illegible]乃孫と[illegible]

光俊朝臣

すへらきの百代の末もかはらすそ[illegible]

中納言為氏

夏までもけしきは猶はかはらずてまくれは其の後こと
り

慈鎮大僧正より返事百首よまれけるに

前中納言定家

まつ人の夢にはさそ思ふかたの心にみる月の影そやとれる

建仁元年三月尽日撰歌合に会不逢恋

後京極摂政太政大臣

忘れしも思ひし夜わたる小夜ふけて松山の嵐にかこつ月を待つ

建暦三年九月十三夜十首歌合に恋月

新院御製

うき人も忘るゝ道をかこてしもよしみ秋の月のかけさへくらし

題しらす　　菅原孝標朝臣女

わすれしな為過ぬ世にありかてめぐりきて何のむくひかつらき月影

小一条院の通はせ給はすなりにける比よみ侍りける

堀河女御

逢事は年月何と思ひけん待つしもさひしけれとや色の香なりけり

式子内親王

君をまつ見しを春かなしいまは人の心の末ともしらず

安嘉門院高倉

忘るなよつらきも人の心しも思ふ心の根はなやむ

前大納言忠良

さき花たつねて見る春の心わすれぬ此世にもかは花

家十五首歌に

中務卿親王

今はまたあひ見ん事もたえぬる人の形見なる涙なりけり

寛治弐年百首歌

藤原隆祐朝臣

見し人をよそにまた思ひ出の涙の夢にも見えは袖よりもなほ

寄弓恋

藤原信実朝臣

手にならしの人こそなかなか心さへ弓はり月中ならぬとよしの

寄櫛恋

従三位経朝

まれにあひしのちのつましとてまたいつ人をとはまし

寄枕恋

土御門院小宰相

ぬるよはよそのちきりも長き夜の枕さへとてもいのちもみ

忘顔の中なり

平政村朝臣

涙こそしられぬ袖にわかれぬる夢を今は孫の

小町

かのれてとこそあはめいつも来ぬ夜の人をまつとはしけれ

従二位家隆家にて会不逢恋を詠侍

後三位泰光

こりす

あひみてもなほなのいかにこそすくなりてよかれ花をとのこる
忠平とて　醍醐入道太政大臣
夏とものゝ何かはやともなくてまた人の恋しき人
六條殿ともて人の前頭斗りよ
衣笠前内大臣
伊勢風と海士のかりやの木のもとにも何志根に年もふる
弘長元年百首よりの遍不會恋
わふりなるの小舟かしもやかりのむさのにしもうら人の参
題不知　よみ人しらす
ありみるめ何かは知るか海士のまちすけ根てそ袖くちのあれ
小町

人の心ある秋ならねともことの葉にそ色は変りけるはめ
小一条院よりつかはしける
實方朝臣
絶えぬ間なるかみなれぬ流のさの夏のほとり思へ　世り
忠平とて　光明峯寺入道前摂政左大臣
頼みすゝむ心の間にけさもかなき思ふ袖の露
寄鏡恋といふ心を
侍従行家
ゆふあふみの昔の鏡うつ影にみすゝめ人
題己を　前内大臣基

なきなにはたゝかせとやわかぬ紀の国のなかのはかなき

題しらす　権中納言公光

忘れしはいまも袖の色にかはりぬと人てや思ふらむ

西行法師

夏世おもはぬ遠は何ゆゑにまたよにも似ぬいか成人を思ひ

とへかしなさなくは人のわかれをもしらぬ契をまちやはするらむ

曾禰好忠

君こそは人かすならぬ身をしれとなをも契りをかけし人

色にいてゝいまは恨も積ぬれは

入道前太政大臣

しかの浦や夕暮かけてさゝ浪の身にしみわたる

夕色なるらんと

いまそしるふなはしのおきゐの萩と思ひしはしのふや秋の夕暮

題しらす　伊勢

かはかりとおもひしにこのよはゝ人の形見か

清輔朝臣

思ひのたくひもまたもありなむとおもひしとしも契りき

賀茂社三首会に

左近中将公衡

一すちにたのみはてつる身にしあれはあまりにぬるゝ袖

恋乃哥の中より

かくばかりいかに思ひましつらさとも思ひ君
権中納言通俊

京極院右衛門佐

逢まれなるいかなる人と思ひ出わすれけれ
土御門院御哥

忘れぬる君の心の秋風や我身に思ひ見し涙ぞ
百首御歌中より
順徳院御哥

思ひかね来ぬ人の下紐むすぶとも又みだれ流れ出

哥の逢と
後明院太政大臣

わがためにさやの山田の板はしも袖にしるしなきを
建長参年吹田にて十首歌講じ侍し
とき
新院御製

まつ人もおとせぬ夜半の袖の上にうきを知れとや月はすむらん
新院勝内侍

奥山のみねにもふかき雲の上に涙の袖は
中務卿宗尊親王家百首哥中より
土御門院小宰相

いつよりか雪にうづもるゝ里の人の待たるゝ袖にさゆるらん

西園寺中に絶句を

太上天皇

ゆふまくれ遠くこえてみるゝ海まてもかたしきの中川の浦

寄河恋といふ事を

中務卿親王

慶とふみしらぬ床の山川のゆやとりはあひしらん

正三位知家

なかれとも思ふ瀬とはいかなる海はしてすまの浪哉

寄草恋

中務卿親王

忘草たねはわれにやてしけりとも沢辺や人の心結はん

従二位顕氏

よすかなる思ひのはてか恋の秋萩の若えも花

越しけむ

素暹法師

夫れなりとみをせきそへん山の井のあかしつみ新なき忍ふ毛

中務卿親王家百首歌中に

土御門院小宰相

いそきわれそやまにと思ふ山のはのいつのまにかは花のちるらん

西園寺中に絶句を

太上天皇

やまさとは遠くこえてみるまゝに人もかたしく中河の浦

塵とのみなき床の山川のいはやいはねは思ふ人
正三位知家
なかなかと思ふはとはす袖の行衛さのみにてすまん物かは
寄草恋
中務卿親王
忘草のたねわすれてもさけるらんをなし所や人の心なるらん
従二位顕氏
ますらをの思ひたゆまぬ恋の道たえぬ君にそ忘れし
題しらす
素暹法師
きよめなき心とみえは袖のさえ流るゝ涙そなき
三条入道左大臣
たのめすも思ひすてゝは恨ましなかなか中の契忘れん
右兵衛督為教
なかなかに待てといひし年月といはまほしける命なりけん
皇太后宮大夫俊成
そのかみに世にあらそひて久しくはいかにも人のうらみはし
わかれ行人にそなくてやみぬるかちつ影中ふちせと
返事とて
平政村朝臣
更つよかなかりけるを名の残りとならてあふせんかたはね
[illegible]

いかにいはむかたよりのなかに人思ふされもありなん世をそむきし

恨恋の心を　式乾門院御匣

とはれける昔もかれけるさまでたのまず思ひてよぬる袖

被忘恋と　右兵衛督教定

わするゝを我身につらきとおもひわびてしなまほしき人のゆゑや　あまらん

鷹司院按察

うたゝねにおもひしゆめをまたみるも我たのめや思ひ出けん

[illegible]

中納言

まつゆへ思ひうちいでゝかねあたりてはかなくもたのむも何の相ぞん

後京極摂政百首歌に

小侍従

何ゆゑと身をもうらみぬ中にやはしたひもとかで人をまちけん

はし式部のかくれ恋つれなき人のきりのたゝぬかなしき

みふね

しみ人ならぬ

おもひかねさとみてゆくふねのいかなるべしとしられぬるなりけん

ぬし

はし式部

霜のおくねのわさ浪よりなほまさりてなけれはいかなるかたにしらせんと

よみ人しらず

西行法師

一花とて此なれん行の人寄の秋なりとて人の恋しかるらん

家の寄紙中より

後鳥羽院御哥

秋風はさしも山の峰越えてやむらさめの露にけり

中務卿親王

まくらにも涼しき秋風やすゝめし人のなきならん

恋ひそめんと誰をかこちまどはぬ人のためは涙

延暦弐年四月内裏三首の会に

前中納言匡房

思ひの森秋にあきぬはつせの人のまつらん

題しらず

法橋顕昭

わか寄やここえいるおほ更けてつ寝ぬ人の上を思ひ遣れ

前大納言経房

以前三百首哥合に久恋

人知れぬ思ひのまゝにふらしに焼くとも

前大納言隆房

恋の哥

中務卿親王家備前

今こそと知りぬる秋の初めに

洞院摂政家百首に

藤原信実朝臣

わすれじの思ひやまさるらん後のつらさにけれ

千五百番哥合に

小侍従

秋のなかくも思ひに待しいつとせの春のみともいはやせ

文永弐年九月十三夜哥合に絶恋

前大納言資季

契りしより年へてもつれなくある命の郷

日吉社恋文之哥合に

前大納言隆房

こゝろのみ西都なやかれのふかき難しき

藤原以忠かね　一

西頼とよ契りふるつてもなかのけにも世とそれつき也えん

名かれ思ふまて年ふみ給ひけり

前大納言為家

ゆき世なるならぬ見えのうらにりく地乃さやけき人

と袖ふかにし

續古今和歌集巻第十六

哀傷哥

久安百首哥よみけるに

崇徳院御製

花は根に鳥はふるすにたのむらん猶とゝまらぬ世とおもひやは

万葉集の哥なと得侍りて讀侍
しけれ

源順

世の中を何によそへむ風ふけはみえもえしらぬ名にもありけり

題しらす

菅原孝標朝臣女

あはれしらぬ涙しほけくらん親のあはくらてつねなき世

建皇子のかくれて今城谷のうへにおさめ給ける
ことをなけきかなしみてよみ給ける

齊明天皇御哥

いまきなるをむれかうへに雲たにもしるくしたゝはなにかなけかん

天智天皇のかくれ給ひて後よみ給ける

倭太后

人はよし思ひやむとも玉かつらかけに見えつゝわすられぬかも

延長元年三月文彦太子のかくれ給ひけるを
きゝてよみくにゝよみ給ける

延喜御製

春ふかみ深山さくらちりぬれど紫雲なほねは見えけり
或夕に敦慶のみこなくなりて右近の命婦
亡魂とおもひて侍りけるに
三条右大臣
春ことに恋しはちるとさきにけれどわれもわかれん人のうへぞ
延長元年九月右近衛大将曹司にわたらせ給ひそれに
まひける時女御更衣みなさぶらひ侍りければ
の障子にかきつけ侍りける
延喜女御
秋風はをらぬ木の葉の絶えにそおのがちるらん花の見る
同諒闇乃比みてけり侍る
中納言朝忠
花のいろはまさしく思ふかはらぬ人わすれやすやあり
参議好古
わすれしを思ひきかれし花日にぞまつ夜ともみえけれ
右大将定国ありけるほどの家乃桜おもしろかりける
をけるとみてよみ侍る
紀貫之
ちる花も昔は春の色に花見るこそに神のわたらん
女御述子かくれてのちまかりとて

経頼公

みかきに咲たる桜花見るにやかて此宮や是ならん
三條院の御事とおもひ出けるにや
折にあはれは行ともおもひて夜

宣耀殿女御

かくれ住て越の白山雪とけてゆくへも知らぬ波の行末
一条院の御時よ東三條院琵琶をみ給て
ふるき琴の音をよみ給ける

法成寺

思ひいて見はてぬ夢の面影にいつまてか見む

皇后宮定子の後のまゝに此宮にて詠給
ふれは　　　儀同三司

祇園にみえける夜半の寂しき床に散りし花をそ思ふ
男の待けるにと大将の霞の人の空にのみ
たちのぼりけむ　　　大皇太后宮寛子

出し日の影はしるくとも月ぞ人の見ゆる身ぞ
女乃思ふ御方の法師山にまうでて侍りけれ
ば詠給　　　権大納言行成

都にて待ける人の山の端にかへりしやかせよ
贈皇后宮のかくれての後此山の霞と

ゆるして

堀河院御製

あけさらぬ春の山邊のかすむこそよそ人の形見花
後鳥羽院くれなゐの花

順徳院御製

のどかにて春は霞をそなへやまぶきも花ながらしのぶ

大原よりさめまつとうしもほとけさい

入月のかけのはしの山かけにすめる山の影と
まれ人のみの花蓑とほしの花影のさくらまかさる
堀河院のしらぬく桜花の色さへよそにけり
たるけり

中文上總

あはれともおもひまがふにかはらぬ色の花咲て猶をしまぬ
花山よりもみけるに僧正遍照がよめるの歌
れ桜のちりすぎかねてみて

津守國基

何となくたすきの小野の桜花あまた昔の春やしのび
九条右大臣殿の年ふる春はの花のさくら
ちりぬるをみて

心海上人

おもひへだつるもとまふさでたまさかくら心のままに散る桜
建保百首寄桜

光明峯寺入道前摂政左大臣

祝わか君の花のかけにも千世をまもる庭の松かえ

後京極摂政のとゝめおきしそのかみの遺思白

光明峯寺入道前摂政　于時左府

のりふしのためし来

前中納言定家

おくれともさらに月日は花かゝりてつきすなき合

かて

光明峯寺入道前摂政左大臣

みすとにもこの月の色さへも花の物かたり

洞院摂政のもとに見てなみ侍り

別れ昔思ひ出て見よ人のなきかたそあり

人つてなくなわにけふまて郭公とも云

いひとらめ歌　延命法師

郭公鳴声きく給ともえきて此山深と人やしると

待賢門院かくれ給て後服にけるを香隆寺にと

さみたれのなほなゝみ侍りける

堀川

名にし花かたをさめてなのめにてみな帰よ子をなをぬ別は

おもくよそまて此日と此咲とまて

梅原恵女流

明日またちらん香府とやおもふひとすゝ今日人も花を惜

前中納言定家卿すゝめて建保三年九月十
三日歌あはせし侍けるよつかひまで
入道前太政大臣
梅と見し秋の月より白雲のとゞめぬ人の袖ぬらさん
前大納言為家
宇治にすみし夏は月よりふさかる露は三とせの露ぞかゝる
雲の峰と雪ぞ雅成親王
八月十五夜中殿の御会に寄月中之すゝめん
題しらず
殷富門院大輔
ことしの秋の夜の月見ぬ身はあはれ何とてかく侘ぬ人の袖ぬらす
人丸のあとまで秋の夜の月を待ちかね
左近中将公衡
昔にかへる昔の御代やこれも人の行末の秋の雲ぞなく
前大納言公任
桜をみて
わすれ世の昔の花の下に今宵は花に人の家ぞと三度の桜
月は見えぬ人の家
待賢門院堀川
大かたの月はむかしに見しまゝの秋の夜すがら月の身かなしくて
定家以下十二人に前大納言為家卿一条殿に
とくよするを侍けるつぎてより

秋懐旧といふ事を

右衛門督忠定

むかし秋の袖にうちそへて涙にやとる秋の夜の月

家隆卿の十三年に隆祐朝臣すゝめ侍

りし哥に

平時直

あくれも絶とふわ言に年ふる程の涙にそむ朝人

皇太后宮大夫俊成定家卿の母身まかりて

侍りける比いひつかはしける

法橋顕昭

君か袖をなみたとして思ふ秋にまさる秋の袖にぬれし

美福門院かくれさせ給ひて後の御はてまてこ

もりてまかりける比中納言成通のもとより

せうそこして侍りけるによめる

皇太后宮大夫俊成

おくれゐて思ふも露けき山の奥の苔の袖と

ぬれし

中納言成通

なきあとをいひかはしたる秋のよすから人とまつ人

題しらす

従二位顕氏

なき人の形見の煙きえてそのいつもあはれ家にさへ

我乳母の隠れし折その比小白河にてまかり侍

けれ　寂蓮

おりりに緒乃緒を露さへはもろくに梅花とも松
みやの里に待る比

惟宗忠景

並く寿といふなる花を菊花ふかき秋の露
宜陽の流くみ千年の流のくみ
たてまつりてよみ侍ける

従三位忠兼

菊夜袖にやどる露は源時雨秋の別り
高録にかさね年ふりける淵とくらにしてて

袖の上に紅葉の色を見けしきはいつもの涙

源仲業

涙のまりの色とは時雨の袖のまさりける余の
世にすさまじけり秋の色こそ人のまさる
色かはりけるものなり

源兼氏朝臣

世の秋と余の色は身に余まる人の別をまちほる
いふよの身もにけるいつはりてくとをの
めそしぶれ

道因法師

又かはりいつの霜となく涙の色も露もあまる思ひ

題しらす　　高雅上人

つねならぬためしにもれぬ身をもなほなにゝたのみてすくす(?)世の中

西行法師

雑ともかくも見るへき物は春のはなつねなきすかたなる哉

院大納言典侍

なけゝとも濁世をはなれぬ身をはなにゝやすらはんとおもへは

七条院大夫

世の中にある我身とはおもへともかたなしと(?)親のたのしみ(?)

しのふことなくさめしける哉

藤原家光

しの中はかくこそみえけれとおもふをたのみてなる人のつねのありさまにそ(?)かはれるものを

れありとおもひけりける

右近大将通雅

このよをはうき世と人のいふなれは袖ぬらしけり

かならすうき人の心にとめしをしらて待ほとにあひまちなれ

しらぬ

安嘉門院四条

わすれ行人のなさけもいまはあらしと(?)ならはしけれ

いかにせん我身ならくに心月

内に御出ありける日よみ侍りける

前関白左大臣

川の音も松ふく風も音まして涼しき宮の秋の月かな

右大将通雅母身罷りての比雷の音したる

日読侍りける　入道前摂政

いかにせむ消えにし君が下なりしゆふかそらなる鳴神の雷

ことわりも我そでぬれて白の山たかき出かなしく侍りける

時のはつかに侍り

太上天皇

雨となり雲となりにし形見とて桜は花の色やみえん

権中納言宗房みまかりての春にあ

侍りけれはよみ侍りける

前左大臣

みなれたる春の別をかなしとて見せし思ひ出ぞ母かつ侍り

同比前左大臣みまかりにける

前関白左大臣

立帰りつきなき世とはおもへども人の思ひに人をしのぶにけり

父卿の服ぬぎける比よみ侍りける

法印實伊

ぬぎすつるかたみとなりぬ名残ある衣の色もしぼる袖の涙

大中臣能宣朝臣身まかりて四十九日はてゝ
輔親かもとに侍りて侍りけるに母親文にそへ
ける奥よりたつねける

大江匡衡朝臣

冬ふかく思ひこそやれ墨染の袖にておけるなみたの涙

後朱雀院かくれ給ひし時世とのかれて侍る
ふる年つもりて夏衣身にみえとくや
きえしいかにみそつりけり

右兵衛督基氏

夏とても衣いつかはほしもせし秋見ず春より墨染の袖

題しらす　　後徳大寺左大臣

あかりかね年の暮の緑染て涙おほふと海さらに袖
世のなりゆきこゝろをけりをて霜の袖

慶政上人のすゝめによりて詠

関白左大臣

かゝりきてと海の世にはありなから数ならぬ身にふる白雪

返し

慶政上人

なき数の袖もおもひてわけ雪ふかきにはあらなし

九条左大臣女みまかりての年の冬同し月日
よりわくる河へた雪深くよ数まて侍る

基すけにつかはし侍る

前権僧正良玄

志の[illegible]れはなくなし世[illegible]まかりぬるも孫の[illegible]

法印覚寛身まかりにける後[illegible]侍る

法印覚宗

い[illegible]れしつ[illegible]の跡[illegible]世[illegible]別のうらみん

返しに

法印尊歌

[illegible]あはれ[illegible]なりける[illegible]

[illegible]院[illegible]れ[illegible]のいかさ[illegible]

侍る

湛空上人

思ふやと君[illegible]みちしらんにそれは[illegible]

大納言典侍身まかりて後によみ侍る

前大納言為家

わすれし日数よりそ[illegible]

世尊寺とて

清原深養父

いつも何世別れ[illegible]の命[illegible]

堀川中宮とたのみて侍る[illegible]院[illegible]

久親

二品尊子内親王

おもかけとの[illegible]君とともに

かすかなき[illegible]

円融院御製

君かへ春方みちとなき春の別まえぬといはちよをこそ
光俊朝臣すゝめ侍ける百首哥中に
前大納言為家
まちかねし春のなかはのなかそ世にはなれもをしまて
昧ねさき侍りの日よ鈎る
俊頼朝臣
みそきして衣をとこそ思ひの涙とかつてなすらしの哉
ありしに侍りし比都を出てかさ風あまのまよ
そめときそいやかに思ひけしを侍ける
藤原能清朝臣
これや夢いつれか思ふと思ふにもせめてたのめるあはれなりし
なやこゝ侍りし比枕のゆくへ紙よかきつけら
まとなれ
一条院皇后宮
年紀度枕と涙に旅のみそつゆのちりとゝ絶し哉
藤原保昌朝臣身まかりて後かの家より月見侍るに人々まうて侍ける時
すむ人もなきやとなれと月かけはむかしにかはらぬ雲まに
なれ
能因法師
うきを絶てあともすゝ松風にたれか人の袖をぬらさん
雨そゝく月の涙とこそ

入道前太政大臣
あた人のこゝろそめし涙河わするゝ方の涙かな
陳孝よ補経の子乃きこえけれ
二品庵主澄覚
一すちの絵の本とてもあまりに常道なる人の本心くらし
いまにはおのつから南まちて秋ちかうつて侍
と思ひくらしける
信実朝臣
つれなさの月はかなしき人とはまた思ひそて入りあかなり
暁の色を深くとこそ見る
雅成親王
秋ふかきことに山はさめ面ふかく霞と見え明人
和哥の浦まて遠懐三の今ひかり
参議雅経
おもはれてためし人の面影かれつくらは遠風よりの袖乃 秋をを
海いつらきの身ふまたおくもしらはしの比女将
徽子女王
のかりもふつのしさ礼けり
天暦御寿
いそきもとやいつ人の霞の風の花の雪やとやかに

題しらす　　尊快法親王

ゆとなの風はみゆるまよるのとまるらんかや

平重時身まかりて後かの年の暮に

のありけるに平長時のもとにつかはしける

中務卿親王

思ひやる心もさこそ秋風のはけしくなりて袖の涙とならん

父身まかりてのちよみ侍りける

前大納言基良

とふさへに秋をかなしの名をしもおもひは袖の露

題しらす　　正三位知家

たまゆらのなれし別の名残をとおもはまてそ其の世々経ても

参議成頼身まかりにけれはさかりなるを

なけきてよみ侍りける

前右兵衛督雅惟

わかれつる歎のほとは今そなけき老の

世の人のなき数と思ひてそしる

貫之

うき世にはいけるかたをそなき人のあはれをしのふ

月の夜高野上人のもとにまかりて参

そのことなとかたりて侍けるに

海りてはなれぬうきよの思ひそく夜月
見よわかのありける時ぞみゆるかな

慶政上人

なかめわひてひかりそへけり秋の月なくさめかぬる思ひの程
郷しき

西行法師

ことはりや何かありけし世にある身すてよと
志のへて

続古今和歌集巻第十七

雑歌上

文永弐年七月七日白河殿にて七百首歌よませ給ひけるに年内立春といふ事を

太上天皇

初春とやいはまし年のうちにこそ[illegible]
日かすと

入道前太政大臣

君かため山[illegible]年[illegible]

百首歌よみ侍りけるに

正三位知家

[illegible]年[illegible]

建保百首歌よみ侍る時

皇太后宮大夫俊成

まほ[illegible]松の[illegible]千年に[illegible]

人丸

まきもくの檜原[illegible]

僧正遍昭

足引の山[illegible]

洞院摂政家百首に暁を

前中納言定家

志賀の山[illegible]たかねにひとりまつ暁の[illegible]

前内大臣基家百首歌よませ侍りけるに

前参議忠定

いくとせか[illegible]すみなれし[illegible]

題不知

土御門院小宰相

哀にも富士の煙は[illegible]

大[illegible]文人百首歌よみ侍りけるに

後鳥羽院御製

霞さへ[illegible]

岸柳を

花園左大臣

しらなみて(?)は海[illegible]岸[illegible]

よみ人しらす

前大納言基良

住吉の[illegible]

題不知

前内大臣

[illegible]時にあひける[illegible]

枇杷殿の桜の[illegible]

民部卿[illegible]

花の香ハ昔にかはらぬ軒はや昔の形見なるらん

昔見侍ける所の梅をとひ侍りけれと

みえ侍らねは　　馬内侍

年をへて昔をとむる梅の花むかしわすれぬ香そ匂ふ世よ

題しらす

左兵衛督高定

袖の香ハ花かをる梅の花をしらぬか春の人に伝(ふ)らん

右衛門督忠定

いにしへの君をしのふにならすの月の袖にこそ(うつ)れ

順徳院御製

梅の花にほひをとめよあはれ(の)国の春の田は枯たるまゝの時(ならぬ)

土御門院御哥

うき雲居るかすみは(ち)らしとやしかはすれは月の影

堀河院御時百首に　前左京基俊

世の中ハとりうき(わた)る(や)雲居に(か)ゝる花にそありける

待花心と　　入道前太政大臣

年にまた世をかさねたる花の所にやそとせあまりはなれ侍らん

三百首歌中に

中務卿親王

花さかぬ吉野の山の花ならて桜とみえし白雲

前関白大臣家の百首哥によみ侍りける

従二位家隆

みよしのゝ松のあらしにちらぬ花の色なる
花の雲かな中々に

中務卿親王

たまさかに人の心もうつりけるかなしやなにそ山さくらかな

前大納言為家

花さかりはるの山へをあけほのゝ霞のうちの花とみえけん

建暦二年三月南殿の花を見て

後鳥羽院御哥

しらくもとみえしはさくらなかりけり雲の上なる花

参議雅経

かすかなる春のみやまの花のいろにかゝる雲のいつもさくらか

弘長元年百首に花を

前大納言為家

いにしへの吉野の山の桜花いく春をかはさきてちりけん

文永元年龍田尾の花見て

太上天皇

をのへよりさきちる花の色もなをいくよの春の色をなかめん

前中納言隆親

のとかなる花の色もうつりけりいくとせの春をなかめん

題しらず　後鳥羽院御哥

なにしかは花世るやわ吉野の山の桜のあらはれん

中務親王家五百首哥

藤原光俊朝臣

浮世をはいとひてすつと思へとも花ゆゑくもる心なりけり

殿富門院大輔三條に侍ける人に寄けるを給はりける

権中納言長房

花の名残をしまの思ひ草わか身の花さかりにけり

草庵のおほくにも花れさきなるとみて

貞慶上人

わくらはにまれなる人とゆふくれは春をしむらん花そ惜しけれ

藤原信実朝臣日吉社にて百首哥よみ侍けるに　山花　祝部成賢

桜花さきぬるときは白雪のふりつもれる山とこそ見れ

文集に百花落如雪両鬢垂作絲といふことを

按察使隆衡

みな人も昔の春はまちけるを花てふ老木もふるさとの

西行志侍ける時花の都にやまみえしに見ける　西行法師

わきて見ん老木は花もあはれなり今いくたひか春にあふへき

老桜をみてよめる

権律師慶暹

花乃色は[illegible]とつふみなねは老いまてわすれしを[illegible]

[illegible]とてよめる

権律師仙覚

西[illegible]の[illegible]時は過なまゝかや花のみなすらん

前大納言伊平

むかしおもふさくらの[illegible]袖まてそのつきにける

ふるひしらる春

伊勢

あさにけに昔を思ひて花みることも小桜をそふ[illegible]

またなきに何の色とそまけの松のおちこちとよみ[illegible]

前中納言隆家雲林院の花見にまかりて

ちりかゝりける桜を折りて見せにつかはしける

くれは

小野宮右大臣

みなかみの清きにちるは声あるものをもてなせる春みし

花乃[illegible]けり

西行法師

ねかはくは花のしたにて春しなんその二月のもち月のころ

藤原伊長朝臣

夕暮と

みをしれは人のあやなさに春ハ海さる花の色かな

尚歯會哥よみ侍けるに

藤原清輔朝臣

ちる花ハ後の春ともまたれけりまたもくましき我さかりかな

千五百番哥合に

前中納言定家

桜花うつろふ春をあまたへて身さへふりぬる浅茅生の宿

寄花述懐

藤原為継朝臣

山陰の岑の木風桜ちるらしよそにみる花のさかりを

百首哥よみ侍りける

平政村朝臣

さくら花ちるをとかめて世中のうきにかはらぬみちやなからん

題しらす

藤原頼景

行春の跡をは山と思へとも山桜さへちるをあはれ

平時茂

人しれぬ深山かくれの桜花しらぬにちるをたれかをしまん

平時廣

そむきても世をあらし風さそふまてうき世や花のちるらん

土御門院小宰相

わすれなむ世をうき身にも桜花さくらばかりはなをや恋しき

大僧正行尊

山深く入にし身にも百日のなかばの年の花のあはれは

百首歌よみける時

皇太后宮大夫俊成

かくしつつ別れと思へば世をすてし身にもさくらははなやかにして

昔春の山の花を

正三位知家

世をすてし身にも昔をしのぶらむなれし

この里の月やいつよりあはれなる

建保百首歌に

従二位家隆

花の色の春の名残の年ごとにかはらぬものは

夜のうちの春

源重之女

うちかへし夏の夜ふかき夏の夜は

卯の花さかぬ

題しらず

小野小町

これ花の色はうつりにけりないたづらに我身世にふるながめせしまに

郭公

法印良覚

ありあけて出しほ郭公山たかくよそにふきちらしらん

源俊頼朝臣

右近の馬場の前なるさくら人まちかねてなくか

素暹法師

すぎにけりまつしほまつ山の郭公なきまとひにもことに袖ぬれて

よし

中務卿親王家百首歌

前参議基政

明かたとおもひてもなほ花さきのこゑにあやなく郭公

経信卿家の歌合に夜郭公といふ事を

刑部卿頼輔

待つ音をきゝてそ郭公おもひかけぬ世にこそなけ

延喜皇后宮大輔

ゆふぐれに待ちかねたる郭公をはしのゝめに夜ふかくおとする人をまつらん

雅成親王

はかなくも夢のうちにそ郭公きけはまたなく夜をかさねつゝ

百首寄

前大僧正為家

おもひたえぬ人にきかせてたゝひとこゑの郭公

夏草をしけみ行

輔仁法親王

夜をこめてなくや郭公はつねをそきくなれ

五月雨をよめる

法印尊海

あま川の水のみなかみはれ出て山のはもみえす又月もなし

夜風とふけりけりと

法印寂信

夏山の峯のみとりの松稍に待人まつか流るゝ風の音かな

湊夕立といふ事を

平時親

夕立の雲も色濃きみなと舟の帆の上すゝしく流るゝ涼しさ

題しらす

安嘉門院右衛門佐

人しれぬ森こそあれ河近き蝉の声涼しき神の社の遠

六月祓の心を

土御門院小宰相

みそきする瀬よりや先に大ぬさの流れていかてよるにあらぬ

題しらす

忠義公

夜をのこす月のよるまの秋風にあけぬやみよりはたすゝしき

中務卿親王家百首歌に秋

ゆふくれの風ぬる秋の袖の色に涙に秋や来ぬらん

寳治二年百首歌に早秋を

藤原光俊朝臣

時しも月とわかれゆく秋風吹袖にも露そ結ふ
秋三の月中なり

藤原秀能

なくさめの涙は露にしほれ侍ぬ衣明かし松の袖を

天台座主澄覚

浪よりも思ひや末の秋く風吹はかゝる夕暮の空

光明峯寺入道前摂政左大臣

伊勢志まやわか松原みちといふ浦にけて秋風そく
百え青年の時海路と

前内大臣基

松浦の人海しそ志出けの名を照ゞ秋の塩竈也

題しらず

宇治入道前太政大臣

玉今宵拾いしの篠とまるの名をもとの九門跡
枇杷殿にてさゞの刻れなと

前参議義孝

名をとめくはるまゐや色にたゝ
あ千そ青にみ給ふかり

従二位家隆

秋風に靡くの萩のはしるに荒るゝやと海昔のと
題しらず

権大納言公実

志らつゆもたへぬ秋萩のさなみたれて深き志るしそ

閏九月尽日おなじ月の家十六首歌

人々よみ侍けるに上西門院よまれける

侍従行家

今日のみの暮ゆく秋の草葉にもおきてはかなくおもほゆる惜

河原院にてよみ侍ける

恵慶法師

草しけみ庭こそあれて年へぬるわすれぬものは秋の白露

秋の歌の中より

源信海

なれぬ身にしむ秋をかなしと老てはおもひやかけしかな

藤原隆親

秋をへてかはらぬ年のねさめにも涙もろきは我身なりけり

述懐三首の中より

源兼康朝臣

かくしつつ秋のよのおもひのさかりはこよひしも尽きぬ秋の初君

三百首歌の中より

太上天皇

名のみこそすみうき世ともおもひしか秋のすがたの名もなし

日数へてさへりける三の舎に

正三位知家

思ふにも霧さともに色小萩原みたれん秋の夕を
櫻乃花よりつけていひけり

粟田口贈太政大臣

あさかおれ行さの花乃露よりもあはれ似たる夕暮もなし

源英明朝臣女

人乃心の霧のなふさとみ秋にあはれなりける秋の夕暮

百首御歌の中に

順徳院御製

人ならぬ岩木もさらによかなしきはみつの小嶋の秋の夕暮

秋夕を

中務卿親王

わすれしを行れ秋の夕への空ハれ猶さへいとゝ忍ん

秋哥の中に

権大納言教實

しもよりも雲霧乃谷の涙さへ袖よ志ほる海棟の夕暮れ

藻壁門院少將

草枕の露もよそ成秋かしる人の袖乃色かなきは秋の夕暮

百首御歌の中に

後鳥羽院御製

かくはかりわかみハ秋のいくとせよ花のうつりける秋の浪

ゆきかへる海の花の行方をさそふともまよはぬ秋の影しき雲
後鳥羽院御製

大空の晴のまの湖にて有明の月と思ひ夕暮には秋風そふく
正三位家隆

にほの海よ秋の夕へとなかむれは世にはうき月の影にのこりて
月寺とて
平義政

おもしろと思ひとふて見ることも思ひ余る月とならん
従三位忠兼

根さすらん月に秋のよし秋の月見るかたは花と思へ涙かな
權中納言長雅

いたつらに袖やぬれけん旅の月心とまりて涙なからん
従二位成實

いくとせの秋の夜すから秋と思ひて袖の涙に月をやとらん
平時茂

身にしむる心の色の秋の色をとめしわか袖はよそに見えしは
雅康朝臣

なにことも思ひつつけてこん旅の月涙のうちはけせ世をもうらみん
秋懐旧といふことをよみ侍る

むらくれ秋のあはれにも問ふ昔の秋の露落て
前大納言忠信

おほすの月ひかりてしに
なれ〳〵て秋にわかるゝ月影にさもこそは袖の露けさ
東三条院
八月十五夜月宴あるへかりけり
天暦御哥
月ことにみる月なれとこの月の今宵の月ににる月そなき
題しらす
前大納言為氏
よゝふる秋のなかはの月かけはいくめくりしてみかよひけん
秋よすむ月とみてやもろこしの青ゝゆかりけり
入道前太政大臣
まとゝおもひねとみしよはいつく月に袖をそへて
後鳥羽院位におはしましける時清所
りうけてすむ月とみはるはいそ
きりにとらへぬ秋とそしるらん
義仁法親王
清きも人月の比なれやそて屋まて雨雲水
題しらす
行く秋の月やゆかぬ夜かすのなるゝさき〳〵
順徳院御製
為相卿家に五十首歌よみ侍けるに
右兵衛督基氏
霜の色のさえゆくまゝに世を遠み

廿三首に月紙

中務卿親王

露とのみ袖にくだくる月の影かほし涙や秋の色と志らん

弘安元年百首歌

藤原信實朝臣

今はとておもひねぬ夜と秋の夜の月よ涙のなきとしらん

百首歌合の中に

從二位家隆

思ひしはわすれてさへうつろひゆく秋も袖は露志るけん

秋の哥の中に

能因法師

山里は秋にさへみえ墨染の花は秋にも冬枯にかれ

庵後に落葉とみて

入道前太政大臣

しらえても見ぬし涙をかはす哀まよすくすむ庭の露ふかし

藤原能清朝臣

秋の葉も色かはりゆくあはれさに涙も秋はかはらさりけん

くれても秋とおもひそめし袖はなほ涙とまらし

備中國湯川といふ寺にて

僧都玄賓

山田もるいほにこそあれしなき世秋くてぬるゝ袂も　ゆき
長月の晦日はいとゝ何くれよも時雨けるを
きゝてとふ人のあれは
右近大将道綱母
袖ぬれて時とふことゝなけれとも時雨ふりける
神な月の比山科の山庄に侍けるに時雨し
侍けるの日女房のもとにつかはし侍ける
前左大臣
ト時雨ふる山科の里人しらす時雨ふる人のおとつれも
いかにせむ
ふとしらす
音すなる吉野の山の初時雨かなみなみよ見よ
題しらす　平泰時朝臣
山川の瀬やたえすなりぬらむ木の葉そみなそこにしつむ
法印覚寛
まれの庭にも木の葉時雨とふりしきて袖にも露のしけき
源具氏朝臣
木の葉ふるやとも時雨ねたえし山の袂の涙
山路時雨と　中務卿親王
あらそへて袖ぬるとや世の中にこのみちのなかにふりしくれ
冬寿とて

衣笠内大臣

神無月時雨るとしもなき空にしられぬ雲の
かゝみ月きえて雲はたえせぬ山のはに

三首講侍りし夕時雨を

藤原範忠朝臣

風さむく夕日の影は雲にのみ見えてもそれとなき時雨哉

中務卿親王家百首歌に冬

前左兵衛督教定

[illegible]波こえて神無月秋のもみちの[illegible]のりこえ木

平政村朝臣

時雨ゆく[illegible]のもみちはにのこる[illegible] 袖ぬれ

題しらす

従二位家隆

かくれ家のをかの世をすてゝ身さへ心の神無月

百首歌の中に

後嵯峨院御製

かの人のまかせてはてぬ嵐すむかたの村雲

建保四年百首歌

僧正行意

外山まて時雨の雲となりにけりしくれふる也

題しらす

侍従具定

ふりまさるゆきのみ木の葉ちりにし庭の初雪

冬歌の中に

藤原伊信朝臣

降そめていくかもならぬ白雪の中にも人の跡はなし

平親清女

ふきはらふ嶺の雪ゆへ雲にあまる月の影そさやけき

正三位知家

あさなにそやまかゝみ鏡ゐる山の峯つもる白雪

晩雪といふ事を

西園寺入道前太政大臣

白妙に雪ふるまゝに暮ぬるは冬の夜ふかき月の影かも

冬の歌は

中宮大納言

年くれて雪の深きも忘れけり人の心そはかなかりける

建保常光寛すゝめ侍ける七十首の歌よみ侍けるに

皇太后宮大夫俊成女

たゝきすてすきにし世をもおもひやる積もりつもれる年はいかにと

歳暮の心を

信生法師

老の身の年のくれこそ悲しけれ月日の過ぬるをし

大納言通具

かそふれは月日ハ雪とつもりつゝ我身ふりゆく年のくれ哉

藤原信実朝臣

ゆくとしもひとつあらしをくれなゝむわかれしわかれの老のかすそふ

續古今和歌集巻第十八

雑哥中

神亀元年十月紀伊国に行幸の時よめる

山邊赤人

わかのうらにしほみちくれはかたをなみあしへをさしてたつなきわたる

越中守にて侍ける時よみ侍りける

中納言家持

みなと風さむくふくらしなこのえにつまよひかはしたつさはになく

題しらす

よみ人しらす

難波かた塩干にたちて見わたせはあはちのしまにたつわたる見ゆ

又百首御歌の中に

後鳥羽院御製

わかの浦松原こしにみちくらし又有明の月にたつそ鳴なる

宝治二年百首歌に磯鶴

太上天皇

とくるやはこゝろの海よわかうらにたつそ鳴なる涯しらぬ世

従二位成実

あし鶴のよはひしらすも遊りて小鶴のくはゝ孫をみえなく

百首歌の中に

前右大臣 忠

年々の松はれゝのゝ色かへてなくみちぬれ孫のやちよを鳴らん

題しらす

小野小町

すまの海士の浦こく舟のかちをたえよるへなき身そかなしかりける

人丸

ゆふやけて堀江こくなるまつらふねかちおとたかしみをはやみかも

題をさくりて七百首歌人々によませ侍し次てに羈中春を

太上天皇

神風や花と海のみからなる花の水のまゝよりも雲まの風に舟

洞院摂政家百首歌に眺望

藤原隆祐朝臣

[illegible]浦の[illegible]海の[illegible]

平泰時朝臣

[illegible]

圓勇法師

[illegible]世を[illegible]

中務卿親王

[illegible]

月照瀧といふことを

後京極摂政太政大臣

山人の衣なるらし白妙の[illegible]布引の[illegible]

布引瀧を　祭主輔親

みなかみはいつくなるらん白雲のなかよりおつる布引の瀧

おなし瀧をよみ侍りける

源俊頼朝臣

山姫の[illegible]ものや瀧の[illegible]

千五百番歌合

大蔵卿有家

[illegible]

中務卿親王家百首歌に

鷹司院帥

明石方浦の岩まや西へうつりゆく思の松の木のせ

八幡三十首の歌に浦松を

藤原信実朝臣

里とほみ塩やくけぶりわかれて煙よかゝる思ひの浦しき

題しらず

柿本人丸

大ともの海をわたなふ舟やら住吉の浦にまつ給

式乾門院御匣

幾代まてみちしほたちのぼるまきに手とりのしけくしを

百年も御哥の中に朝まを

土御門院御哥

いにしへやあまたみえしは尾上なる浦松の枝

三百とせの年の中にも

中務卿親王

見しまゝに塩のひかたのあらそひて松よりゆかる

住吉の松よりさきにすみけむ人もしらなくにまた

すみの江のまけるなりけり

清少納言

有明の出るさかりともみ草より住吉の松も共にみえて見し

住吉にまつ住よしの浦松を

題しらす

この哥は屏風絵にかきてはへりけるを
亭子院より世にとゝめたまへしとそいふと云
御寿のことにてそあるをしるしはへりけり

延喜御哥

東ゐよる吉野の河のよとやいはまをあらしの中にかよへはや
同院大井川におはしましける日に松虫と
いふ事をよませ給けれ

参議伊衡

ゆく年はへにける松虫のこゑそいく世をかさねてやみるらん

坂上是則

こゝの河のなかれ松はいはほのかすに千代をかさねてよはひをやへん

題不知　中務

大井川こゝろもみゆきを亀山のよはひに千代はみえけれ

亀山の仙洞にてしみ侍ける三のみ中より

題しらす

秋風の松わたる山の紅葉のまつの千代の前のしるしを
三百年の中に経しと

左朝の家にてよませ給ける松のみの時も月を見て遊る
好法師　人にかはりて百年の寿よ

後徳大寺左大臣

大かたにすむ月影とながむれはやや杉のかみにたてる(?) 千載人

千載集に寂蓮法師 かきつけ

みのうにはとりてとりかうと思ひそで

みゆすれ 素俊法師

月影の小萱すれはかれの行とも更ならす新院いまた清位の時都へいれ給ふと

題そへんによむ(?)

けれは 中将内侍

山風のけふ花の都をさそひけん代のことやさへ

源氏の物かたりすくの巻をよみてよめ

ける人々つれつれに

月花門院

大かたの名残を見まほしき袖たれにかはるすきにけり

醍醐入道太政大臣女

とまりすれ月の葉陰をさそふてけんさそふ袖の

題しらず

みんなよめ

わさまたすと夜をけふみな花をといはれのはるは梅さくらん

題しらず

続後撰にてありかはらん

大宰権帥資實卿

万代のはしめと花を[illegible]世にも[illegible]らん

述懐百首中に

従二位家隆

和かの浦やなくさめもせぬ老のよる[illegible]

建保四年人々に百首哥よませ侍けるに

[illegible]

後鳥羽院御製

[illegible]

光明峯寺入道前摂政左大臣

[illegible]

前右近中将[illegible]を

[illegible]

洞院摂政家百首哥

[illegible]

入道前太政大臣

[illegible]

日本紀を見侍て後[illegible]

當日前太政大臣

[illegible]

正治弐年七月二十日[illegible]遍月

西園寺入道前太政大臣

吉野川花のしからみかけとめて人の心と月にみなれ

題しらす　藤原為継朝臣

見しのこや今の傍に袖ぬらしてしのふる秋を月に逢へ

中務卿親王家百首の中に

前内大臣基家

しはしわかみなれしよりなにとなく心の海の月にうかれん

月の歌の中に

中務卿親王家歌合

なかきよにふかきなとおもて荒の月まつ光世の中にすみけん

藤原信実朝臣

わすれぬと思ふも同じ心に二の法の月そみなれ

世の中のうきもいとひもむかしよりのちをまたへし

こゝろと見る

権中納言義懐

たえむかしの月影をおもひてみかそへの秋

題しらす　按察使隆衡

みかよはむ人のわかれしよりあはれをまたぬ人ともかな

千五百番歌合に

前大納言忠良

うしとてもまたいはいつちのかれん山ふかみなほ住わひぬ

秋乃ころ山さとに篭りてよみ侍ける

前三条入道前太政大臣

世すてなひこそやまの奥山すまに仏乃道もとめけり

建長参年九月十三夜十首歌合に

秋風

入道前右大臣

吹風も声すみけさのまよりも松のあらしの秋の山さと

前右大臣

さらぬたに心ほそきを山さとの夕暮ことに秋風そふく

題しらす

中務卿親王

はかなしな世をすてゝ行人もなほうきみの山の奥まてすまん

寄山述懐と

権大納言顕朝

さすかにも心の山の奥そとは思ひしりぬる世のうさそ

山家乃山の浅深にそ

権大僧都定円

山ふかく何かいりぬと結ひつる庵のかけにすみうかれぬる

右兵衛督基氏

住しらぬ山の奥にも思ひやる我すみかはやうき世なるらん

藤原基政

山里にとふ人のまれなるやすみなつまれん身なりけん

題しらず　　前大納言為家

まさ田のみなしのゝのきけてもまたうしなふやしかはなし

右衛門督

あかすむしかはらせやいつあちにはのこたちのみけん

正治二年百首歌たてまつりしに

前中納言定家

秋きてのとくるはよにあはれさてわすれぬ袖のなみた

おきて

しのつゆとふみわけしもはあきのしのわれわか

しのゝほりてそ花のかたをなかとはるとこそ

よみ侍りける　　法成寺

ありぬるひともあらすなりしよにすむ身のかひやいかにきぬ

述懐の歌とて

まりかやへ人をも人の恨みもみそ身を思ふ身ぞ

後鳥羽院御製

世の中にたえぬおもひのありすりし我のかくそれなりけるを

藻壁門院少将

飛鳥川わたる瀬ことにかはるともしらぬ身のほとにすみし年そへん

源光行

ふちハ瀬にかはるならひとあすか川かはらぬものハうき身なりけり

正三位知家

すみの江のまつもかさねて老ぬれハやそせにちかくなりにけるかな

題しらす

思ひきやあはれふかきにしつみてもなをなつかしくとしをへんとハ

藤原光俊朝臣

いかにせむ袖たにぬれし涙なりとてもしつめる身をいかにせん

大江頼重

ねかへともかなはぬ河の瀬をはやみおもひしつめる袖のうき哉

うきなからなかくよそなれハこのよのほかの岩にながれん

述懐乃歌とて

貞慶上人

日本にて源の家のなかれ[illegible]ともかゝる数にもれぬ

老人述懐といふ事を

平政村朝臣

けふハ世のたのみなくなりし老の身のなけく[illegible]

信生法師

[illegible]

百首哥よみ侍りけるに述懐を

入道前太政大臣

思ふあまりたゝへる老の涙には松はてしかと
絶ぬへき海こそ伝ふる人のあとたのみけれ

題しらす　　真昭法師

昔みし都いさゝか替る民のすみか残ると

あら海のなかれも絶ぬ世々を経て代々

前参議基政

むかしを思へとも是の人をまつ昔の世や

凡河内躬恒

あかつきの雲にはしる紅葉は流のうへや秋と縁

五百年の御代の中まて

源有雅朝臣

人みなの心そらにもみちぬれは紅葉の秋の山

題しらす

刑部卿頼輔

いま我かたゝましるをたのみしやこそ

神無月しくれふりおけるならの葉の世の人にしられて

入道前太政大臣

かれはてゝ今年もくれぬ都のみかり

同し心をよみ侍りし　　衣笠前内大臣

暁の鳥の稀手に思ふさとは稀覚えて我まれ程と思ふ

前大納言為家

寿代田に稀覚えの源なりし也まてに有花つきをかなし　大僧正隆弁　なりけり

ゝ花わかと稀覚えと頼みを中むしその暁ともに鳥の聲ん

建保四年百首　　前中納言定家

明ぬとて今の鳥の声とし我刹の袖わかるゝ世

一　関路鶏といふ事を　　心覚法師

関の戸しめ明ぬの猶鳥の聲ぞ稀なりけり

題しらす　　蝉丸

あふ坂の関にやしきゝきゝと不志いそ七年か　世とすきんとして

續古今和歌集巻第十九

雑哥下

寳治弐年百首哥たてまつりけるに 海眺望

入道前太政大臣

こし方や行末遠き浪の上にてみえしいつくの雲風わか

前大納言為家

明日よりは我身の浪路君にしられぬものとやなれぬ雲の山

洞院攝政家百首哥

源家長朝臣

紀の海や山よりはなるおきの島によそてもこそ浪のたえ

後鳥羽院にたてまつりける百首哥の中に

藤原秀能

此わたりさそふ浪路の古きともなし

題しらす

前大納言為家

こきいてゝ浦の名の浪路の上にやとりせしそのかみの

中務卿親王家百首哥

藤原光俊朝臣

月出てゆくへの人はなこの浦にかへる

弘長二年勅撰のことうけたまはりて

寄御

海邊月を

和哥の浦やしほ路はるかに漕出てちふねまかせて見わたせは
月すむ浦の中なり

中務卿行實

おなしくは山陰にすむ吉野なる河の林の影の月

右近中將經平

秋の夜のいなはの風にふかれてや世の中に月をともなひ
よの人のあはれとも見よ

瞻空上人

草枕唐土とほき月影にみえし出るのさと秋のよそ山の端そなき

題しらす

雲のうへにやとれる秋の月はなほゆく波のよしなし

前大納言伊平

月は花見しよの秋やむかしを思ひ出る袖の波なり
百とせの春の中なり

前関白左大臣

いつしかに人のわすれし昔と思ひ出てあはれなる月はなみたに
今宵の月のかけのあはれと
思ひてよみ侍りし

俊頼朝臣

なき人の面影とゝへるこそ思ひいてゝすむ宿の月かな

月前思往事といへる心を

中原師季朝臣

いにしへを思ひ出るにかなしきはやかて涙にくもる月かな

題しらず

西音法師

世を思ふ涙の西にかたふきて月の数にはすむかひもなし

道命法師

うきなから年へてもなほなかむれはあはれとみる月のかはりけり

秋夜對月といへる心を

太皇太后宮大夫隆俊

月見てはいかに西に急くらんこゝろの秋の思ふかな人

月前述懐といへる心を

後徳大寺左大臣

なにとなく月にあはれを催して世にへしかくやゝくもりゆくかほをそする

小野宮右の合に述懐と

正三位知家

秋もまた山の月ちかき月影はあはれをいとゝかなしかりけり

題しらず

惟明親王

かくはかり三輪の檜原にことゝへは幾代の人のかさし折けん

ときゝけむ

ゆあひのとしのあはみよろこひてなかくちきりおかむ

柿本人丸

年経れとまそての山の紅葉のちらぬ昔に

おなし川の名たかきさとにゆつりはの

千五百番歌合に

皇太后宮大夫俊成

おち瀧津やそうち川のはやきせにいはこす浪は千世のかすかも

百首哥合に野行幸を

後京極摂政太政大臣

せり川の浪も昔にたちかへりみゆきたえせぬさかの山風

建久元年正月柿本新侍にて哥と

はるかなりけれ千世のためしの

太上天皇

宮人といふみそちてすめる昔からのみち

正三位知家

身はたかくなりぬとも我君のちよの数

百首哥の中に

土御門内大臣

たえぬをや今はさかりの

題しらす

中納言家持

ふる人の命は君か松の枝ともせすやはひさしくと思ふ

住吉にまうでてよめる

藤原基隆

住吉と誰のいひそめけむ久しき松の花は

住吉社歌合

従三位頼政

わかのまに年也経ぬるに忍の浦に都の松も我を忘れぬらむ

高砂の松とみて

能因法師

われのみと思ひこしかと高砂の尾上にたてる松もありけり

みるはあはれなりけり

藤原基俊

世のあはれとみえ津の国のみつのはまにすむの松

伊勢よりのぼりて侍けるに比心のうちに

つゝしみ斗を

源俊頼朝臣

思ひなむしのはみるしても手草のぬらむ波なれと

西

正三位顕季

志はやく伊勢の海藤浪の人なからむ物ならなくに

述懐哥の中に

後鳥羽院下野

いつまでかあらむと何とかは世をいとひてもくらさん

硯といふことをよみ侍りける　和泉式部

あさからし昔のあとをたつねれは硯の水は涸れしかな

源宗忠のよみ侍りけると

藤原信実朝臣

いにしへのあとをたつねて君か代に筆のかほりもあまりぬる哉

思ひ出のふるきあとにもつきせぬはことはのはなのちりそ残らん

前大納言為家

ことのはのしけき此硯によろつ代をかけてもみるへき代々の浦

藤原仲敏

中々に思ひやる心はみつくきのあともちりすへき昔の跡を

平長時

なかきよの昔をいまにつたへてはなほかきとめよ代々の言の葉

ひかりまつ

前大納言基良

きみか代のたえぬ道のやまと言の葉のしけき代の浦

藤原隆祐朝臣

このまにも千世のかけをうつし見る硯の跡に

藤原光俊朝臣

みちのあとのいにしへにあるをかきつたへ

三千とせのいのりしこと

為氏

前大納言為家

あまたちのみちは世の人の道なくはみつゝ有てからまよふまし

百首清書なり

左近中将高定

右大将に侍りける時詠の百首清書なり

後京極摂政太政大臣

十首清書也

前内大臣

八雲の?はゝ?の山?さても人の思ひ入らる哉

述懐の歌とて

侍従行家

千五百番歌合に

源具親朝臣

いそのかみ?みち?やさしとは

老の後家に?すゝれて?中にして?をとすゝとて

皇太后宮大夫俊成女

よすがらの月の影にかたぶけば秋のあはれも秋とこそみれ
題しらず　　　菅原教雅朝臣
秋はきて人もとはねば山里の月にこころやすみわたりけん
父秀能の事を書ける時よめる
藤原秀茂
袖ぬらす雨の形見なかりせば草の袂にたれか露おく
中務卿よりおくられける消息の返しに
玉しきの野の葉ごとにおく露をとりしぼるらん
又唐賜大臣　太后文
みよしのの山の春風けふよりはたが袖にかも花をさそはん
述懐の心を　　太上天皇
何事もかはらぬ世の中に思ふ心のみそ身をはなれぬ
老ぬれば月の夜さへやすむらむ
従二位家隆
いかにせん身のはやなくて年ふりぬ人とも世をやまた頼まん
法務権大僧正
入道前太政大臣
よろづ代の人もかはらず世の中をすみえてもなほつきせぬはく
題しらず
従三位通氏
あはれなる神代のちぎりかはらぬに今しかねけり

前大納言忠良

あけぬとてかへれしをかへる人にはしなみ浦のかたにとゞめん

堀川院御時百首に竹を

俊頼朝臣

呉竹のふしながらおもはしけく旅にふるさとのよゝのと思ふかなと
夕暮と降りたの竹にすむなれ鳴とききて

日もあれは竹のそれより見ぬ色のこゝちそれにて秋とも聞ゆ

寄述懐　藤原基俊

何事に思ひ入けん朝まだきかれ野の末に松虫ぞなく

建永元年和哥所の述懐三首歌の中に

前中納言定家

思ひとく春はしらすの思ひ草こゝろそ身にはそはぬとよ
夕のあさ緑を

土御門院御製

夕くれの峯のまよひに白雲のたえのこしけむ旅人のあへなむ

百首御哥の中に

順徳院御製

人の世はまよひぬ神にあらはれしをたゞ君も人の命なりけり

述懐三首に

従三位行能

さりともとあれとまれの世の末をいつかはおもはぬ世にもそむかざらん

かた山寺にてよみける

鴨長明

世ゝの雁も秋ハいかに山寺にかゝるふるさとの庭の月

堀川院の御時百首哥に述懐

藤原顕仲朝臣

わかれ行人をゝしむと思ふにもなを秋の世にいかゝねん

藤原基隆

わか身ハ秋の夜と思ひけり我のみつけきすみて住ぬる

源俊宗朝臣

すみ始しわか身にあまる人の世の古(?)いかてかなしかるへき

後徳大寺左大臣

こけの世よ思のたまを名残とてとしふる人さへ苔の下にのこる

亭子院御製

世の中はいくのよにふるともたのむ人もなきわかれはなし

三百首哥の中に

太上天皇

ねかひの中に思ひの外のかねにまかせて我か身に心をとゝむ

壽永百首述懐を

関白前太政大臣

なかそこの身をやすめてねかひの中にしつかなる人

百首の哥の中に

左大臣

いかにして七そぢあまりの春をへし我身の中の夢ぢとやおもふらん

弘長元年百首に夢を

衣笠内大臣

うき世をば見るもの夢なれはさても夢なる迷ひなりけり

中務卿親王

長き夜の昔よりみし夢なれはいつかおどろくよしもなからん

依経行心

うき花にかくれし夢のことはりをさとりてみてはし

順昇房

色にまよへる身は夢のうちにありと思ひけるかな

権僧正顕真

夢のたにも夢をみてさめぬ此の世は夢といはれし

信実朝臣

きくほどに今はわれ身の老の末の暁ぞわすれぬ
残る命のをしからぬ身をいかでさとりしられ

老後述懐といふ事を

祐盛法師

七十を過るまてなき命をはいつとて世を遁れけん

蓮生法師

いかにせむ小年ふる手をとりとゆかへすへき岩根
中務卿親王家にて寺わたりとよみ侍
りける儀といふことをよめる
大僧正隆弁
絶え果てし法のこゝろみのいしへの行すゑなかれ
選子内親王賀茂のいつきにおはしまける時
ちゝいそきけるこそあはれなり
入道前摂政照子親王
言の葉も思ふ露にてやかゝる時雨ふらぬ日もなし
題しらす
後鳥羽院御歌
たのもしその世を教へしりぬ池の世尊の称光は都にと
釈述懐といふことを
右衛門督小宰相
あまねしる称光に思ふ世の中の世をいとふ心あれと
平政村朝臣
称光すゝむ佛の御法の恩にしたかひて身とならむ
中務卿親王家百首歌に
権少僧都公朝
かくても称光の御法の恩に思ひ出て書しるせ
述懐の心をよめる

平時廣

年は八十あまりと過にし老の心のなにと成らむ

寄老述懐と

前大納言為世

おのつから鏡の影のかはりぬるをかはりてとしの霜とみるらん

百首御哥の中より

後伏見院御哥

これをみよゆきてかへらぬ世のためしはかなき世にそへる人の思ひは

題しらす

從一位左大臣

あはれそもとしなきをそへてまち人をまつとはなしに偽れる世を

千五百番哥合に

嘉陽門院越前

さすかなほ花にはなやすくらむ世をわすれはてぬすてしわか身と

中務卿親王歌の百首より

藤原能清朝臣

つきもせぬなみたに年はふるとみえて雨にいさ海時そしらん

洞院攝政家乃百首哥の中に

正三位知家

うきはてのやとのはなもおもはれし身より海のあまのよすかに

建保四年よみて奉りける百首哥の中に

慈鎮大僧正

身つのかくさに世とうちすてやんいかく君はたのみそ
うらしき香

俊頼朝臣

世乃中はうきよなかなかの身の程と思ひすてすとなれさりけり

入道前太政大臣

志のふこそおもひ世そその名かくれたゝうき我身と思へ
思ふことと侍りける比何かに思ひつゝも侍る

正三位顕家

さてもなほと流れ行すゑのとて越えしといひそへんと思ひたまへん
東少院大臣為藤家のをりおもひ遣り侍りける日

侍従具定母

身つらくてあへ袖もぬれけり思ふ心の程はあさ
よしなき住まゐなるにまかせて

東三条院

赤染衛門

あさましや世の中は人と世にあらんとおもひしも
ことしもはかなくてけるかな人の世の中は年
経てはかなくなりぬる

安嘉門院右衛門佐

さらぬたにかなしき河の世をいとふにも名残をしかるらん

菅原仲能朝臣出家し侍りける又の日
申つかはしける

従三位為継

わけ来つる道は旅の林の風はいかなる色に吹かはるらん

返し

菅原仲能朝臣

袖の色はかはるともわか道はまた世に林風を
出家の後よみ侍りける

前大納言基良

ます鏡曇なき身なれはたちかへりても
明教法師

かたしひの命ある世にかへけるを染の袖

小侍従

ちかはあすそうき世の海をはなれても世をのかれそ
鷹司院按察

はなとさけ世のいつはり

陰明門院大弐

更ぬ月はみえてまたかくれぬのよや

返し

鷹司院按察

今はまた浮世の外にすみなから月は心の雲にかゝる

高弁上人によみ遣しける

平泰時朝臣

なやはかりつねにかくれし世をしらてやみのこゝろはなほそまよへる

高弁上人

人しれす思ひ忍ふもいつまてか世にすみわたる人なるらむ
見えぬ比寺の中なり

後京極摂政前太政大臣

ちりぬるはのこるやとめぬ心にてなほおもひてはせくなしみ

大蔵卿有家

千世万春の今日なり

よもすから花にてすこしもみぬしものゝ世の中を
とひしらぬ

前参議教家

身のうきをわするゝ時はそて濡る袖におちたるかなしきをも

土御門院御製

うき世とていとひはてても山にいかなる人か心ありともしらせ

右近大将通忠

つらしとも人やはいはむうき世の中をいかにせよとてや心のうちに

前関白左大臣

なにとなくいとひはてゝもこの世をはなれぬ心ありとみえにし

寂身法師

夏山のしけみかくれにしつのをやいつかよにすむ

壬生忠岑
すみよしの海にこぎ出る人のいさりするこそかなしけれ
小野小町
あやしくもなくなくあかしつる夜はすその月はみえずも
大納言良教
浮世をそひとすぢにいとひはてつゝ山のおくにあと
藤原季氏中将
いまはやおもひ絶てのなからむもいつか月日のつもり行かむ
権少僧都公朝
清輔朝臣詠哥命は見ゐと

喜撰法師
思ひ見よいかなる花もさかりあるものを世にながらへてかゝるうき
前律師永観
ともすればさかりのかげはうつろひてはかなき世にもこゝろとゞめし
前大納言伊平
ながらへてたのむ世の中のさとの思ひはかなきよそのかけろふ
前参議光俊朝臣
いまそしる道ある世には花なくてさけくべきことこそあれ
藤原言家のわかさとしみゆきあたり
何ゆゑにいまや世にふることもかゝる人のよそにこそなほ過き

續古今和歌集巻第二十

賀哥

後朱雀院むまれさせ給ての御百日の時よみ侍る　一条院御製

二葉より松のよはひをおもふにもけふそ千とせの始なりける

上東門院入内御屏風に　花山院御製

吹風の枝もならさぬ比なれは花もしつかにさかりなりけり

村上院御時斎宮女御の硯のふたに桜をいれて給はすとておほせられける

をりをりに見給ふへき

伊勢大輔

つきせせぬためしにひく嵐山の桜は風もよきてふくらむ

治安三年三月嵐山御幸に給はりて花契千年といふことをよませられし時

今上御哥

君まてわか世のはしめやすゑ花の契すくさん

中納言

花みてそ君のちよはいくちよの春をへぬとも色はかはらし

太上天皇

梅さく比の貴寺をみてかへるみちの田舎にて忍

正元二年三月太上天皇西園寺にて一切経
供養せさせ給ひける次日人々翫花といふことをよみ侍りける
多くの桜を植ゑてさかりに今日の花を翫ましこゝろ待つ

入道前太政大臣

おきさゝへて白河桜花よろつの千世のためしなり

前内大臣

花人のまことにおもひて桜花わきて千とせのまてそさく

清き白河の水のたえぬをみてしるみ侍る

若紫の親王の梅を人よりもとめ侍りけるに
めし

入道前太政大臣

思ふ色まで見る山の若木の花さかりにけふはなりにけり
法成寺入道前摂政に初てみえける
はるかにおもふ事もさこそはおもへ[illegible]
とりみて春すぎにけんよつの人されし

名に

後朱雀院御製

なかれての[illegible]も花に[illegible]
郁芳門院の根合の歌

春宮大夫師頼

そらの月花の都のあやなきにさえてひかり君かよへん

建保六年八月十三日中殿宴に池月

久明といふことを

参議雅経

池水にやとるおほんさへ代々の数にかはらぬすめる月影

醍醐入道前太政大臣

君か代の影をうつして月影もかはらぬやすめる池の

建長二年九月十三夜三首会に

前中納言雅具

くもりなき影をよろつ世かけて月影はおさまる御代のしるし

入道前太政大臣

あめのしたのみとりわかゆる年わかえるなみゝと

留家入道前関白か家にて

池とも候事　源頼綱朝臣

池水にちよのかけ花の千世とつてまつくみんきみと

承暦二年三月ゐなけに行幸侍りける時

池上花といふ事をよませ給ひける

り

中御門右大臣

千代までもすむへき池のおもにうつる花の影

建長六年三月西園寺にて三首歌合

…り桜と　お左大臣

年へたる桜の所はまかりて
内裏百首に葉中花
さき大臣
ゆくすゑもそも花は白きや風吹けは雲の[illegible]
けり

三月三日庵にて歌のよみ侍りける
紀時文
三千代へてなるてふ桃の花のさかりは[illegible]
左右大将をかけて家歌によみて　三条右大臣
之俗名時とひつかはしける
後鳥羽院御製

秋風やみすゑ河のさゝれもしぬ[illegible]
後冷泉院（一条）むまれさせ給ひての七夜
の時清慎（成）公左大臣の橋殿にて[illegible]
修理大夫　前中納言定頼
君をいのる梅の[illegible]
霜雪[illegible]
源家長朝臣
[illegible]にし君か代を[illegible]
題しらす
入道前太政大臣
わかゝとて何[illegible]

文永弐年九月十三夜五首歌合に月と
菊といへる心を　前関白左大臣

菊作りてたえん月と花をともに賞る(?)
詩とて清らかに今に合はすよ山家
息とはいへる伏

左近中将公雄

いく千代の秋をかさねておのれえぬらし百の山の
老月

崇徳院百首歌に

皇太后宮大夫俊成

君が代は菊のえならぬ山人の手にとるいくよ時すらし

崇徳院位の時法金剛院に行幸
ありて菊契千秋といふことをよませ
給ひけり

待賢門院堀川

雲の上にうつる[illegible]みはしの菊なれば幾千代の秋
[illegible]

九月九日に菊花を

正三位[illegible]卿

ももしきにうつろひまさる菊の花白きより万代の
雲のうへとおもひて作りし山の井は秋
けふぞ知りけるよ人のかれことせぬに
つらふのくれなゐぞ知りける

後朱雀院御製

春ひとつ遠からぬ年ふる志かたやあかる白雪も山となるらん

反るとしの春をみてもかはりて年月を

後冷泉院太政大臣に仰て作ける時

入道前太政大臣家にて歳暮寿

ともよみ侍けり

前太政大臣

雪ふれは枯木も花と思ひけり清しに花さく年はふれ

祝言のこゝろよみ侍ける中に

後京極摂政前太政大臣

嘉保二年二月大井河行幸につかう

まつりてよみ侍ける

前中納言匡房

大井川ふるき流れをたづねてぞあらしの山のもみぢをぞみる

此集をさて奏せらるゝとて料紙に

書付侍し

前内大臣

此みちと清くたえせぬ津のみを見よと絶らし

也

太上天皇

和歌の浦よ清く絶ゆることなき和歌の花かひはみける

元久二年三月廿六日新古今集竟
宴おこなはれけるによみ侍る

後鳥羽院御製

いそのかみふるきをいまにならへこし昔の跡を又たつねつゝ

攝政太政大臣

しきしまややまとしまねのみちにしてけふしたまみかきなる

法性寺入道前関白太政大臣家に

俊恵法師

君か代はすゑのまつ山はるはると神よりまつとこれそみえける

千年ふる海松のみとりとそみて

恵慶法師

ちはやふる君をあふきし浜松のしかまつほとに海松幾代ありなん

祝言の中に

鎌倉右大臣

君か代も我代もつきし石川やせみの小河のたえしとおもへは

天の下めくみあまねき万代はつきせぬ海の久しかれとは

従三位頼政

君か代はおほみたからとまもりきて流れのくもゐまつやかみえん

題しらす

よみ人しらす

神かきのみむろの山はいはほいはねにきてそ彼万代経まて

大嘗会によみて流布奉る

傳正行意

あふみの吉野とは何も(?)ぬに君か世はちよとまつとそ

題しらす

前大納言為家

やそ方神に治せし海はのとめてる日の本は國津都は

正元二年大嘗會の悠紀によみ侍りける

中務卿親王

すゝきはらの山の松原てこそやちよの始なりけれ

日本紀竟宴に活目入彦五十狭茅尊

清慎公

池のよ國さかへけるためしにはわか君の御代の今そ始る

後朱雀院の時大嘗會屏風に

贈参議義忠

てる月のかけは家のいはほにさすかけの秋をちよにかそへん

嘉保元年大嘗會主基方御屏風

石坂山

前中納言匡房

いはさか山の岩根のこけに君か代の千年をかそへ小苔むせまて

久寿二年大嘗會年

宮内卿永範

ときはなる時もかはらぬ雲の上はいくよろつ代をすみぬへし

建暦弐年大嘗會悠紀方屏風歌の
長等山　前中納言資実
すへらきのちよのはしめのなからやま松吹風も萬代の声
仁治参年大嘗會
屏風歌　大蔵卿為長
くもりなきちよの松原春ことに花も十かへり君か代
千年百春千々舎り
右衛門大夫
ありしよりかたかき山の松の子代とそまつしら露の
従二位家隆
名にしおふなかのみくにのたなはたの月日も秋君乃かさ

本云
貞治四年十二月三日書写畢
弘長二年壬戌十二月奉　勅
文永二年乙丑十二月廿六日　奏覧之　撰者五人
正東山郷勘判之
本云
應永廿一年三月三日書寫畢
正三位行権中納言藤原朝臣宣滿
永享弐年十二月三日
於燈下書寫之

従五位上藤原親長

文安六年三月十一日書写件本左道々
改直しけれ
柳原
以太大弁資綱卿
本令書写畢
従四位上行権右中弁藤原
親長
件本紙為中納言

下云
享徳元年九月借請御本写之
実雅卿 入道浄空
依名 雅親 自筆

合様合印保紀之不審事
参議右大弁藤原綱光
件本奥書云
永吉二年
終微見之畢功
仲夏中旬候
右金吾藤 判

明應九年七月十日